熊本県文化財調査報告第124集

鞠　智　城　跡

――第 13 次 調 査 報 告――

平 成 4 年 3 月

熊 本 県 教 育 委 員 会

序　　文

県内で唯一の古代山城であります「鞠智城跡（くくちじょうあと）」は、律令時代に編纂された『六国史（りっこくし）』にも記載されている非常に貴重な遺跡であります。

熊本県教育委員会では遺跡の重要性を考慮し、これまでも、昭和42年以来、国庫補助事業等により、継続的な調査を行ってきましたが、平成２年度からは従来の国庫補助の調査に加えて、県の自主事業による遺跡の確認と整備を目標とした発掘調査を実施しております。

通算で13次調査にあたります今年度は、昨年度の調査区（長者山周辺一帯）の東側にあります町道沿いを調査し、極めて貴重な、南北に並ぶ２棟の八角形建物を検出するなど、大きな成果をあげることができました。

調査の実施にあたりましては、文化庁、専門調査員の先生方から適切な御指導をいただき、また菊鹿町教育委員会、地元米原（よなばる）地区の皆様など、多くの方々から御協力を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

この報告書が鞠智城跡の国指定に向けての基本資料となれば幸いです。

平成４年３月３１日

熊本県教育長　道越　温

例　言

1．発掘調査を実施した遺跡は、熊本県鹿本郡菊鹿町字長者原を中心に米原台地とその周辺地に展開する古代山城の「鞠智城跡」である。
　調査は、熊本県教育庁文化課が行った。

2．調査は昨年度に引き続き文化庁の国庫補助事業の他に、県の自主事業を加えたものである。

3．調査に際し、地元、鹿本郡選出の県議会議長 古閑三博氏 より、多大な御協力を賜った。

4．本報告書には、第13次(平成３年度)の調査結果を収録した。

5．整理・報告書作成は、平成３年に発掘調査と併行して行った。
　出土遺物・資料は熊本県教育庁文化課で保管している。

6．発掘調査は、大田幸博(文化課参事)・山城敏昭(同課文化財保護主事)がその任にあたった。

7．出土遺物の実測は大田が担当したが、一部、山下志保氏(熊本大学文学部助手)の協力を得た。
　遺構及び遺物の製図は、石工みゆき・溝口真由美(文化課嘱託)が行った。

8．本書の執筆は大田が行った。また、第Ⅳ章の「4．総括」は 隈　昭志(文化課教育審議員)が担当した。

9．出土炭化物の^{14}C年代測定は山田　治氏(京都産業大学理学部教授)にお願いした。
　鞠智城跡概要の英訳「KUKUCHI NO KI」は渡辺亮一氏(県立八代高等学校教諭)に依頼した。

10．本書の編集は大田が行い、溝口・石工の協力を得た。

本 文 目 次

第Ⅰ章　調査の概要 ・・・

〔付論〕韓国の二聖山城について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・96

KUKUCHI NO KI ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・98

挿 図 目 次

第１図　鞠智城跡検出遺構模式図・・・・3
第２図　鞠智城跡位置図①・・・・・・・・5
第３図　鞠智城跡位置図②・・・・・・・・5
第４図　鞠智城跡城域図・・・・・・・・・7
第５図　第13次調査区周辺地形図・・・・9
第６図　遺構全体図・・・・・・・・・・・11
第７図　20～23号建築址断面図・・・・・13
第８図　20号建築址実測図・・・・・・・17
第９図　21号建築址実測図・・・・・・・21
第10図　22号建築址実測図・・・・・・・24
第11図　23号建築址実測図・・・・・・・27
第12図　24号建築址実測図・・・・・・・31
第13図　25号建築址実測図・・・・・・・33
第14図　26号建築址実測図・・・・・・・34
第15図　27号建築址実測図・・・・・・・36
第16図　28・29号建築址実測図・・・・・38
第17図　30・31号建築址実測図・・・・・41
第18図　32・33号建築址実測図・・・・・46
第19図　32・33号建築址掘形断面図・・・48
第20図　土坑実測図・・・・・・・・・・49
第21図　竪穴住居址実測図・・・・・・・50
第22図　出土遺物実測図①・・・・・・・55
第23図　出土遺物実測図②・・・・・・・58
第24図　出土遺物実測図③・・・・・・・59
第25図　出土遺物実測図④・・・・・・・60
第26図　出土遺物実測図⑤・・・・・・・61
第27図　出土遺物実測図⑥・・・・・・・62
第28図　出土遺物実測図⑦・・・・・・・63
第29図　出土遺物実測図⑧・・・・・・・64
第30図　出土遺物実測図⑨・・・・・・・66
第31図　出土遺物実測図⑩・・・・・・・67
第32図　出土遺物実測図⑪・・・・・・・68
第33図　出土遺物実測図⑫・・・・・・・69
第34図　出土遺物実測図⑬・・・・・・・70
第35図　出土遺物実測図⑭・・・・・・・71
第36図　出土遺物実測図⑮・・・・・・・72
第37図　出土遺物実測図⑯・・・・・・・73
第38図　出土遺物実測図⑰・・・・・・・76
第39図　出土遺物実測図⑱・・・・・・・78
第40図　出土遺物実測図⑲・・・・・・・79
第41図　出土遺物実測図⑳・・・・・・・80
第42図　出土遺物実測図㉑・・・・・・・81
第43図　出土遺物実測図㉒・・・・・・・82
第44図　出土遺物実測図㉓・・・・・・・83
第45図　出土遺物実測図㉔・・・・・・・84
第46図　出土遺物実測図㉕・・・・・・・86
第47図　出土遺物実測図㉖・・・・・・・87
第48図　格子叩き目形状模式図・・・・・88
第49図　韓国 二聖山城 建物址配置図・・97

表 目 次

第１表　近年の調査の変遷一覧・・・・・2
第２表　第10～12次調査建築址一覧・・・4
第３表　調査区地番・面積一覧・・・・・8
第４表　各調査区の概要・・・・・・・・8
第５表　第13次調査検出の建築址一覧・・10
第６表　20号建築址礎石観察表・・・・・19
第７表　21号建築址礎石観察表・・・・・22
第８表　22号建築址礎石観察表・・・・・25
第９表　23号建築址礎石観察表①・・・・29
第10表　23号建築址礎石観察表②・・・・30
第11表　24号建築址掘形観察表・・・・・31
第12表　25号建築址掘形観察表・・・・・33
第13表　26号建築址掘形観察表・・・・・34
第14表　27号建築址掘形観察表・・・・・36
第15表　28号建築址掘形観察表・・・・・39
第16表　29号建築址掘形観察表・・・・・39
第17表　30･31号建築址掘形観察表　・・・42
第18表　32号建築址掘形観察表・・・・・47
第19表　33号建築址掘形観察表・・・・・47
第20表　竪穴住居址柱穴観察表・・・・・50
第21表　^{14}C年代と絶対年代（年輪年代）の対照表・・・・・・・・・・・52
第22表　^{14}C年代と絶対年代（年輪年代）の対照表２・・・・・・・・・・・53
第23表　出土遺物観察表①・・・・・・・56
第24表　出土遺物観察表②・・・・・・・57
第25表　出土遺物観察表③・・・・・・・58
第26表　出土遺物観察表④・・・・・・・65
第27表　出土遺物観察表⑤・・・・・・・74
第28表　出土遺物観察表⑥・・・・・・・75
第29表　出土遺物観察表⑦・・・・・・・75
第30表　出土遺物観察表⑧・・・・・・・77
第31表　出土遺物観察表⑨・・・・・・・78
第32表　出土遺物観察表⑩・・・・・・・79
第33表　出土遺物観察表⑪・・・・・・・80
第34表　出土遺物観察表⑫・・・・・・・81
第35表　出土遺物観察表⑬・・・・・・・82
第36表　出土遺物観察表⑭・・・・・・・85
第37表　出土遺物観察表⑮・・・・・・・85
第38表　出土遺物観察表⑯・・・・・・・86
第39表　出土遺物観察表⑰・・・・・・・87
第40表　布目瓦分類表①・・・・・・・・89
第41表　布目瓦分類表②・・・・・・・・89
第42表　須恵器分類表・・・・・・・・・92
第43表　高台付土師器出土一覧・・・・・93
第44表　調査区毎の出土瓦の割合・・・・94
第45表　色調毎の出土瓦の割合・・・・・94

写　真　図　版

図版１　鞠智城跡航空写真(1)　遠景　南西方向より撮影
図版２　鞠智城跡航空写真(2)　遠景　南東方向より撮影
図版３　鞠智城跡航空写真(3)　遠景　南東方向より撮影
図版４　鞠智城跡航空写真(4)　遠景　南方向より撮影
図版５　鞠智城跡航空写真(5)　近景　南東方向より撮影
図版６　鞠智城跡航空写真(6)　近景　東側より撮影
図版７　鞠智城跡航空写真(7)　近景　東側より撮影
図版８　鞠智城跡航空写真(8)　近景　北側より撮影
図版９　鞠智城跡航空写真(9)　近景　上空より撮影
図版10　鞠智城跡航空写真(10)　接写　24・27・28・29号建築址
図版11　鞠智城跡航空写真(11)　接写　20～23・25・26・30～33号建築址
図版12　鞠智城跡航空写真(12)　接写　25・26・32・33号建築址
図版13　鞠智城跡航空写真(13)　接写　20～23号建築址（礎石建物址）
図版14　鞠智城跡航空写真(14)　接写　20～23号建築址（礎石建物址）
図版15　21号と23号の重なり合い状況
図版16　23号建築址南側端部と雨落ち溝
図版17　20号建築址礎石検出状況・布目瓦検出状況
図版18　21号と22号の重なり合い状況
図版19　27号建築址
図版20　27号建築址
図版21　P117　掘形版築状況
図版22　12区より検出の土坑
図版23　28号建築址
図版24　28号建築址
図版25　29号建築址
図版26　29号建築址
図版27　30・31号建築址
図版28　30・31号建築址
図版29　32・33号建築址
図版30　32・33号建築址
図版31　出土遺物(1)
図版32　出土遺物(2)

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査の組織

調 査 主 体　熊本県教育委員会

調査責任者　大塚正信（文化課長）

調査･整理総括　隈　昭志（教育審議員）　　松本健郎（文化財調査第２係長）

発 掘 調 査　大田幸博（参事）　　山城敏昭（文化財保護主事）　　福原博信（嘱託）

報告書作成　大田幸博（参事）　　石工みゆき　溝口真由美（嘱託）

調査事務局　松崎厚生（課長補佐）　　木下英治（経理係長）

　　川上勝美　大広美枝子（主事）

調 査 指 導　岡田茂弘〔千葉県佐倉市国立歴史民俗博物館考古研究部長〕

　　小田富士雄〔福岡大学人文学部教授〕　河原純一〔文化庁記念物課主任調査官〕

　　北野　隆〔熊本大学工学部教授〕　　甲元真之〔熊本大学文学部助教授〕

　　沢村　仁〔九州工芸大学教授〕　　白木原和美〔熊本大学文学部教授〕

　　杉村彰一〔県立熊本北高校教諭〕　　武末純一〔北九州市立考古博物館副館長〕

　　田辺哲夫〔熊本大学講師〕　　坪井清足〔(財)大坂文化財センター理事長〕

　　出宮徳尚〔岡山市教育委員会文化課長補佐〕乗岡　実〔岡山市教育委員会主事〕

　　原口長之〔熊本県文化財審議員〕　　三島　格〔元福岡市立歴史資料館長〕

協　力　者　古閑三博〔県議会議長〕

　　吉里哲也〔菊鹿町教育長〕

　　〔菊鹿町教育委員会〕早田道雄（課長）　岩井賢太（係長）　早田弘隆（主事）

　　〔米原地区〕本田啓介　　木庭春生（菊鹿町文化財保護委員長）

　　福島美和子（県政モニター）

第２節　調査の経緯

(1) 第13次調査にあたる平成３年度は、昨年度に引き続き、文化庁国庫補助事業と県の自主事業による重要遺跡確認調査の２本立てで行った。

(2) 調査は平成３年９月中旬から開始し、平成４年３月31日までの約５ケ月半を実施した。

(3) 調査開始早々、県下に甚大な被害をもたらした台風19号により、完成したばかりの現場事務所が全壊するというハプニングに見舞われた。

(4) 調査の過程で、我国の古代山城から初めての八角形建物が２棟も検出され、県内外に大きな反響を呼んだ。

(5) 平成４年２月18日には、福島譲二熊本県知事が調査現場を視察され、検出遺構の説明を行った。

(6) 韓国の二聖(イーソン)山城からも、近年の発掘調査で八角形建物が発見されているのが判ったので、平成４年３月25日に現地調査を行った。この事については後述する。

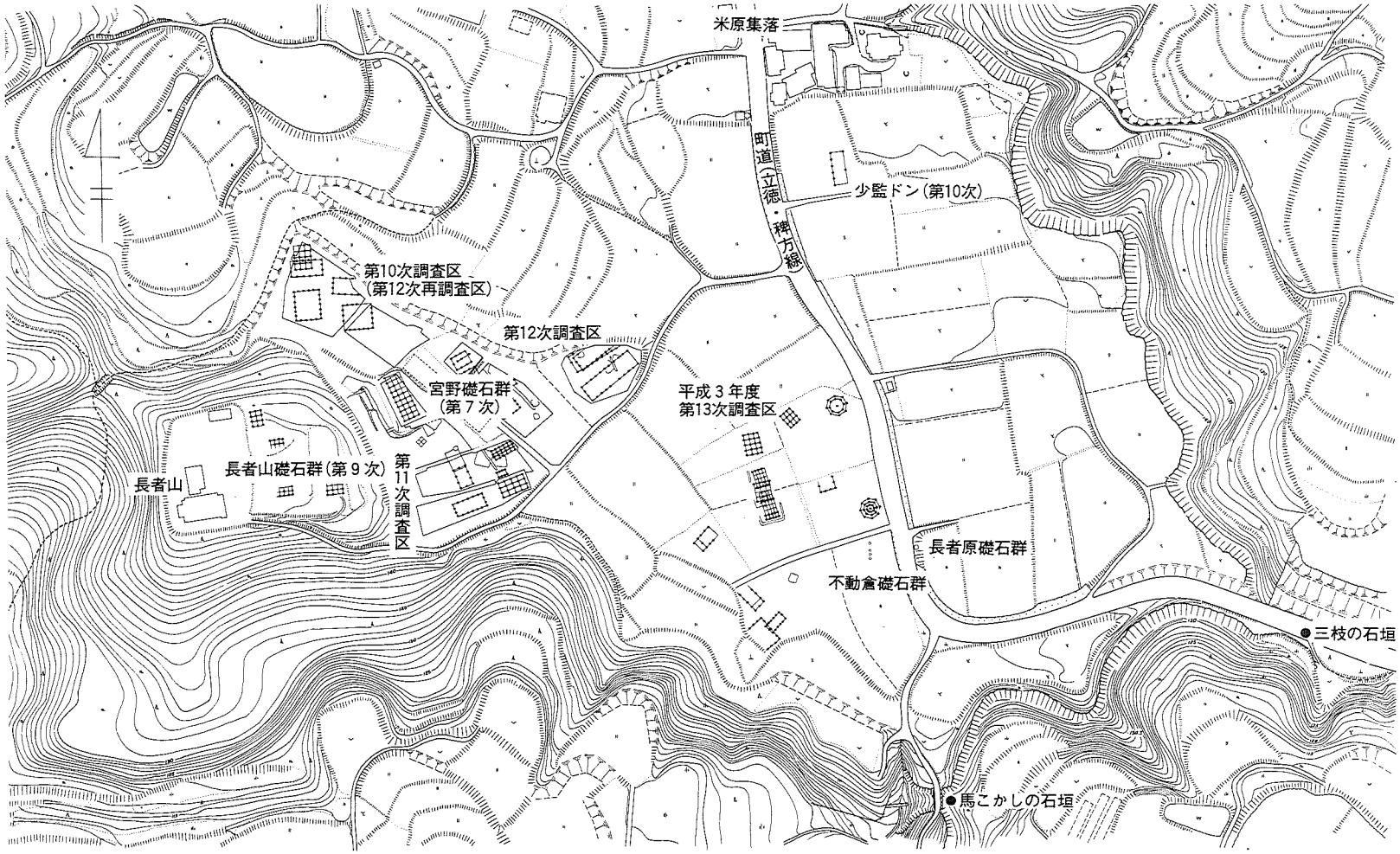
(7) 近年の調査の変遷と第10～12次調査の検出建築址は、第１表と第２表の通りである。

(8) なお、平成３年度の調査区については、これまでの様に調査終了後、埋め戻しという手順をとらず(一部、15区と18区は埋め戻された)、借地期間を暫定的に一年間延長して、遺構を一般に公開する事にした。

年　度	調　査	調　査　主　体	調査内容・その他
昭和42年度	第１・２次	鞠智城調査団 調査指導：鏡山　猛 調査団長：乙益重隆	米原台地の水田化工事(農業構造改善事業)、及び長者山の山林開墾に伴う緊急調査。
昭和43年度	第３次	〃	〃
昭和44年度	第４次	〃	宮野礎石の露出、長者原礎石群の全面露出。 長者山の測量を行なう。
昭和51年度		熊本県教育委員会	8月24日付けで、名称を「鞠智城跡」と改称。
昭和54年度	第５次	菊鹿町教育委員会	町道(稗方～立徳線)拡幅工事に伴う事前調査。 軒丸瓦片が出土。 ＊昭和42・43・54年度調査概要『鞠智城跡調査報告書』
昭和55年度	第６・７次	熊本県教育委員会	文化庁国庫補助事業。 第６次では上原地区の発掘。 第７次では宮野礎石群の全面露出。 (昭和56年11月11日付けで県史跡に追加指定) ＊熊本県文化財調査報告第59集『鞠智城跡』
昭和61～62年度	第８・９次	熊本県教育委員会	文化庁国庫補助事業。 第８次では航空撮影による米原地区の地形図作成作業。 第９次では長者山礎石群調査。多量の炭化米と瓦が出土した。
昭和63年度 平成元年度	第10・11次	熊本県教育委員会	文化庁国庫補助事業。 宮野礎石群周辺及び少監ドン地域の調査。
平成２年度	第12次	熊本県教育委員会	文化庁国庫補助事業。 県の自主事業による重要遺跡確認調査も加わって、調査面積は大幅に増大した。 長者山東側裾部一帯(宮野礎石建築址を含む)の調査。 ＊鞠智城跡調査概報 ＊熊本県文化財調査報告第116集『鞠智城跡』
平成３年度	第13次	熊本県教育委員会	継続して文化庁国庫補助事業と県の自主事業による重要遺跡確認調査を行う。 町道西側一帯の調査。13年ぶりに軒丸瓦が出土する。八角形建築址２棟を検出。 ＊熊本県文化財調査報告第124集『鞠智城跡』

＊：調査結果収録報告書名

第１表　近年の調査の変遷一覧



第1図　鞠智城跡検出遺構模式図

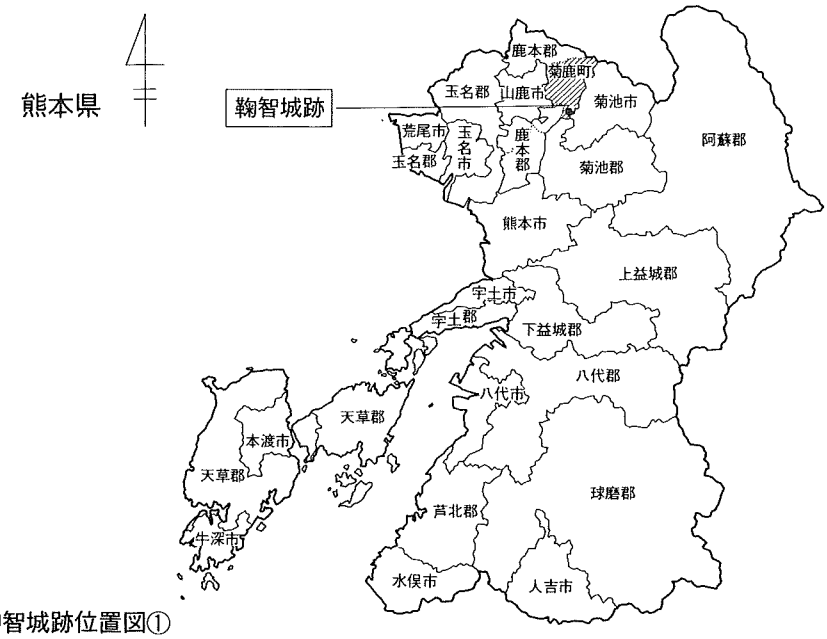
号	桁行方向	間数		検出値（m）		柱間寸法(m)		備考
		梁行	桁行	梁行	桁行	梁行	桁行	
1	N64° E	3	5	4.5 (15尺)	10.0 (33.3尺)	1.5 (5尺)	2.0 (6.7尺)	掘立柱(総柱)
2	N70° E	1	3	2.4 (8尺)	4.2 (14尺)	1.4 (4.7尺)	1.4 (4.7尺)	掘立柱(側柱のみ)
3	N20° E	2	3	6.0 (20尺)	9.0 (30尺)	3.0 (10尺)	3.0 (10尺)	掘立柱(側柱のみ)
4	N20° E	—	—	長軸 9.0 (30尺)	短軸 6.4 (21.3尺)	—	—	礎石
5	N74° E	3	4	6.9 (23尺)	12.0 (40尺)	2.3 (7.7尺)	3.0 (10尺)	掘立柱(総柱)
6	N72° E	3	6	6.0 (20尺)	16.4 (54.7尺)	2.0 (6.7尺)	2.4 (8尺)	掘立柱(側柱のみ)
7	N55° E	3	—	6.3 (21尺)	8.4 (28尺)	2.1 (7尺)	2.1 (7尺)	掘立柱(側柱のみ)
8	N67° E	3	6	6.0 (20尺)	3.4 (11.3尺)	2.0 (6.7尺)	1.7 (5.7尺)	掘立柱(側柱のみ)
9	N67° E	2	—	6.0 (20尺)	7.5 (25尺)	3.0 (10尺)	2.5 (8.3尺)	掘立柱(側柱のみ)
10	N67° E	2	3	6.0 (20尺)	7.5 (25尺)	3.0 (10尺)	2.5 (8.3尺)	掘立柱(側柱のみ)
11	東西方向	5	6	11.0 (36.7尺)	12.6 (42尺)	2.2 (7.3尺)	2.1 (7尺)	礎石・掘立柱併用
12	南北方向	5	6	11.5 (38.3尺)	13.2 (44尺)	2.3 (7.7尺)	2.2 (7.3尺)	礎石・掘立柱併用
13	南北方向	3	4	7.5 (25尺)	10.8 (36尺)	2.5 (8.3尺)	2.7 (9尺)	掘立柱(総柱)
14	東西方向	3	5	7.2 (24尺)	14.5 (48.3尺)	2.4 (8尺)	2.9 (9.7尺)	掘立柱(側柱のみ)
15	N84° W	3	—	7.2 (24尺)	11.6 (38.7尺)	2.4 (8尺)	2.9 (9.7尺)	掘立柱(側柱のみ)
16	N53° E	3	10	7.8 (26尺)	26.6 (88.7尺)	2.6 (8.7尺)	2.65 (8.8尺)	掘立柱(側柱のみ)
17	N53° E	3	—	7.2 (24尺)	13.25 (44.2尺)	2.4 (8尺)	2.65 (8.8尺)	掘立柱(側柱のみ)
18	N60° E	3	—	8.1 (27尺)	20.8 (69.3尺)	2.7 (9尺)	2.6 (8.7尺)	掘立柱(側柱のみ)
19	南北方向	1	5	6.3 (21尺)	15.0 (50尺)	—	3.0 (10尺)	掘立柱(側柱のみ)

(注) この他、第9次調査までに、宮野礎石建築址(県指定史跡) 1棟分、不動倉礎石建築址1棟分、さらに長者山に4棟分の礎石建物が検出されている。

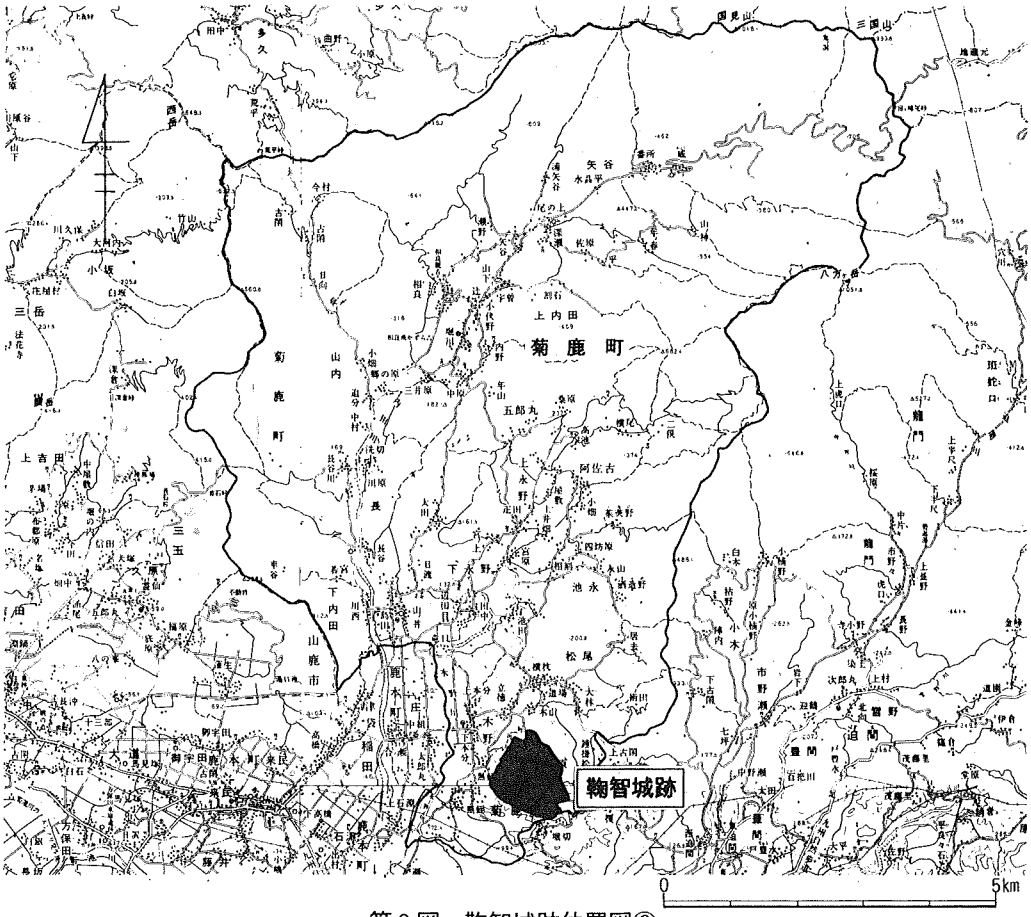
第2表　第10～12次調査建築址一覧

第3節　遺跡の位置

鞠智城の中心地は鹿本郡菊鹿町(かもとぐんきっかまち)に所在する米原(よなばる)台地で、国土地理院発行の2万5千分の1地形図『菊池』によると、城内の一隅を占める長者山(ちょうじゃやま)の位置は、図幅北から0.5cm、西から14.1cmの所にある。



第２図　鞠智城跡位置図①



第３図　鞠智城跡位置図②

第４節　鞠智城の歴史

(1) 鞠智城のことが初めて史上の記事に見えるのは『続日本紀』文武天皇２年５月の条で、その後、160年間の空白期間があって、『文徳実録』天安２年の条に菊池城院としての記載がある。最後は『三代実録』元慶３年の条をもって、鞠智城は歴史の舞台から姿を消している。

(2) 六国史に見る鞠智城

甲申。令太宰府繕治大野基肄鞠智三城。

『続日本紀』文武天皇二年（六九八年）五月二十五日

丙辰。肥後國言。菊池城院兵庫皷自鳴。丁巳。又鳴。

『文徳実録』天安二年（八五八年）二月廿四・廿五日

肥後國菊池城院兵庫皷自鳴。同城不動倉十一宇火。

『文徳実録』天安二年（八五八年）六月廿日

肥後國菊池郡城境兵庫戸自鳴。

『三代実録』元慶三年（八七九年）三月十六日

〔参考例〕

群烏數百。噬抜菊池郡倉舍葺草。

『三代実録』貞観十七年（八七五年）六月廿日

＊『国史大系』吉川弘文館

西暦年号は報告書執筆者が挿入

第５節　鞠智城の城域について

(1) 鞠智城の築城に際しては、当然の事ながら、かなりの選地がなされている事が明らかである。城が築かれた米原台地そのものは独立地形である上に、南側を除く三方は、北方から南下する八方ケ岳山系の山塊とその支脈尾根に囲繞されており、完全な防禦地形の中にあると言える。

地形的に開口の状態にある南側も、すぐさま菊池平野に接するのではなく、台（うてな）台地を初めとして一連の台地が間にワンクッションとして存在する事に、城としての絶妙の選地がある。

(2) 城域は米原台地の上面域を中心に土塁線－崖線－３つの城門によって形造られる「内城」が真の城域と思われる。これに加え西側の「大門」口と南側の屏風岩ライン、さらには米原台

地を取り巻く迫地や深谷を加えた広い城域としての「外城」を考える必要がある。これらの城域が鞠智城の内郭である。

(3) さらに、この内郭を補うものとして、人工の手が加わったと見られる自然地形の範囲が外郭である。土塁線は西側(外郭①)と東側(外郭②)に推定される。

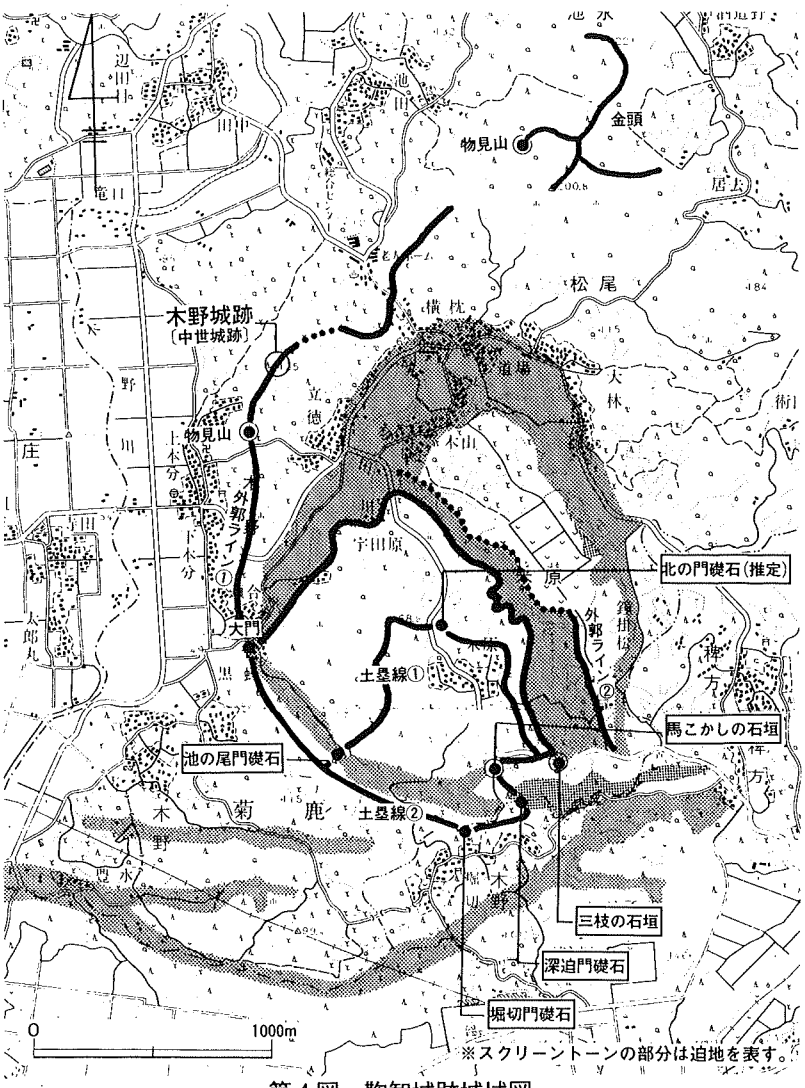
外郭①は「大門」口に端を発し、尾根を加工した土塁線と丘陵の崖線を加えた防禦ラインである。一方、外郭②は城の搦手にあたる鐘掛松の土塁線である。

(4)規模については、次の通りである。

〔内郭〕 内城：最大幅(東西)866m、最長(南北)982m、全周3.7km、面積51.1ha

外城：最大幅(東西)1.55km、最長(南北)1.13km、全周約5.82km、面積70.4ha

〔外郭〕 外郭①は全長2.4km、外郭②は全長0.9km



第4図　鞠智城跡城域図

第Ⅱ章　調査の成果

第１節　第13次調査の概要

(1) 平成３年度の調査(第13次調査)は、町道(米原を北西方向から南東側へ抜ける)の西側一帯で行った。迫地から台地に登った町道が米原集落(台地の北端部にある)を抜けて、南東側へ約130m程走行した台地上の平地である。

今年度の調査区は、西北西端で35mの距離をおいて昨年度の90－Ⅸ調査区に接する事になる。

(2) 調査は畑地と水田を借地して行い、調査の着手順に12区～18区の番号をあてた。番号は昨年度に連続する一連のものである。調査区の地番、面積等は第３表の通りである。

借地の総面積は7,982㎡である。(注) この内、排土場となった未掘の部分を除くと、全体の80％弱を発掘しているものと思われる。

(注) 今年度からは算用数字を使用とする事とした。前年度はローマ数字を使用している。

区番号	所　在　地	面積(㎡)	地　目
12区	鹿本郡菊鹿町米原 499	752	畑　地
13区	〃　500	887	畑　地
14区	〃　501-1	1,144	開田(水田)
15区	〃　511-1	732	開田(水田)
16区	〃　498-1	1,401	開田(水田)
17区	〃　502-1	1,057	開田(水田)
18区	〃　504	2,009	開田(水田)

第３表　調査区地番・面積一覧

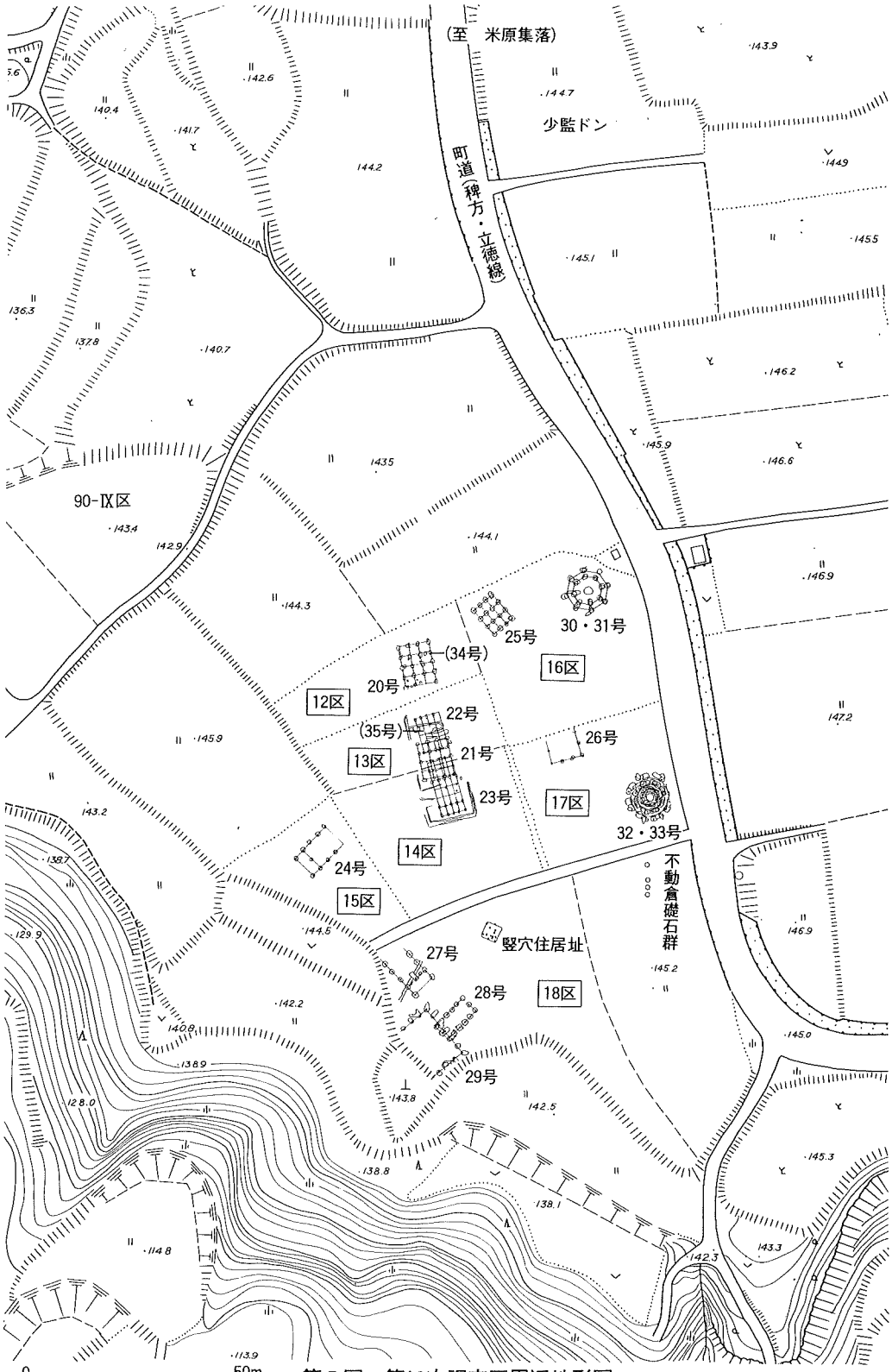
ここで言う開田とは、昭和42年に前後して、台地上の畑地を米原の水利組合で基盤整備したものである。次いで深井戸を掘り、電動の揚水ポンプで汲み上げた水を送水する事で稲作が可能になった。

第２節　遺構の概要

12～18の調査区からは建て替え分も含め、計16棟分の建築址が検出された。各調査区における遺構の概要は下記の通りである。

区	概　要	検出遺構
12	畑地で、昭和40年以来の旧地形を保っている。 開田工事の対象外地である。 地表から１m下で礎石建物が検出された。地山は調査区の西側で、やや高くなっている。	20号礎石建物 (34号礎石建物) 土坑
13	畑地で、土地の状況は14区と同様である。 地表下50㎝で礎石建物が検出された。	21号礎石建物 22号礎石建物
14	水田である。開田工事が行われ、整地の際にブルトーザーが入って、地山を削っている。 地山は南側から北側へ傾斜する。表土厚は南側で30㎝を測る。	23号礎石建物 (35号掘立柱建物)
15	水田である。土地の状況は14区と同様である。 地表下20～30㎝で地山のローム層土が検出された。 地山は西側から東側へ傾斜する。	24号掘立柱建物(側柱のみ)
16	水田である。土地の状況は14区と同様である。 地山は東側から西側へ傾斜する。 遺構は東側で地表下20㎝、西側では地表から１m下で検出された。	25号掘立柱建物 (総柱) 八角形建物 30号掘立柱建物(創建期) 31号礎石建物(再建期)
17	水田である。土地の状況は14区と同様である。 地山は調査区の西側が傾斜している。	26号掘立柱建物 (側柱のみ) 八角形建物 32号掘立柱建物(創建期) 33号掘立柱建物(再建期)
18	水田である。土地の状況は14区と同様である。 地山はほぼ水平状態を保つ。	27号掘立柱建物(側柱のみ) 28号掘立柱建物(側柱のみ) 29号礎石・掘立柱併用建物 竪穴住居址

第４表　各調査区の概要



第５図　第13次調査区周辺地形図

礎石建物及び掘立柱建物

号	桁行方向	間数		検出値(m)		柱間寸法(m)		備考
		梁行	桁行	梁行	桁行	梁行	桁行	
20	N 6° W	3	4	7.2 (24尺)	9.6 (32尺)	2.4 (8尺)	2.4 (8尺)	礎石建物
21	N 6° W	3	4	7.2 (24尺)	8.8 (29.3尺)	2.4 (8尺)	2.2 (7.3尺)	礎石建物
22	N11° W	4	4	5.8 (19.3尺)	8.0 (26.7尺)	1.45 (4.8尺)	2.0 (6.7尺)	礎石建物
23	N11° W	4	6	5.8 (19.3尺)	12.6 (42尺)	1.45 (4.8尺)	2.1 (7.0尺)	礎石建物
24	N49° E	1	—	5.7 (19尺)	10.2 (34尺)	5.7 (19尺)	2.55 (8.5尺)	掘立柱建物(側柱のみ) 庇が付く。
25	N45° W	3	3	5.7 (19尺)	7.2 (24尺)	1.9 (6.3尺)	2.4 (8尺)	掘立柱建物(総柱)
26	N12° W	3	—	7.2 (24尺)	6.0 (20尺)	2.4 (8尺)	3.0 (10尺)	掘立柱建物(側柱のみ)
27	N48° W	1	—	5.7 (19尺)	10.0 (33尺)	5.7 (19尺)	2.5 (8.3尺)	掘立柱建物(側柱のみ) 庇が付く。
28	N47° E	2	5	4.2 (14尺)	9.0 (30尺)	2.1 (7尺)	1.8 (6尺)	掘立柱建物(側柱のみ)
29	N50° E	6	—	12.9 (43尺)	6.9 (23尺)	2.15 (7.2尺)	2.3 (7.7尺)	礎石・掘立柱併用建物 建物の本体が礎石で、庇は掘立柱。

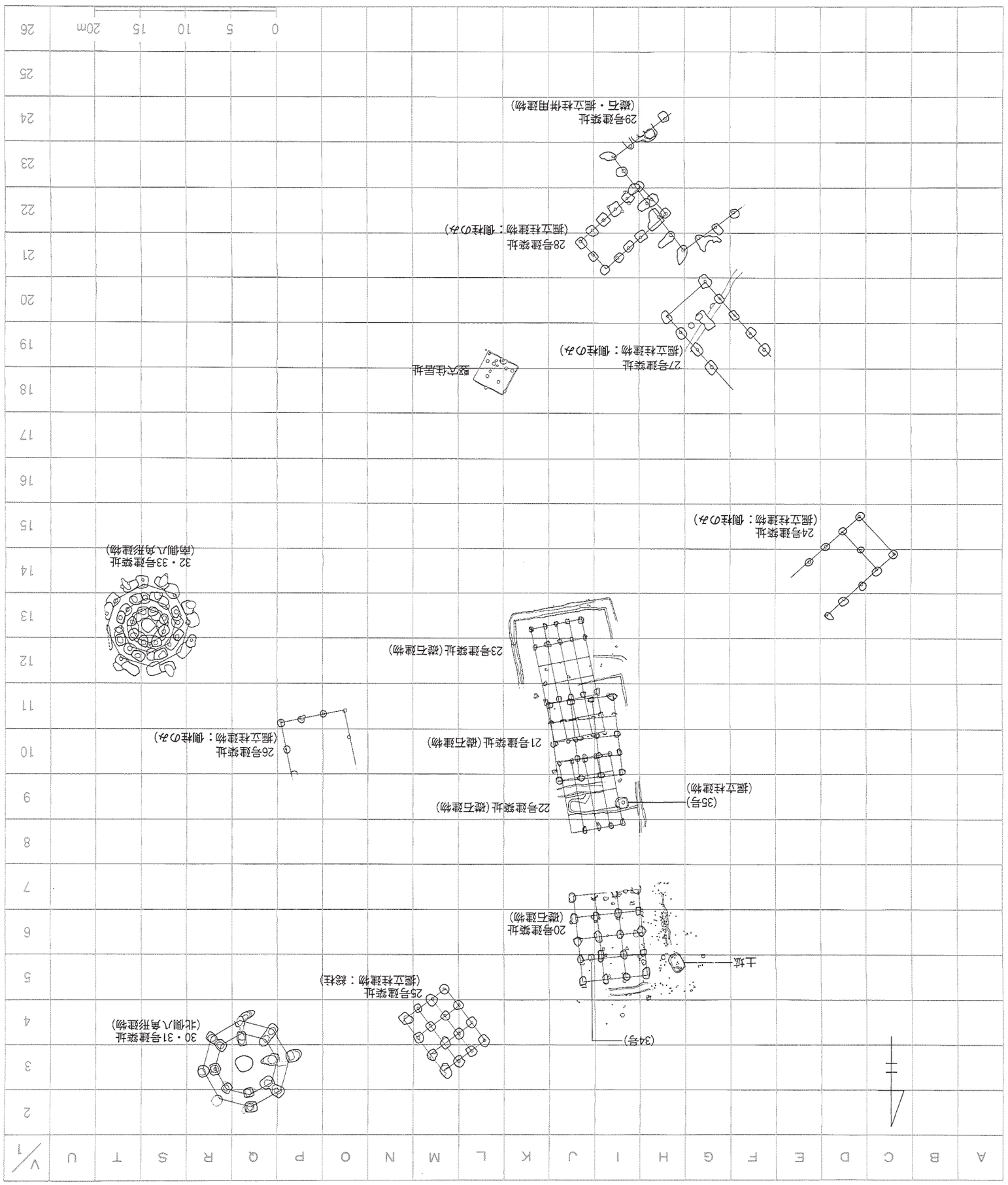
八角形建物　　(単位：m)

号	建物構造	内径(1)	内径(2)	外径	柱間		
					内径(1)	内径(2)	外径
30	礎石建物	—	6.8 (22.7尺)	9.6 (32尺)	—	2.6 (8.7尺)	3.7 (12.3尺)
31	掘立柱建物	—	—	—	—	—	—
32	掘立柱建物	3.8 (12.7尺)	5.9 (19.7尺)	9.2 (30.7尺)	1.4 (4.7尺)	2.3 (7.7尺)	3.5 (11.7尺)
33	掘立柱建物	4.0 (13.3尺)	6.7 (22.3尺)	9.8 (32.7尺)	1.5 (5尺)	2.5 (8.3尺)	3.8 (12.7尺)

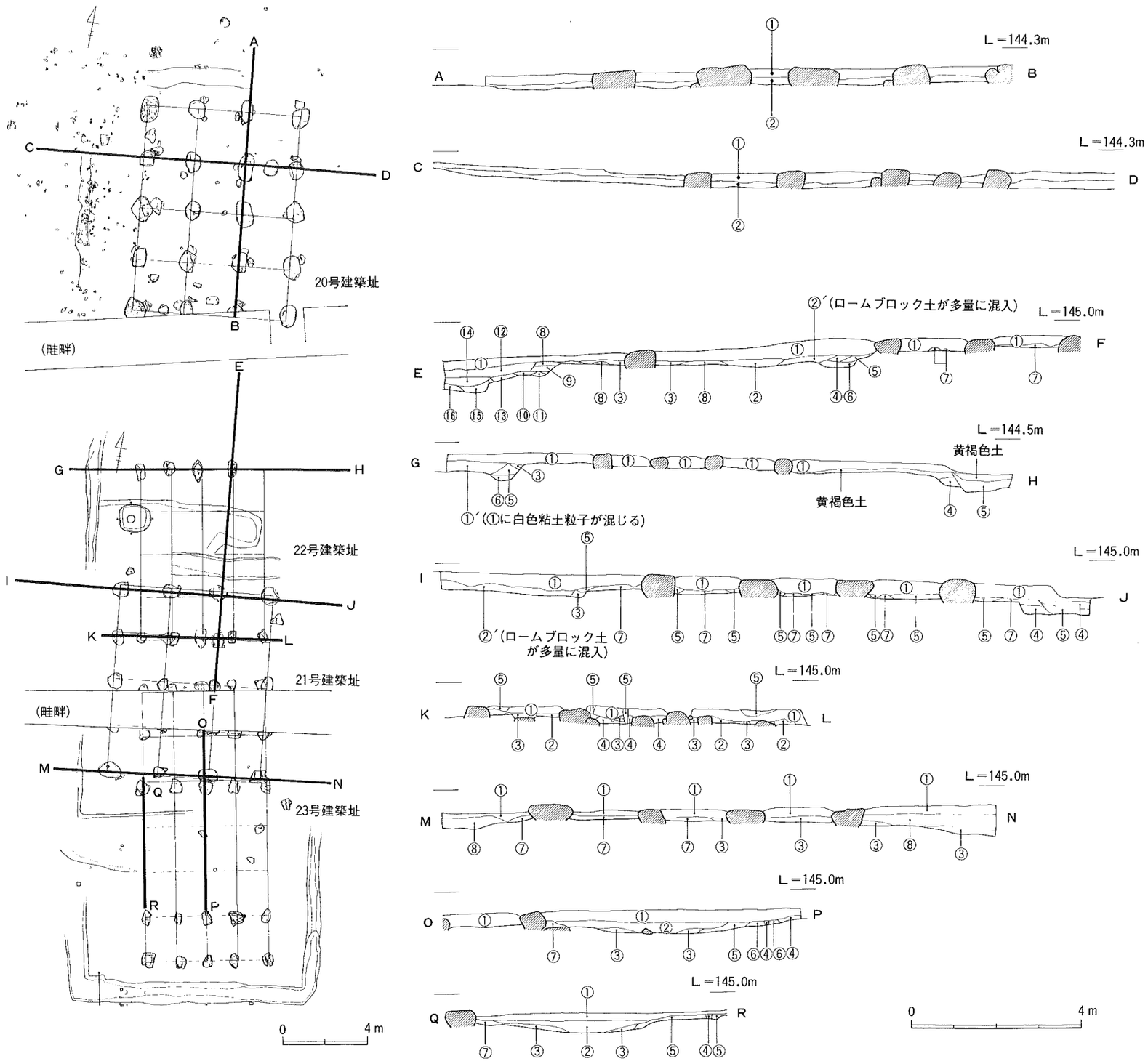
第5表　第13次調査検出の建築址一覧

〔備考〕① この他、20号建物の下層に34号礎石建物を構成すると思われる礎石がある。

② さらに、22号建物の下層に35号掘立柱建物を構成する掘形がある。最終的に、この区画には21号・22号・35号の建築址が重なり合う事になる。


A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V/1
2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26
30・31号建築址
(北側八角形建物)
25号建築址
(掘立柱建物：総柱)
(34号)
土坑
20号建築址
(礎石建物)
(35号)
(掘立柱建物)
22号建築址(礎石建物)
26号建築址
(掘立柱建物：側柱のみ)
21号建築址(礎石建物)
32・33号建築址
(南側八角形建物)
23号建築址(礎石建物)
24号建築址
(掘立柱建物：側柱のみ)
27号建築址
(掘立柱建物：側柱のみ)
竪穴住居址
28号建築址
(掘立柱建物：側柱のみ)
29号建築址
(礎石・掘立柱併用建物)
0 5 10 15 20m

第6図　遺構全体図



第７図　20～23号建築址断面図

A－B C－D
① 暗褐色土（炭化物粒子を少量含む）
② 黒褐色土（白色粒子を少量含む）

E－F G－H I－J
① 黒褐色土（炭化物・焼土を粒子状に多量に含む）
② 暗黒褐色土（ローム土ブロックを少量含む）
③ 黒色土　地業崩壊土（暗黄褐色土が少量混じる）
④ 黒色土
⑤ 黒色土に黄褐色土が粒子状に混じる 。
⑥ 黒色土に黄褐色土がブロック状に混じる 。
⑦ 地業土（黄褐色土）
⑧ 地業土（黄褐色土）
⑨ 地業土（黄褐色土を粒子状に含む黒色土）
⑩ 地業土（白色砂質粘土）
⑪ 地業土（⑩を粒子状に少量含む黒褐色土）
⑫ 黒褐色土（⑩と焼土を粒子状に少量含む）
⑬ 地業土（ブロック状(3～5cm大)の⑩を少量含む黒褐色土）
⑭ 黒褐色土（ブロック状(3～5cm大)の⑩を少量含む）
⑮ 黒褐色土（ブロック状(3～5cm大)の⑩を多量に含む）
⑯ 暗黄褐色土（地山？）

K－L
① 黒褐色土（焼土・炭化物を粒子状に含む）
② 黒褐色土（①よりやや明るく、密で締まりがある）
③ 地業土（黄褐色土・密）
④ 地業土（淡黄褐色土・疎）
⑤ 撹乱層

M－N　O－P　Q－R
① 黒褐色土（炭化物・焼土を粒子状に多量に含む）
② 暗黒褐色土（ロームブロック(3～5cm大)を少量含む）
③ 暗黒褐色土（ロームブロック(3～5cm大)を多量に含む）
④ 暗褐色土（地業土に褐色土が混入）
⑤ 地業崩壊土（暗褐色土に地業土が少量混入）
⑥ 23号礎石建物の地業土
⑦ 21号礎石建物の地業土
⑧ 黒褐色土（①よりも炭化物の含有が多い）

第３節　礎石建物

２０号建築址

① 桁行Ｎ６°Ｗで、３間×４間の総柱・礎石建物である。梁行7.2m(24尺)、桁行9.6m(32尺)の大きさで、柱間は梁行、桁行ともに2.4m(8尺)を測る。

建物を構成する礎石の中で欠けているものは無く、20個全部が当時のままで検出された。石材は大部分が花崗岩で、５個のみ(Ｓ４・Ｓ14・Ｓ15・Ｓ18・Ｓ19)が安山岩であった。

礎石の加工度合は、上面が平坦で明らかに整形されているものが10個(Ｓ１・Ｓ４・Ｓ７～11・Ｓ13・Ｓ15・Ｓ16)、中心部が柱の受け皿となる様に、やや凹み、若干、整形されているものが３個(Ｓ６・Ｓ17・Ｓ18)、多少の凹凸はあるものの、自然面をそのまま利用しているものが５個(Ｓ２・Ｓ３・Ｓ５・Ｓ12・Ｓ14)、多少、凹凸した自然面に粗い整形が加わっているもの(Ｓ19)、さらには自然面を利用しているが、加工の有無が不明確なもの(Ｓ20)とに分かれる。この中でＳ４とＳ11は加工の度合いが非常に大きく、完全な平坦面となっている。

側面は、運び込まれた大岩がそのまま利用されているＳ６を除くと、すべてに割った形痕がある。この中で特にＳ２とＳ４の側面は端的に面取りされて直の状態にある。

一方、Ｓ１とＳ２は礎石全体の風化が進み、Ｓ１・Ｓ５・Ｓ20は上面箇所が茶黒色(Ｓ１)、チョコレート色(Ｓ５)、薄褐色(Ｓ20)に変色している。原因は強い火を受けた事によるものであろう。かかる意味で、この建築址は火災によって焼失した可能性が高い。

② 個々の礎石は全体的に太目であった。畦畔によって南側部分を検出できなかった３個の礎石(Ｓ５・Ｓ10・Ｓ15)を除くと、最大クラスのものはＳ１が長軸127cm、短軸86cm、Ｓ13が長軸 126cm、短軸78cmを測った。対して、最小クラスのＳ２も長軸76cm、短軸67cmの大きさであった。礎石の大きさは20号建築址がかなりの規模であった事を示している。

③ 礎石の周囲から根固め石が検出された。但し、やや太目のものが単発的に礎石の側面を固める状態で、よくある様な礎石を軸とした環状的な配列ではなかった。石材は礎石と同様に花崗岩のものが多かったが、中に安山岩のものとチャート系の角礫があった。

④ Ｓ12・Ｓ17の間に、配列の上で意味不明の礎石状の角礫(Ｓ21)がある。大きさは長軸76cm、短軸62cmで、上面は平坦である。側面の検出部分の高さは30cmを測る。形状的には、まさに礎石そのもので、上面の中心部は、Ｓ12とＳ17の中間位置にあたっている。石材は花崗岩で風化が激しい。

なお、この礎石状の角礫は、Ｓ５とＳ10との間にあるやや小振りの岩礫(Ｓ22)と繋がりがあるかも知れない。石材はＳ21と同様に花崗岩で、風化が激しく、上面は平坦で、大きさは長軸50cm、短軸25cmを測る。上面の中心部はこれ又、Ｓ５とＳ10の中間位置である。側面の検出部分の高さは18cmで、比較して、Ｓ21よりもインパクトは弱いが、礎石としての観はある。Ｓ21

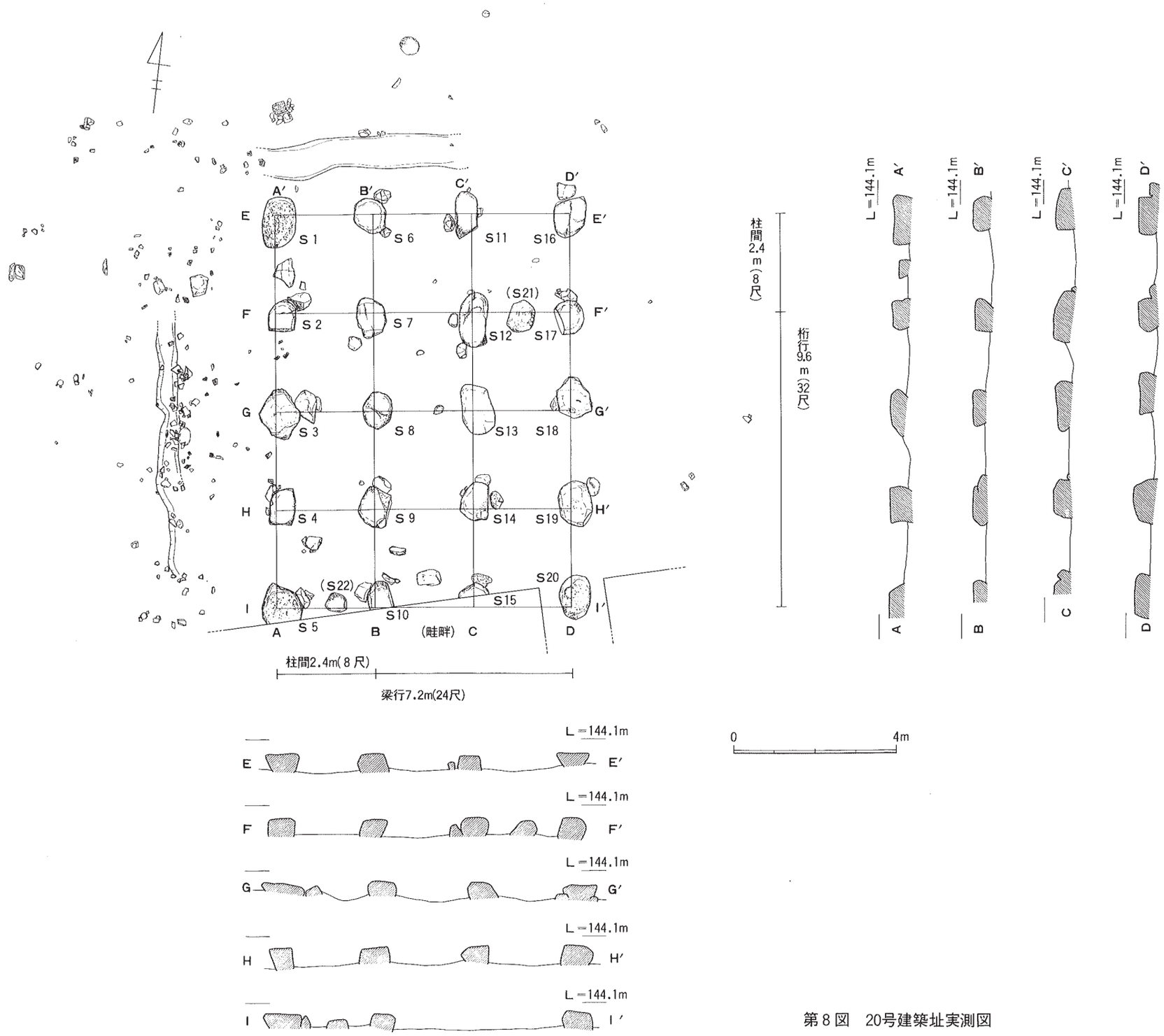
とＳ22は、20号建築址に先行する礎石建物の残存礎石であろうか。この件に関しては、20号建築址から南側へ11.8m離れた所で検出された同時代の21号建築址(同建築址は南北方向で20号建築址と柱筋が通る)を考える必要がある。まさしく、同建築址の下層遺構として２棟の礎石建物(22・23号建築址)が存在するのである。これに習えば、可能性はかなり大と言えよう。従って、ここではＳ21・Ｓ22を組み込むであろう礎石の建物を34号建築址とする。

⑤ 20号建築址は地表下１ｍに埋没していたものである。昭和42・43年当時、この調査区を含めた一帯はボーリング棒による徹底した礎石の確認調査が行われている。「礎石の上にかようなまでの堆積土が覆っているとは・・・・・・」現地指導に訪れた三島　格氏(当時の調査団のメンバーの一人)の感想は印象的であった。

⑥ この礎石列の検出に関して特筆すべきことがある。元来、かような礎石は版築状の地業土で固められ、礎石の上面か、もしくは側面の上位のみが露出の状態にあるのが普通と聞く。しかし、20号建築址の場合、この事が当てはまらなかった。

⑦ 調査の工程を記す。まず、重機で表土を剥いで、次に攪乱層を順次掘り下げていった所、前述の様に、地表下１ｍの所で、１個の礎石が検出されたのである。そこで、手掘りに切り替えて作業を進めた。礎石の上面が出揃い、建物の間数も確定したが、地業土にあたる黒褐色土は軟らかく、版築状態になかった。そして何よりも、礎石を上面から厚く覆っていた土壌と同一のものであった。これに加えて、12～16世紀の中世遺物(主な物はNo.39～44)が混入していたため、当然の事ながら、さらに掘り下げる必要があると判断した。各礎石間にベルトを残し、黒褐色土を慎重に少しづつ掘り下げていったが、深さ10cmも掘り進むと中世遺物は出土しなくなった。しかし、上層と下層部分の土色や硬度に変りはなく、ついには礎石の側面の高さが30～35cmに及ぶ事になった。この辺でやっと土色に変化が生じ、やや硬い斑点状の黒褐色土となった。そこで、これが真の地業土の最下層部分ではないかと判断し、作業を中断した。結果としてすべての礎石は側面の大半を地上に晒す事になった。

このことについて４つの事が考えられる。(ア)建物が廃棄された後、中世に至るまでに隣接地域から多量の土砂が流入して、礎石が地中深く埋没した。そして、その後、この地が農地となった時、礎石間の地業土を掘り抜く程に深く耕された為に、上層と下層の土壌が完全に入り混じってしまった。(イ)何らかの原因で、後世に礎石間の地業土が、最下層部分を残し、ほぼ完全に流出したものの、中世では逆に他地域からの多量の土砂が流入して、礎石が深く埋没した。(ウ)礎石を覆う分厚い黒褐色土に幾つかの矛盾点はあるものの、分層が可能で、我々が掘り進んだ土層面が実際は質の低い地業土であった。(エ)極論として、当初から礎石は大半が露呈の状態にあり、地業土はごく浅いものであった。これらの事について、(イ)の自然現象はまず考えられない。(ウ)も畦畔を利用した土層断面の観察結果から可能性は極めて低い。(ア)の考えが妥当な線であろうが、埋土の堆積状況からして、(エ)の考えも捨て難いものがある。



第8図　20号建築址実測図

S No	岩質	大きさ(cm) 長軸	短軸	礎石の上面	礎石の側面	備考
S 1	花崗岩	127	80	平坦。 整形されている。	東側と南側に割った痕がある。	上位は茶黒色を呈する。風化が激しい。
S 2	花崗岩	76	67	僅かに凹凸。 自然面を利用している。	東側と南側は面取りされて直の状態にある。	――
S 3	花崗岩	120	90	全体的に凹凸しているが、総じて平坦面を形成する。自然面を利用している。	四面に割った痕がある。	――
S 4	安山岩	88	61	完全に平坦。 整形されている。	東側と南側は面取りされて直の状態にある。	
S 5	花崗岩	―	98	僅かに凹凸。 自然面を利用している。	――	礎石は大岩がそのまま利用されている。 上面はチョコレート色を呈する。
S 6	花崗岩	85	75	やや凹む。 若干、整形されている。	南西側に割った痕がある。	――
S 7	花崗岩	98	69	平坦。 整形されている。	四側面に割った痕がある。	――
S 8	花崗岩	91	72	平坦。 整形されている。	南西面に割った痕がある。	――
S 9	花崗岩	86	74	平坦。 整形されている。	四側面に割った痕がある。特に北側は大きく割られている。	礎石はやや斜めの状態に傾いている。
S 10	花崗岩	―	57	平坦。 整形されている。	南側は未発掘。 残り三側面の内、北側のみ自然面で、他は割った痕がある。	――
S 11	花崗岩	115	54	完全に平坦。 整形されている。 縁部は角張った状態にある。 稜線は非常にシャープ。	四側面に割った痕がある。南側を除く三側面は一応、面取りされている。 南側は大きく割られている。	――
S 12	花崗岩	127	66	中央部は凹む。 自然面を利用している。	南側面に割った痕がある。但し、礎石は全体的に自然の状態を保つ。	風化が激しい。
S 13	花崗岩	126	78	平坦。 整形されている。 摩耗しているものの、縁部に稜線が感じられる。	四側面に割った面がある。	――
S 14	安山岩	93	69	やや平坦。 自然面を利用している。	東側の側面を面取りしている。	――
S 15	安山岩	―	―	平坦。 整形している。	北側面に割った痕がある。	――
S 16	花崗岩	90	79	平坦。 整形されている。 縁部は角張った状態にある。	北側面に大きく割った痕がある。 残りの三側面は粗く面取りされている。	――
S 17	花崗岩	81	70	やや凹む。 若干、整形されている。	東側面と西側面は面取りされている(特に西側は大きく面取りされている)	――
S 18	安山岩	102	80	凹む。若干、粗く整形されている。	礎石は底部に向い逆錘形を呈する。	――
S 19	安山岩	109	78	やや丸味を帯びながらも総じて、平坦面を形成する。 自然面を利用しているが、粗い整形が加わっている。	東側面と西側面に割った痕がある。	――
S 20	花崗岩	107	76	丸味を帯びながらも平坦面の感あり。自然面を利用したものか?	西側面と南側面に割った痕がある。	上面は薄褐色を呈する。

第6表　20号建築址礎石観察表

⑧ 西側の桁行からは総数154片を数える布目瓦片が集中的に出土した。その範囲は桁行方向に沿って南北の長さ13m、東西の幅６ｍであった。しかるに13調査区の地形は西側から東側への緩傾斜地(比高にして20～30cm)で、布目瓦の集中地域は調査区で最も高所となる。

この箇所に限り、布目瓦の出土を見た事は次の推論を生む。(ア)建物の廃棄後、瓦は周辺に広く落下したが、大半は後世の農耕の際、掘り起こされて、捨てられ、偶然にも西側桁行のものが残った。(イ)建物が使用されていた時期に発生した自然災害によるもので、瓦の落下は西側桁行のみで発生し、その一部が土中に埋まったものである。大半の瓦はすべて建物の破却時に他の所へ持ち出されたとする考えである。推論としては(イ)の方が筋が通る。

この事は宮野礎石建物の調査結果(昭和55年度の第７次調査)にも当てはまる。布目瓦は同じく西側の桁行から集中的に出土している。

⑨ 雨落ち溝の検出に際しては、遺構の残存状況が悪く、調査は困難を極めた。それでも桁行の西側では、布目瓦を除去した後で、長さ６ｍ分を検出した。幅は35～50cmであったが、深さは7～13cmにすぎず、南側寄りの2.5m分については東側の肩部が検出できなかった。溝の走行も、やや蛇行気味である。一方、北側の梁行からも、西側から東側にかけて4.4ｍ分が検出されている。幅は70～85cmであったが、深さは５cm前後で、極く浅いものであった。礎石の検出状況からすれば、当然の結果であろう。

⑩ 最後に出土遺物の年代に触れておく。いずれも中世遺物との混入物であるが、年代のわかる14片の須恵器での時期幅は７世紀前半から８世紀に及ぶ。この中で７世紀後半のものは６片で最も多い。従って、この事からすれば20号建築址の年代は７世紀後半頃と推察される。

２１号建築址

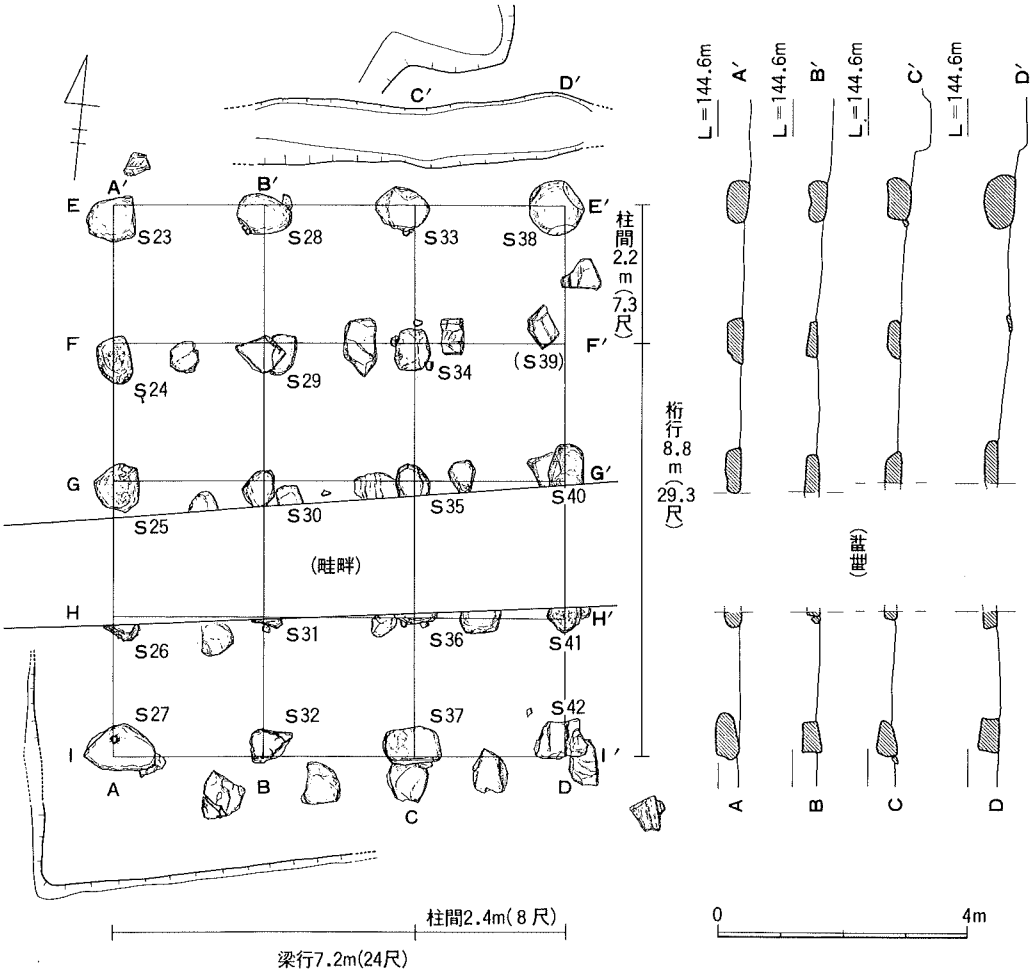
① 桁行Ｎ６°Ｗで、３間×４間の総柱・礎石建物である。梁行7.2m(24尺)、桁行8.8m(29.3尺)の大きさで、柱間は梁行2.4m(8尺)、桁行2.2m(7.3尺)を測る。20号建築址の説明でも触れた様に、この建物は桁行方向において20号建築址と完全に柱筋が通っている。

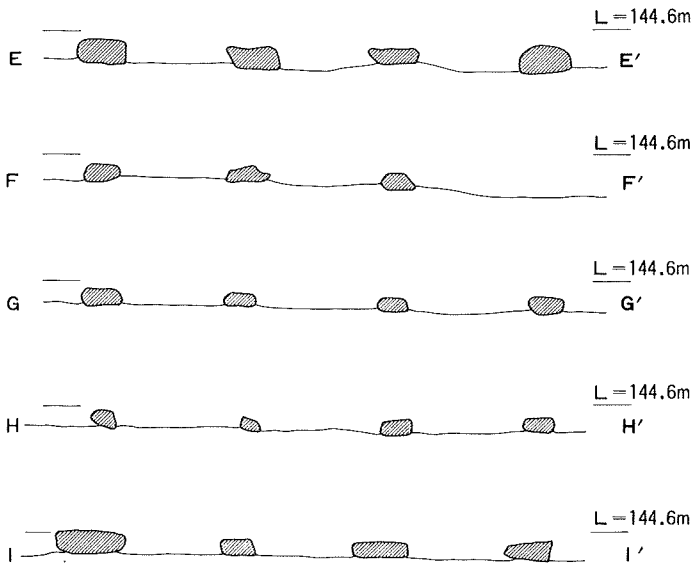
建物を構成する礎石の中では東側の桁行方向で、Ｓ39が欠損状態にあった。

石材は20号建築址と同様に大部分が花崗岩で、４個のみが異なっていた。内訳は、Ｓ26・Ｓ27とＳ29が安山岩で、Ｓ42がチャート系の岩礫であった。

礎石の加工度合いは、上面が平坦、もしくは多少、凸凹しているものの、明らかに整形されているものが13個(Ｓ24～Ｓ27・Ｓ29・Ｓ30・Ｓ32～Ｓ35・Ｓ37・Ｓ40・Ｓ41)、自然面をそのまま利用しているものが４個(Ｓ23・Ｓ28・Ｓ38・Ｓ42)であった。この中でＳ30・Ｓ32・Ｓ33は加工の度合いが大きく、縁部に稜線が感じられる。

側面は、総てに割った形痕がある。この中で特にＳ23・Ｓ32・Ｓ42の側面は、端的に面取りされて、直の状態にある。一方、Ｓ24とＳ26はやや風化の状態にあり、Ｓ24・Ｓ25・Ｓ38・Ｓ41は





第9図　21号建築址実測図

SNo	岩質	大きさ(cm)		礎石の上面	礎石の側面	備考
		長軸	短軸			
S23	花崗岩	76	67	やや丸味を帯びる。 自然面を利用している。	東側面は面取りの状態にある。	――
S24	花崗岩	72	61	平坦。 若干、整形されている。	東側面に割った痕がある。	上面は茶色味を帯びる。やや風化している。
S25	花崗岩	74	67	多少凸凹している。 整形されている。	北側面に割った痕がある。	上面はやや茶色味を帯びる。
S26	安山岩	―	―	平坦。	割った痕がある。	風化している。
S27	安山岩	113	73	平坦。 整形されている。	南側面と西側面に粗く割った痕がある。	上面に円形状の凹み(直径11×13cm)がある。 礎石の形状は、楕円形のものを半分に割った感じ。
S28	花崗岩	85	61	全体的に中心部は凹む。 自然面を利用している。	西側面に割った痕がある。	――
S29	安山岩	62	54	平坦。 整形されている。	北側と西側の側面は、面取りされている。	上面は東側から西側へ、やや斜めの状態にある。
S30	花崗岩	59	49	平坦。 整形されている。 縁部に稜線が感じられる。	東側面と南側面に割った痕がある。	上面は西側から東側へ、やや斜めの状態にある。
S31	花崗岩	―	―	――	――	検出されているのは南側面のみである。
S32	花崗岩	67	52	多少凸凹している。 整形されている。 縁部に稜線が感じられる。	西側面は面取りされて直の状態にある。 他の側面には、大きく粗く割った痕がある。	――
S33	花崗岩	76	64	平坦。 整形されている。 縁部に稜線が感じられる。	西側面に割った痕がある。	――
S34	花崗岩	64	57	平坦。 整形されている。	南側面に粗く割った痕がある。	――
S35	花崗岩	―	52	やや平坦。	――	――
S36	花崗岩	―	―	――	南側面に割った痕がある。	南側面のみの検出である。
S37	花崗岩	87	59	多少凸凹している。 整形されている。	東西両側面に大きく割った痕がある。多少面取りされている	上面は南側から北側へ、やや斜めの状態にある。
S38	花崗岩	86	78	平坦。(やや丸味を帯びる) 自然面を利用している。	東側面と南側面に粗く割った痕がある。	礎石自体は丸石が利用されている。 上面はやや黄色味を帯びる。
S39	―	―	―	――	――	欠損している。
S40	花崗岩	56	―	やや凹凸がある。 粗く整形されている。	粗く面取りされている。	――
S41	花崗岩	―	―	平坦。 整形されている。	粗く割った痕がある。	上面は茶色を呈する。
S42	チャート系	84	60	自然面を利用している。	東側面と南側面は面取りされて直の状態にある。	――

第7表　21号建築址礎石観察表

上面箇所が茶色(S24・S25・S41)、黄色(S38)に変色している。この事により、21号建築址も火災にあって焼失した可能性が高い。

② 個々の礎石は20号建築址のものよりやや小さめであった。最大クラスのものがS27で、長軸113cm、短軸73cm、最小クラスはS30で長軸59cm、短軸49cmの大きさであった。

この中で建物の角隅(南西側)にあたるS27には平坦な上面の隅に円形(直径11×13cm)で皿状を呈する窪みがある。あたかも、門礎石に穿たれた軸受け穴の様で、そうなれば、S27は何か

の建物に付随した門の礎石の転用という事になる。この件に関し、現場において甲元真之氏から「可能性がある」との示唆を受けたが、小田富士雄氏は慎重論であった。

③ 21号建築址の場合、調査区の南縁では地表下30cm足らずで礎石を検出できた。礎石の地業土にあたる黒褐色土は、20号建築址の場合と同様に礎石の上面を覆い、土中にはこれ又、12～15世紀の中世遺物(主なものはNo.103～111)が混入していた。従って、この黒褐色土も掘り下げたが、土中から21号建築址の下層礎石建物となる残存礎石が確認されたのである。この事により21号建物に先行する建物(22・23号建築址)の礎石の内、幾つかをそのまま残した状態で、新たな地業が行なわれ、上層部分に21号建物が建てられた事がわかる。下層遺構の礎石間からは地業土と思われる褐色ローム土と黒褐色土の混入土が検出された。従って、21号建築址の場合、この地業土の上面で掘り下げ作業を中止した。しかし、結果として、礎石の側面は20号建築址と大差ない程の高さになった。

黒褐色土の問題については、20号建築址の個所で述べたので省略する(21号建築址の場合、深耕の度合は下層建物の地業土まで達していないと判断する)。

④ この建築址に伴う雨落ち溝は、北側の梁行で一部が検出された。長さ5.4m、幅1.0m、深さ10cm程度で、上位部分が削られて底部のみの残存である。

22号建築址

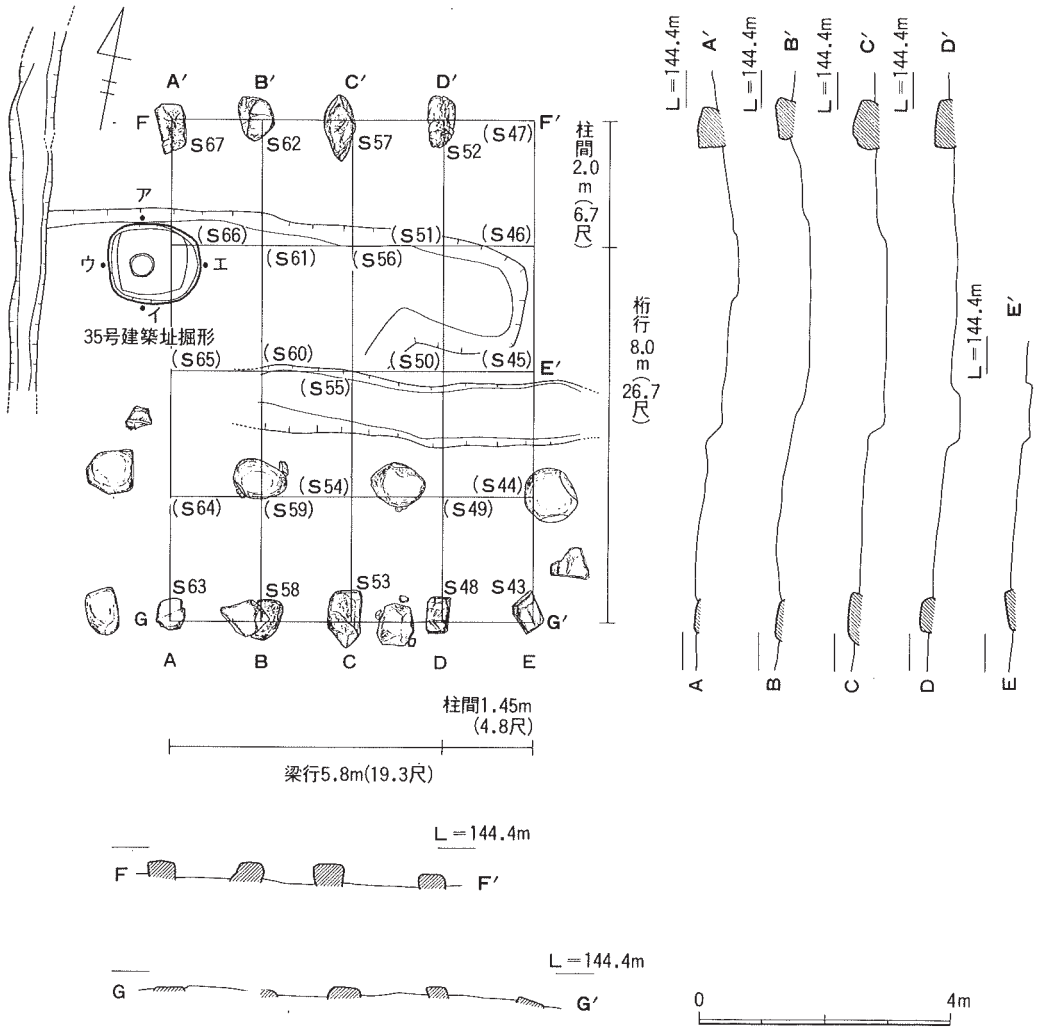
① 桁行N11°Wで、4間×4間の総柱・礎石建物である。梁行5.8m(19.3尺)、桁行8.0m(26.7尺)の大きさで、柱間は梁行1.45m(4.8尺)、桁行2.0m(6.7尺)を測る。この建物は23号建築址と南北の桁行方向において完全に柱筋が通っており、両建物間の距離は2.5mと極めて隣接の状態にある。建物を構成する礎石の中では9個だけが現存していた(S43・S48・S52・S53・S57・S58・S62・S63・S67)。残りの16個は21号建築址の地業の際、除去されたものと思われる。石材は花崗岩(S43・S53～S63)と安山岩(S52・S67)、チャート系の岩礫(S48)とがあった。　礎石の加工度合いは、上面に関し自然面をそのまま利用しているものがS52で、残りの8個は平坦面(多少、凸凹しているものを含む)を有し、明らかに整形されていた。

側面は、21号建築址の地業土に埋もれて、上面部分の検出に留まったものが3個(S 52・S 58・S63)あった。残りの5個については、いずれも割った形痕があった。

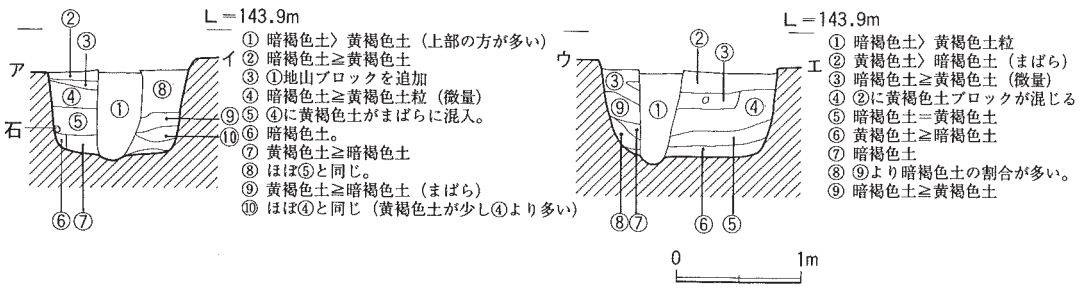
S53・S57・S58・S67は、上面箇所が灰黒色(S53・S67)、茶色(S57)、チョコレート色(S 58)に変色している。この事により下層遺構の22号建築址も火災に遇ったものと思われる。

② 個々の礎石は上位遺構の21号建築址より小さ目であった。最大クラスのもので長軸104cm、短軸52cm、最小クラスはS48が長軸56cm、短軸34cm、S63が長軸50cm、短軸42cmであった。

③ この建築址に伴う雨落ち溝は、西側の桁行で一部分が検出された。長さ5.8m、幅40～70cm、深さ5～6cmで、底部のみの残存であった。但し、検出溝の走行は南側で、桁行方向に対し、



(35号建築址堀形断面図)



第10図　22号建築址実測図

S No	岩質	大きさ(cm)		礎石の上面	礎石の側面	備考
		長軸	短軸			
S43	花崗岩	53	40	――	――	上面は茶色味を帯び、西側から東側へ斜めの状態にある。
S44 S45 S46 S47	(欠損している。)					
S48	チャート系	56	34	平坦。 整形されている。 縁部に稜線が感じられる。	西側面に粗く割った痕がある。 残り3側面は粗く面取りされている。	――
S49 S50 S51	(欠損している。)					
S52	安山岩	81	42	丸味を帯びる。 自然面を利用している。	――	風化が非常に激しく、ボロボロの状態にある。 自然岩をそのまま利用している。
S53	花崗岩	90	52	多少凸凹している。 自然面を利用している。	割った痕がある。	礎石には、横方向に亀裂が走っている。 上面は灰黒色味を帯びる。
S54 S55 S56	(欠損している。)					
S57	花崗岩	104	48	平坦。 整形されている。	東側面に、大きく粗く割った痕がある。	上面は茶色味を帯る。
S58	花崗岩	62	―	多少凸凹している。 整形されている。	――	上面はチョコレート色を呈する。 やや風化している。
S59 S60 S61	(欠損している。)					
S62	花崗岩	74	51	やや凸凹している。 粗く整形されている。	粗く割った痕がある。	――
S63	花崗岩	50	42	平坦。 整形されている。	――	上面は南側から北側へ斜めの状態にある。
S64 S65 S66	(欠損している。)					
S67	安山岩	76	43	やや凸凹している。 粗く整形されている。	東西側面は面取りされている。南側面に粗く割った痕がある。	上面は灰色味を帯びる。

第8表　22号建築址礎石観察表

や西側へずれている。

④ この建物の地業土と考えられる褐色ローム土と黒褐色土の混入土は、基壇状になっている可能性もあったので、建築址を横断する畦畔を利用し、土層観察を重ねた。しかし、建物の東西両端にあたる所で、土壌が乱れており、基壇状の立ち上りを明確に掴む事はできなかった。礎石自体は、この地業土状の混入土に大半が埋もれており、上面もしくは側面の一部が露呈の状態にあった。

⑤ 22号建築址の下層から掘立柱建物の掘形が1個だけ検出された(他の掘形はいずれも21号と22号礎石建物の地業土に埋もれた状況にある)。22号建築址の北西側寄りにあり、21号建物の西側桁行ライン下にかかっている(建物の角隅礎石にあたるS67からの距離は1.3mを測る)。

掘形の平面形状は楕円形で、長軸1.45m、短軸1.28mを測る。柱穴は掘形の西側寄りにあり、直径35cmである。掘形を四分割したが、深さは70cmを測った。埋土は基本的に暗褐色土と黄褐色ローム土の混入土で、きちっとした版築状態にあり、5層に分層できた。柱穴もはっきりと捉える事ができた。埋土は暗褐色土に黄褐色ローム土が混じるものであった。この掘形を組み込む掘立柱の建物を35号建築址とする。

⑥ 13調査区における布目瓦の出土量は、第44表に見るように極めて少なかった。20号建築址と同時期のものと考えられる21号建築址から布目瓦の出土がなかった事は大きな疑問である。

出土した須恵器の時期幅はバラつきがあり、6世紀後半(No.81)、7世紀後半(No.84)、8世紀(No.80)、8世紀から9世紀にかかるもの(No.83)とに分かれる。これらについても20号建築址の場合と同様に中世遺物包含層からの出土である。

⑦ 21号建築址を上層遺構とする22号建築址及び35号建築址の重なりは、鞠智城の築城時期を考える上で、極めて貴重な調査結果である。これについては、第Ⅳ章のまとめで後述する。

23号建築址

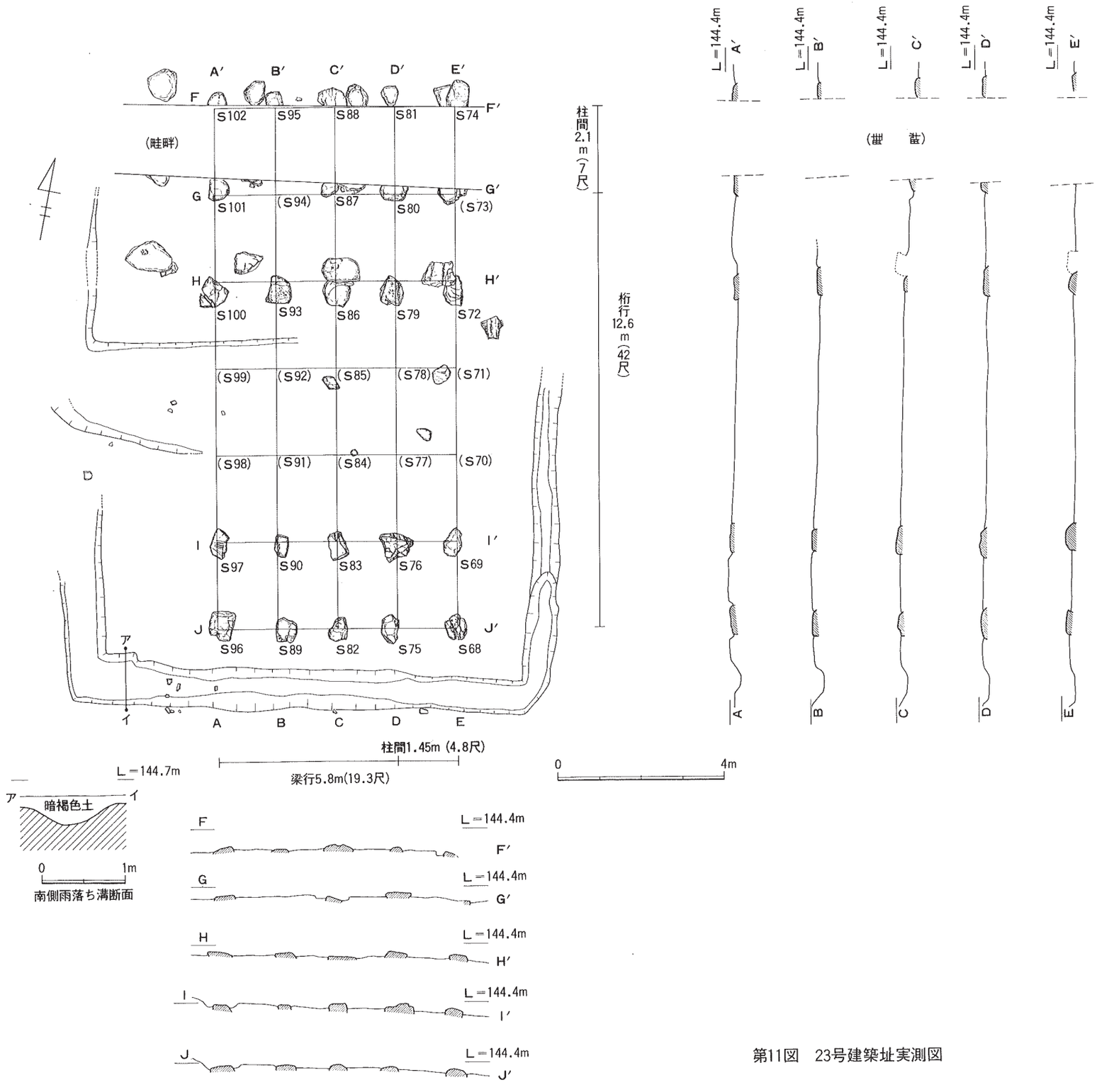
前述の様にN11°Wで4間×6間の総柱・礎石建物である。梁行5.8m(19.3尺)、桁行12.6m(42尺)の大きさで、柱間は梁行が1.45m(4.8尺)、桁行は2.1m(7尺)を測る。

建物を構成する35個の礎石の中では、中央部分より南側寄りにかけて、11個が欠損していた(S70・S73・S77・S78・S84・S85・S91・S92・S94・S98・S99)。

石材はやはり花崗岩が主で(S74・S79～S81・S86～S88・S90・S93・S100～S102)あったが、安山岩のものも多く(S68～S72・S75・S82・S83・S89・S95～S97)、その他、1個だけチャート系の岩礫(S76)があった。

礎石の加工度合いは、上面が平坦で、明らかに整形されているものが14個(S69・S72・S79～S83・S86・S90・S93・S95・S97・S100・S101)で、自然面を利用しているものが8個(S 71・S75・S76・S87～S89・S96・S102)、その他、風化のために不明なもの(S68)と畦畔にかかって一部しか検出できなかったもの(S74)があった。この中でS97は偶然の自然作用によるものと思えるが、ノミ痕の様な凹面が残っていた。自然面を利用したものの中では、一部につきV字形状の切裂が入るもの(S83・S88)があり、全体的にやや粗い感じであった。 側面は、22号建築址と同様に、地業土状の混入土に埋もれて観察不可能なもの10個(S71・S74・S75・S82・S87・S88・S95・S96・S101・S102)があった。残り14個については自然岩をそのまま礎石に利用したもの(S96)を除くと、他はすべてに割った痕があった。この中でS69は上面が狭く、四方の側面が斜めに粗く割られていた。さらに度合いに相違はあるが、明らかに面取りされているもの(S83・S86・S89・S90)もあった。

一方、礎石の中で風化しているものが3個(S68・S79・S87)あったが、この中でS68は風化



第11図　23号建築址実測図

が非常に激しく、表面がボロボロの状態にあった。

S79とS93は、茶色(S79)とチョコレート色(S93)に変色していた。この事により23号建築址も火災に遇った可能性が高いと言える。

② 個々の礎石は全体的に小振りであった。最大クラスのものでS76が長軸71cm、短軸68cm、最小クラスはS81が長軸50cm、短軸38cm、S90が長軸51cm、短軸31cmを測った。

S No	岩質	大きさ(cm) 長軸	短軸	礎石の上面	礎石の側面	備考
S68	安山岩	60	49	やや平坦。(風化の為、不明)	北側面を粗く割っている。	風化が非常に激しく、ボロボロの状態にある。
S69	安山岩	68	42	平坦。整形されている。	中央部を残し、四方は斜めに粗く削られている。	――
S70	(欠損している。)					
S71	安山岩			中央部は凸の状態にある。	――	礎石が西側へ移動したものか?
S72	安山岩	73	46	平坦。整形されている。	割った痕がある。	南側から北側へ大きく傾斜の状態にある。
S73	(欠損している。)					
S74	花崗岩	―	57	――	――	西側から東側へ大きく傾斜の状態にある。
S75	安山岩	69	42	平坦。自然面を利用している。	――	自然岩をそのまま礎石に利用している。
S76	チャート系	71	68	凸凹している。但し、中央部から西側にかけて柱の受皿状に凹む。自然面を利用している。	東西の両側面に割った痕がある。	――
S77 S78	(欠損している。)					
S79	花崗岩	68	56	平坦。整形されている。	粗く割った痕がある。	上面はやや茶色味を帯びる。やや風化している。
S80	花崗岩	―	―	平坦。整形されている。	割った痕がある。	――
S81	花崗岩	50	38	平坦。整形されている。	割った痕がある。	
S82	安山岩	58	45	平坦。(狭い部分に限られる)粗い整形がされている。		上面を除き、自然面が保たれている。
S83	安山岩	62	43	平坦。整形されている。北側端部にV字形の切裂が走る。	粗く割った痕がある。西側面に限り、粗く面取りされている。	――
S84 S85	(欠損している。)					
S86	花崗岩	―	64	平坦。整形されている。	東側面は粗く面取りされている。	丸岩を利用している。
S87	花崗岩	―	―	丸味を帯びる。自然面を利用している。	――	風化している。
S88	花崗岩	62	―	検出部分は凸凹している。V字形の切裂が入る。	――	――
S89	安山岩	57	48	多少凸凹している。自然面を利用している。	面取りされている。	――
S90	花崗岩	51	31	平坦。粗く整形されている。	東側と北側の側面に、割った痕がある。	――
S91 S92	(欠損している。)					
S93	花崗岩	65	54	多少凸凹している。粗く整形されている。	非常に粗く割った痕がある。	上面はまだらにチョコレート色味を帯びる。
S94	(欠損している。)					
S95	安山岩	―	39	平坦。整形されている。	――	――

第9表　23号建築址礎石観察表①

S No	岩質	大きさ(cm)		礎石の上面	礎石の側面	備考
		長軸	短軸			
S96	安山岩	70	56	平坦。 自然面を利用している。	――――	自然岩をそのまま礎石に利用している。
S97	安山岩	70	40	やや平坦。 粗く整形されている。 中央部が横方向に、全体的に凹む。 ノミ痕の様なものが残る。	南側面を除く三方を、粗く面取りしている。	――――
S98 S99	(欠損している。)					
S100	花崗岩	69	65	平坦。 整形されている。 ひび割れしている。	南側面と西側面に粗く割った痕がある。	――――
S101	花崗岩	―	50	平坦。整形されている。	――――	――――
S102	花崗岩	―	―	自然面を利用している。	――――	――――

第10表　23号建築址礎石観察表②

③ S72は21号建築址のS42と上下に重なり合っている。すなわちS72の上に層厚4～5cm程度の堆積土があり(必然的に、これが21号建物の地業土と判断される。基本的には黒褐色土に近い様な気がするが、両礎石間の奥深い所にあるため、確たる土色の判定や、硬度の判定ができない)、その上にS42が座っている状態にある。この事により、この部分に関しては、地業の仕方がかなり大まかなものであった事がわかる。

④ S71は桁行方向の柱筋からやや西側にそれている。この点については21号建物の地業の際に外的な力が加わって移動したと判断した。

⑤ 雨落ち溝は南側の梁行を中心に、南東隅と南西隅から比較的良好な状態で検出された。梁行側は長さ11.7m、幅0.8～1.1m、深さ10～15cmを測った。一方、桁行側では東側が7.4m、西側が3.5mほど検出できた。

特色として、雨落ち溝は、梁行側はともかく、桁行側において建物の本体部分とやや距離を有する事である。計測値は東側で1.9m、西側で2.8mを測る。この件に関し、小田富士雄氏は「本体部分と雨落ち溝との間に、何らかの付属施設があった可能性がある」と推論されている。S72とS71間の東側に1個のみ点在する礎石状の岩礫が付属施設の残存物ではないかとの御指摘である。今後の研究課題である。

⑥ この建築址を覆う攪乱土層から、百済系と思われる軒丸瓦の瓦当(No.121)が出土している。

第4節　掘立柱建物

24号建築址

① 桁行方向N49°Eで、中柱の無い側柱のみの掘立柱建物である。但し、東側の梁行側が後世、削り取られているために全体規模は不明である。

検出部分は西側の梁行で1間、北側の桁行で4間の大きさであった。計測値は梁行で5.7m

(19尺)、桁行で10.2m(34尺)、桁行の柱間が2.55m(8.5尺)を測る。

② 西側寄りには、この建物に庇が付いていた事を示すP113が存在する。柱の位置はP106とP109の中間位置にあたり、両柱穴間からの距離は2.85m(9.5尺)である。

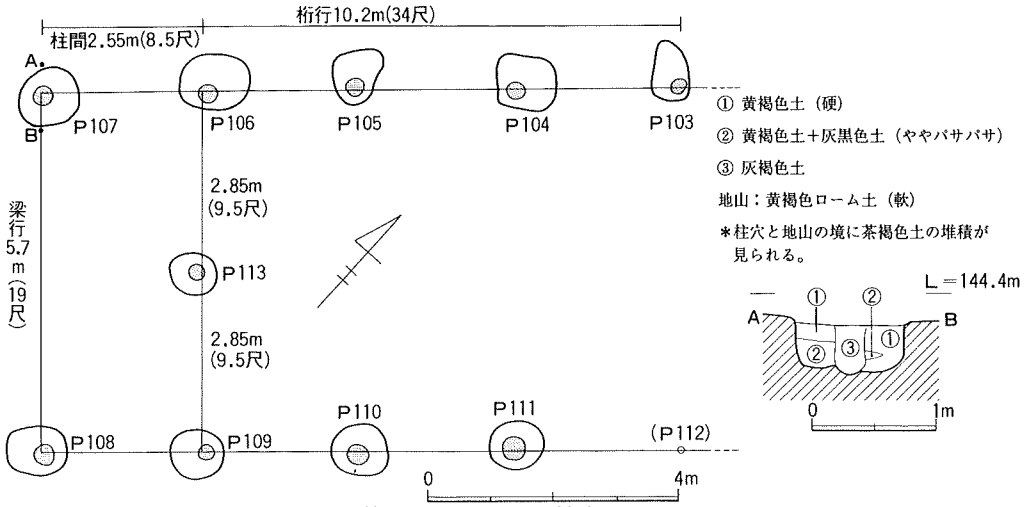
③ 掘形は全部で10個が検出された(P103に対比するP112の掘形については、削平のため検出できなかった)。

形状は方形のもの(P104・P106～P108・P110)と楕円形のもの(P109・P111・P113)とがあり、P103とP105は歪であった。

大きさの最大クラスはP106で長軸112cm、短軸91cm、最小クラスはP109で長軸83cm、短軸80cmを測った。庇部分のP113は長軸75cm、短軸67cmで、一回り小さい。

④ 柱穴の大きさは平均すれば約30cmで、庇のP113に限り25cmと、やや小振りであった。

⑤ P107の掘形を四分割したが、埋土は黄褐色土(硬土)で、一部に灰黒色土が混入していた(この土壌は、ややパサパサの感じであった)。



第12図　24号建築址実測図

掘形No	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	柱穴(cm)	備　　考
P103	—	97	60	24	掘形は東端で、ややすぼまる。柱穴の検出形状はやや歪。
P104	方形	93	84	29	
P105	—	87	80	30	掘形は東側で円形状を呈し、西側で方形状の歪な形状を呈する。
P106	方形	112	91	30	掘形は、やや隅丸方形である。
P107	方形	95	94	30	掘形は、やや隅丸方形である。
P108	方形	96	80	33	掘形は、やや隅丸方形である。
P109	楕円形	83	80	25	
P110	方形	89	83	30	掘形は隅丸方形である。
P111	楕円形	87	78	37	柱穴の形状はやや大きめである。
P112	—	—	—	—	後世の削平により検出できず。
P113	楕円形	75	67	25	

第11表　24号建築址掘形観察表

深さは40cm前後で、底部の角隅はやや丸味を帯びるものであった。

⑥ 柱穴の埋土は灰褐色土で、深さは43cm前後を測った。柱穴の先端は掘形の底部より若干、深い状態にあり、地山のローム層土との間に茶褐色土の堆積が見られた。

⑦ この建築址が検出された15調査区から北西側に続く高台(一旦は畦畔で15調査区と仕切られている)については、平城宮址にある太極殿の様な高まりの地形である所から、近年、非常に注目を集めていた所である。重要遺構の埋没が考えられた。

この高台は南東側から北西側へ長軸の向きがあり、長さ63m、幅38.5m、西側裾部との比高は2.7m、東側裾部との比高も1.6mを測る地形である。

発掘調査を勧める考古学者も多かったが、この地には、以前から生花用の柳の木が植えられていたため、そのまま手付かずになっていたというのが現実である。そこで、平成3年度の13次調査では、この高台と同一区画の南東側部分(この区画は地権者が別で畑地である)を発掘調査しようという事になったのである。

期待して調査に望んだが、結果として、出土遺物は極めて少なく、15調査区からは24号建築址を1棟検出したに留まった。

⑧ 建築址は前述の様に、北東側の梁行を削平によって欠いている。すなわち15調査区の旧地形は、当時、もっと東側へ突き出していた事がわかる。この事から⑦で述べた太極殿風の高台の東側ラインも旧地形ではない可能性が出てきた。

⑨ 15調査区からの鞠智城関係の出土遺物は須恵器1片のみ(No.122)で、他は中世遺物であった。布目瓦も出土しなかった。

25号建築址

① 桁行方向N45° Wで3間×3間の正方形に近い総柱の掘立柱建物である。調査区の北西隅から検出されたもので遺構検出面までの深さは地表から1m強を示す。

梁行5.7m(19尺)、桁行7.2m(24尺)の大きさで、柱間は梁行が1.9m(6.3尺)、桁行が2.4m(8尺)を測る。

② 掘形の形状は、P117が円形状で、他のものはやや歪ながら基本的には方形であった。柱抜取り穴のあるものは3個(P126・P127・P129)で、特色としては、柱は外側の東側にではなく、桁行方向に沿って北側へ抜かれていた。

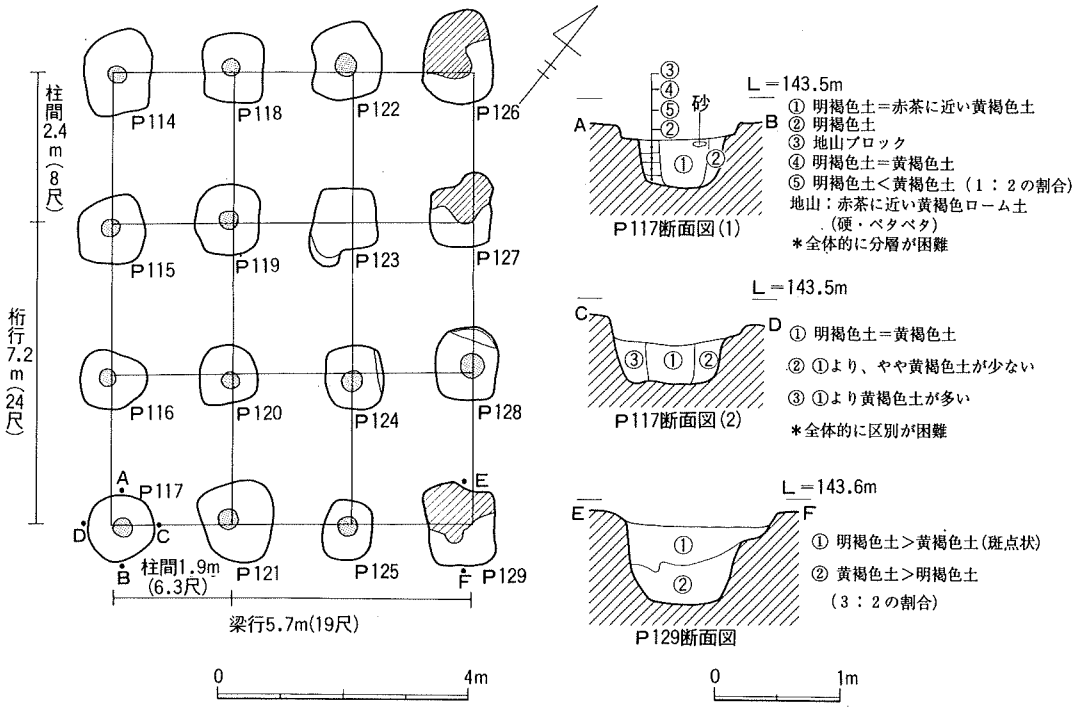
大きさの最大クラスはP122で、長軸127cm、短軸105cmを測る。最小クラスはP120で長軸95cm、短軸90cmを測った。

③ 原形を留める掘形の内、P123からは柱穴が検出できなかった。柱穴の大きさは平均すれば約30cmであった。

④ P117とP129の掘形を四分割した。P117の場合、掘形の分層は困難であった。柱穴を挟ん

で東側部分は辛うじて４層に分けられたが西側については分層できなかった。埋土は基本的に明褐色土である。柱穴の埋土は明褐色土と黄褐色土の混合土で、上層部分に小さな砂のブロックが見られた。

一方、Ｐ129は柱抜取り痕の状態を調べるために四分割した。しかし、土層断面での土壌の色別は非常に困難で、結果として、掘形は平面プランで捕らえたものとは異なった形状となった。



第13図　25号建築址実測図

掘形No	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	柱穴(cm)	備　　考
P114	方形	124	102	30	
P115	方形	109	75～107	30	
P116	方形	107	89～ 95	24	
P117	円形	100	－	30	
P118	方形	105	88	30	
P119	方形	106	97	30	
P120	方形	95	90	30	
P121	方形	130	92～115	30	
P122	方形	127	105	34	
P123	方形	105	98	－	柱穴は検出できず。
P124	方形	104	97	32	
P125	方形	100	83	30	
P126	方形	－	105	－	北側寄りに柱抜取り穴がある。
P127	方形	118	－	－	北側寄りに柱抜取り穴がある。
P128	方形	115	104	38	
P129	方形	－	100	－	北側寄りに柱抜取り穴がある。

第12表　25号建築址掘形観察表

２６号建築址

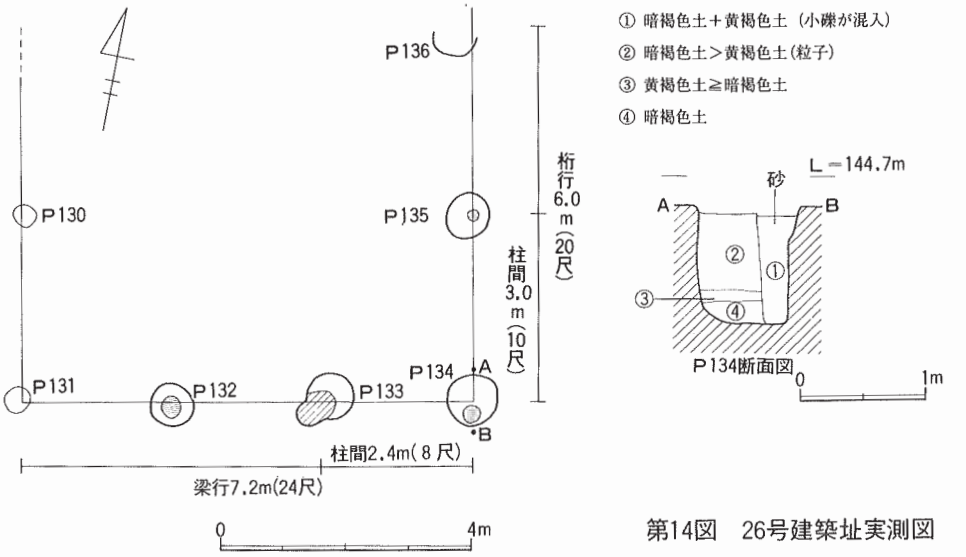
① 桁行方向N12° Wで、中柱の無い側柱のみの掘立柱建物である。但し、建物の北側半分が調査区外となるため全体規模は不明である。検出部分は南側の梁行で３間、東側の桁行で２間の大きさであった。計測値は梁行で7.2m(24尺)、東側桁行で6.0m(20尺)、柱間は梁行で2.4m(8尺)、桁行で3.0m(10尺)を測る。

② 掘形は全部で７個が検出されたが、Ｐ130とＰ131は削平の度合いが大きく、底部近くのみの検出に留まった。

形状はＰ132～Ｐ134が円形で、Ｐ135はやや楕円形であったが、基本的に円形を呈するものと思われる。４個の掘形の大きさは多少バラついており、最大のものでＰ134が直径80㎝、最小のものでＰ133が直径63㎝であった。

③ 柱穴の大きさも掘形以上にバラつき、Ｐ132が最大で直径30～33㎝、Ｐ135が最小で直径18㎝であった。

④ この建物は平成２年度の第12次調査で検出された８号建築址と同一タイプのもので、掘形の規模が他の建築址のそれと比べて、全体的に小さい所に特色がある。８号建築址の掘形の所



第14図　26号建築址実測図

掘形No	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	柱穴(cm)	備　　考
P130	－	－	－	－	29×38㎝のやや歪な小穴を検出。掘形の底部と思われる。
P131	－	－	－	－	直径40㎝の円形状の小穴を検出。掘形の底部と思われる。
P132	円形	68	－	30～33	柱穴は掘形の中央に収まる。
P133	円形	63	－	－	南西側に柱抜き取り穴がある。
P134	円形	80	－	28	柱穴は掘形の南側に片寄る。
P135	やや楕円形	74	68	18	平面形でとらえた柱穴は、やや小振りである。
P136	－	－	－	－	北側の２／３程は畦畔の下で、検出できず。

第13表　26号建築址掘形観察表

見を参考までにあげると、形状は楕円形と円形に分かれ、大き目のもので長軸86cm、短軸80cm、小さ目のものは長軸58cm、短軸55cmの大きさであった。掘形の埋土は分層できず、柱穴も検出できない状態であった。従って、鞠智城時以前の建物ではないかと言う疑問も残った。

⑤ この点で26号建築址の場合は、柱穴が検出され、遺構解明の点で一歩前進を見たことになる。さらにP134の掘形を四分割したが、底部まで87cmと予想外に深く、断面形状は直に掘り込まれた状況を呈していた。極めてしっかりした掘形で、これは明らかに倉庫建物跡の掘形である。

埋土は3層に分層できた。1層土は層厚62cmで全体の70%強を占め、暗褐色土に黄褐色の土壌粒子が混入していた。2層土は層厚8cmで、黄褐色土に少量の暗褐色土が混じり、3層土は層厚17cmの暗褐色土であった。

⑥ 柱穴の埋土は掘形埋土の1層土と似通っていたが、やや暗色味を帯びて小礫の混入があった。さらに上位部分には砂が混じっていた。

⑦ 参考例としてあげた8号建築址の場合、第116集(熊本県文化財調査報告)の報告書では触れなかったが、調査者として、掘形の形状から、鞠智城に関連する建物と断定できなかった事は真実である。しかし、26号建築址の検出により、このタイプも明らかに鞠智城の建物である事が判明した。

27号建築址

① 桁行方向N48°Wで、中柱の無い側柱のみの掘立柱建物である。構造的には24号建築址と同じで、南側に庇が付く。但し、建物の北側部分は調査区外となるため、全体規模は不明である。検出部分は南側の梁行で1間、桁行は東側で3間、西側で4間の大きさであった。計測値は梁行で5.7m(19尺)、西側桁行で10.0m(33尺)、柱間は桁行で2.5m(8.3尺)を測る。

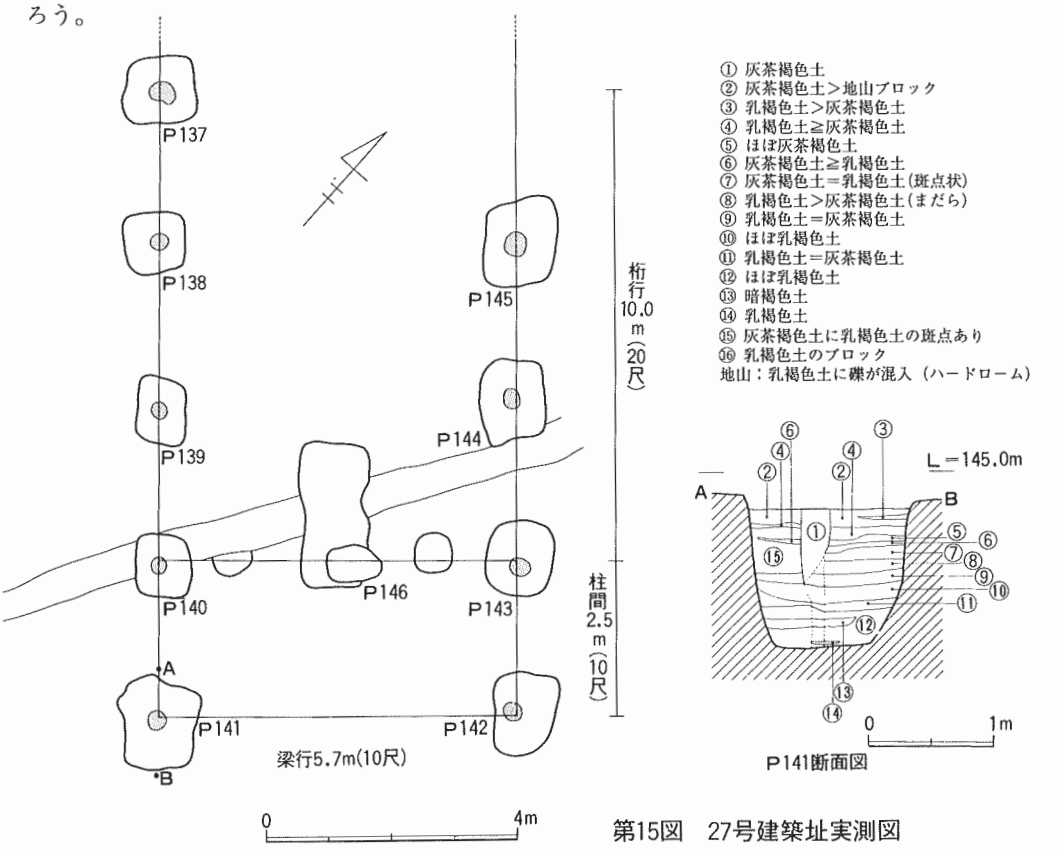
② 掘形は全部で10個が検出された。庇部分にあたるP146は形状がはっきりしなかったが、他のものはすべて方形であった。大きさの最大クラスは、やや歪ながらP141で長軸152cm、短軸110cmを測り、最小クラスのものはP138が長軸95cm、短軸80～92cm、P140が長軸97cm、短軸87cmであった。

③ 柱穴は掘形に対し、西側に片寄るP142を除くと、すべて中心部に位置しており、整然とした並びである。大きさは数字で多少のバラ付きがあるが、30cm弱であったと思われる。検出数値が40cmに及ぶP141とP142については、建物の角隅柱である所から一回り大きな柱が用いられた可能性がある。

④ P141の掘形を四分割したが、深さは120cmあり、底部幅は75cmであった。埋土は乳褐色土と灰茶褐色土が基本になった版築土で、16層に分層できた。柱穴の埋土は灰茶褐色土であったが、下層部分についてはやや不鮮明で、線引きが困難であった。

⑤ 27号建築址での疑問点はＰ146で、これは明らかに２つの掘形が切り合っている状態にあった。庇部分の柱については、東側へ抜き取られている事も明白である。しかしながら、Ｐ146と切り合い関係にある掘形に対比するものが無く、１個だけ浮いた格好となってしまった。

⑥ 同一構造の24号建築址は検出方向がＮ49°Ｅであるので、Ｎ48°Ｗの27号建築址とは、直交状態の建物配列にあるといってよい。両建物間の距離は20ｍ弱である。同一時期の建物であろう。



第15図　27号建築址実測図

掘形No	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	柱穴(cm)	備　　考
P137	方形	105～118	105	30	
P138	方形	95	80～92	26	
P139	方形	100	75	26	
P140	方形	97	87	24～27	
P141	方形	152	110	40	掘形の平面形は、北側でやや歪。
P142	方形	133	97	40	掘形は南側で、ややすぼまる。
P143	方形	121	106	28～47	
P144	方形	130	106	27	
P145	方形	140	113	27	
P146	－	－	－	－	掘形の形状は不明。

第14表　27号建築址掘形観察表

２８号建築址

① 桁行方向N47° Eで、中柱の無い側柱のみの掘立柱建物である。２間×５間で、梁行4.2m(14尺)、桁行９m(30尺)を測る。柱間は梁行が2.1m(7尺)、桁行が1.8m(6尺)の大きさである。29号建築址と切り合い関係にあり、この建物に先行する建物であることがわかる。

② 掘形は、Ｐ147・Ｐ148・Ｐ158・Ｐ160の４個が29号建築址に切られていた。形状はいずれも方形で、最大クラスのものはＰ149が長軸133cm、短軸129cmを測り、最小クラスのものはＰ153で長軸94cm、短軸83～90cmであった。

③ 柱穴の大きさはバラついており、検出値を見る限り不統一である。最小クラスのものは直径24～25cm(Ｐ148・Ｐ149・Ｐ154・Ｐ156・Ｐ158)、中間クラスのものは直径28～30cm（Ｐ153・Ｐ155・Ｐ160)、最大クラスのものは直径35～36cm(Ｐ150・Ｐ152)に及んでいる。この中でＰ152は27号建築址のそれと同様に角隅柱である所から一回り大きな柱が用いられているのであろう。

④ Ｐ152の掘形を四分割したが、深さは100cmあり、底部は丸味を帯びて、幅は65cmであった。埋土は２層ぐらいにしか分層できず、上層は灰褐色土で、下層は乳褐色土と灰茶褐色土の混合土であった。

⑤ 柱穴は土層断面で明確に捉えられ、埋土は灰茶褐色土に少量の乳褐色土の土壌斑点が混じるものであった。

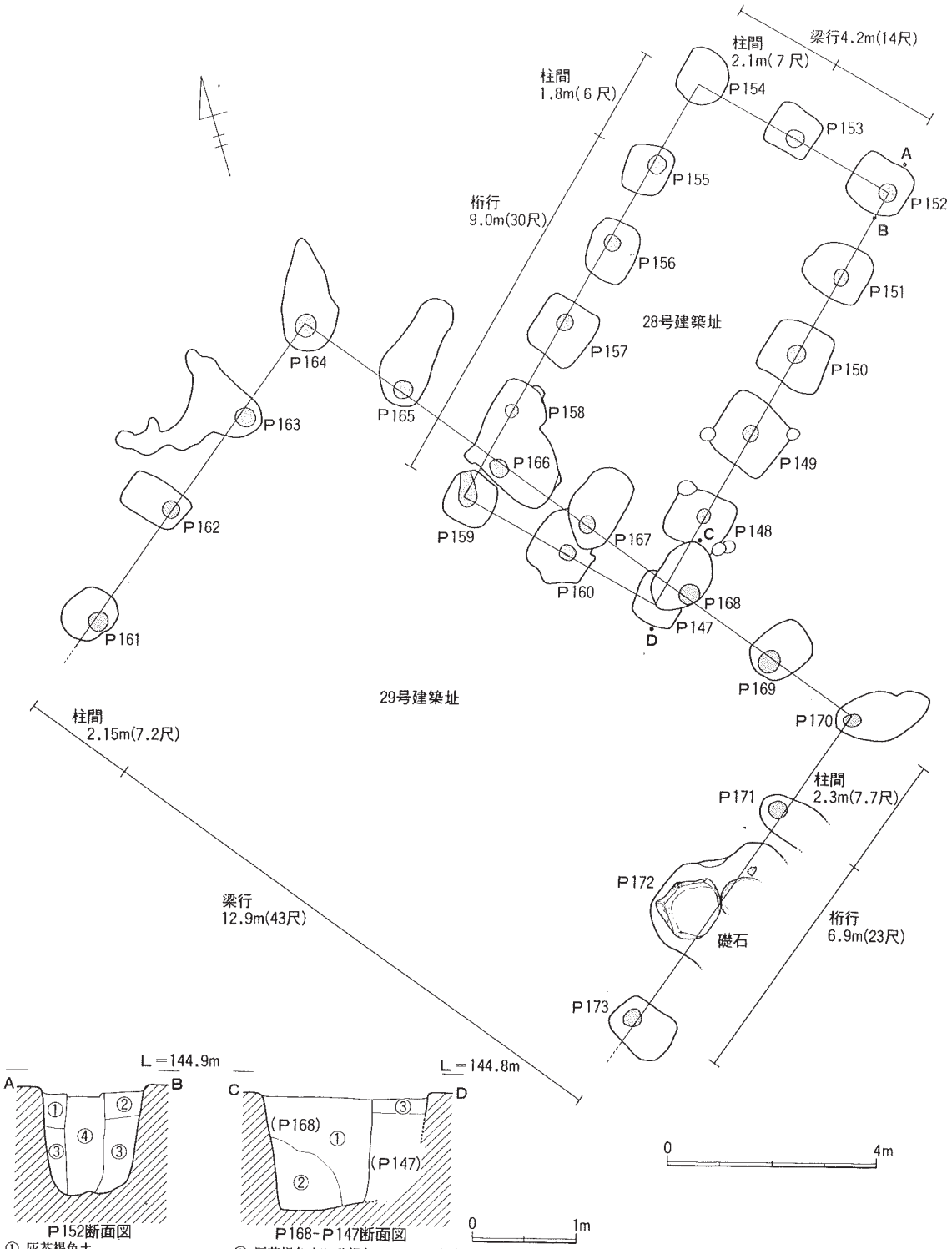
⑥ 28号建築址は桁行方向において24号建築址とほぼ同一であるが、一回り小さい建物である。27号建築址と同様に東側が排土場であったが、それより東側の調査区から一棟の建物も検出されなかった。おそらく排土場の下にも建物は無いであろう。27～29号建物は24号建物と同様に丘陵の縁部に位置している。建物の立地の点で興味深い。

２９号建築址

① 平成元年度の第11次調査で検出し、平成２年度の第12次調査で再調査した12号建築址と同一タイプの建物である。建物の本体部分には礎石が使用され、縁に掘立柱建物の庇が付く構造である。但し、西側半分は墓地にかかり、一部は現地形の丘陵崖面からはみ出るため、全体規模は不明である。

検出部分は東側の梁行で６間(梁行は完掘)、桁行部分は南北側とも３間の検出にとどまった。計測値は梁行で12.9m(43尺)、桁行は6.9m(23尺)であった。柱間は梁行で2.15m(7.2尺)、桁行で2.3m(7.7尺)を測る。

② 掘形は全部で13個が検出されたが、Ｐ163は後世の攪乱穴のために形をなさず、Ｐ171は礎石落とし穴にかかった上に、Ｐ172と同様に南側の一部が未掘である。さらにＰ166は28号建築址との切り合いのため形状が不明である。その他、柱穴は現存するものの掘形の形状が不自然なものが３個(Ｐ164・Ｐ165・Ｐ170)ある。従って、確実に原形を留める掘形は６個のみ(Ｐ161・



P152断面図

① 灰茶褐色土
② 灰茶褐色土に乳褐色土の斑点あり
③ 乳褐色土>灰茶褐色土
④ 灰茶褐色土にごく少量の乳褐色土の斑点

P168-P147断面図

① 灰茶褐色土≫乳褐色ローム土（硬）
② 乳褐色ローム土＝灰茶褐色土（硬・ややパサパサ）
③ 乳褐色ローム土>灰褐色土（極めて硬層）

地山：乳褐色土（ハードローム）

第16図　28・29号建築址実測図

P162・P167～P169・P173)にとどまる。

③ 6個の掘形の形状はバラついており、楕円形(P161)、長方形(P162・P167)、方形(P169・P173)に分かれる。

大きさの最大クラスはP168で長軸144cm、短軸96cmを測り、最小クラスのものはP167で長軸83cm、短軸50cmである。柱穴の大きさも、これ又不統一で、直径30～40cmとバラついている。

④ 掘形の形状が不自然なもの(P164・P165・P170)についての解釈は、柱抜取り穴が重なっていると解釈した方が最も無難であるが、土色の点で掘形との分層ができず、柱穴ラインも一応線引きできる事から疑問として残る。

⑤ P168の掘形を四分割したが(一部は28号建築址のP147の掘形にかかる)、柱穴の位置が南側寄りにあり、柱穴を掛けた分割はできなかった。埋土は2層に分層できたが、版築状態に無く、基本的には灰茶褐色土と乳褐色ローム土の混入土であった。但し、埋土はいずれも硬土で、叩き締められている事が明らかである。

⑥ P171には礎石落し穴があって、大型の礎石が落し込まれていた。礎石の上面は平滑で、明らかに整形されており、側面には割った痕があった。長軸120cm、短軸104cmの大きさである。

掘形No	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	柱穴(cm)	備　　考
P147	方形	—	92	—	29号の掘形に切られている。
P148	方形	117	106	25	西側の一部を29号の掘形に切られている。
P149	方形	133	129	25	
P150	方形	122	115～123	35	
P151	方形	116～125	106	29～33	
P152	方形	117	105	36	柱穴は掘形の南側に片寄る。
P153	方形	94	83～90	28	
P154	方形	106	92	25	やや隅丸方形を呈する。
P155	方形	97	79～87	29	
P156	方形	115	93	24	
P157	方形	115	110	30	
P158	—	—	—	25	掘形の形状を把握する事ができなかった。
P159	—	98	—	—	柱は南側へ倒されている。掘形は正方形に近い。
P160	—	—	—	30	西側を29号建築址の掘形に切られている。

第15表　28号建築址掘形観察表

掘形No	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	柱穴(cm)	備　　考
P161	楕円形	107	91	37	
P162	長方形	128	80	32～38	
P163	—	—	—	42	後世攪乱穴により欠損。
P164	—	—	108	40	掘形は北側部分で原形を保っていない。
P165	—	—	95	33	掘形は北側部分で原形を保っていない。
P166	—	—	—	33～37	掘形の全体形状は不明。
P167	長方形	83	50	—	柱穴は掘形の西側に片寄る。
P168	長円形	144	96	40	柱穴は掘形の南側に片寄る。
P169	方形	120	95	40～44	柱穴は掘形の西側に片寄る。
P170	長円形	185	100	42	掘形は歪で、原形を保っていない可能性あり。
P171	—	—	80	35～45	掘形は南側半分が未掘。
P172	—	—	—	—	礎石落し穴により欠損。
P173	方形	123	85～100	32～36	

第16表　29号建築址掘形観察表

第５節　八角形建物

３０・３１号建築址　（北側八角形建物）

① 平成３年度の第13次調査では、町道沿いの調査区から南北方向に約50ｍの間隔で相並ぶ２棟の八角形建物を検出した。両建物はセット関係にあると思われる。我国の古代山城から初めての検出例であった。

② 当初、南側の建物が検出され、次いで北側の建物が見つかった。従って、遺構の説明に際し、事の経過からすれば南側を先に取り上げるべきであるが、調査区の関係から、北側を先に持ってきた。

③ 17調査区から八角形建物が検出された後、北隣合わせの16調査区にも方形の建物を復元できない散発的な掘形群がある事に気付き、まさかという気持ちながら精査をした所、これ又、八角形建物である事が判明し、二重の驚きとなった。

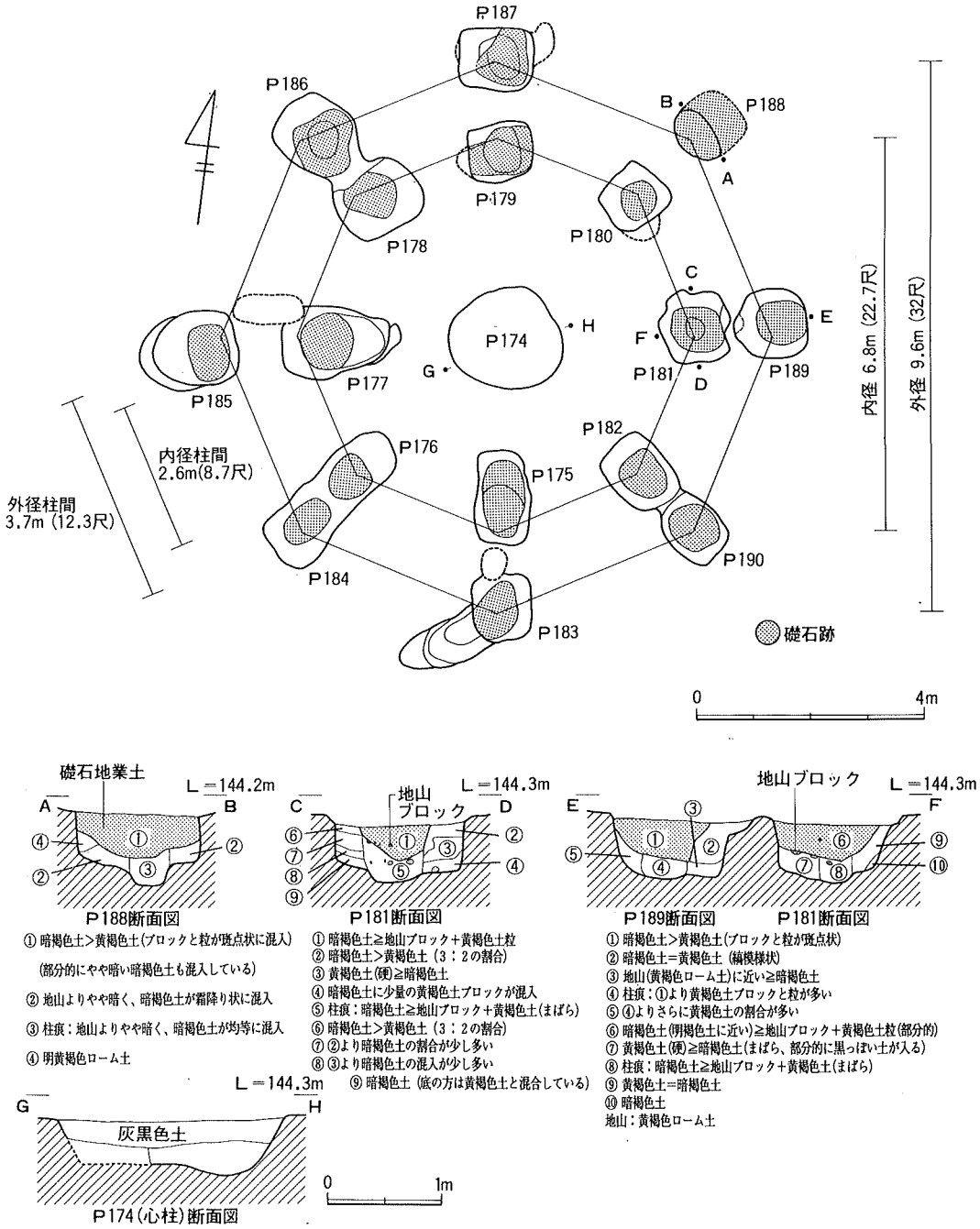
④ さらに、南側は明らかに建て替えの状況にあるのに対し、北側はしばらくの間、再建の真実なしという解釈であった（南側の様に明らかに切り合い関係にあると判る様な掘形が無かった)。しかし、程なくして掘形を四分割した段階で、建て替えがあった事が判明し、調査者を三度驚かせた。

⑤ 北側の八角形建物は、心礎にあたる楕円形状の掘り込みを中心に、８個の掘形が同心円状に２重に巡る状況にある。ここでは遺構の説明に際し、内側の環を内径、外側の環を外径とする。

⑥ 内径は直径6.8m(22.7尺)で、柱間は2.6m(8.7尺)、外径は直径9.6m(32尺)で、柱間は3.7m(12.3尺)となる。計16個の掘形で、Ｐ188が後世の溝に切られて、約1／3程の検出にとどまった。

⑦ 掘形の上面観察では、当初から掘形の内部に灰黒褐色土の掘り込みラインがある事を把握していた。この事については当初、柱抜取り穴であろうと考えた。しかし、平成２年度の第12次調査の際に検出した柱抜取り穴は、いずれも掘形の外側から荒々しく掘り込まれ、その後の埋土も粗な土壌が使用されていた事から疑問が生じた。この八角形建物の掘形の場合、灰黒褐色土の掘り込みラインは例が無く、余りにも掘形内部に納まりすぎているのである。

⑧ そこでまず最初に、Ｐ188を切る後世の溝を掘り上げて、掘形の埋土を調べる事にした。その結果、掘形の埋土は（Ｐ188の場合、灰黒褐色土の掘り込みラインは失われていた)極めてきちっとした灰黒色土である事が判明した。線引きできる様な版築状態には無かったが、叩き締められている事が明らかであった。ところが、まさに予想外の調査結果として、灰黒色土の下層から柱穴が現われたのである。調査者は、瞬時、灰黒褐色土の掘り込みラインはやはり柱抜き取り穴であったのかと思った。



第17図　30･31号建築址実測図

⑨ しかしながら、灰黒褐色土の掘り込みラインが残るＰ181とＰ189を四分割した所、埋土の堆積状態から、この北側の八角形建物は創建時が掘立柱建物で、再建時が礎石建物であったとの推論にいたった。

その根拠は、柱穴の下位部分は土層断面にはっきりとかかるのに、中位から上位にかけて完

(注) P174は心礎で、掘形は長軸92cm×短軸90cm。

掘形No	形態	創建掘形	再建掘形	
			礎石跡	地業部分
P175	内径	長方形。85×161cm。褐色ローム土に、灰黒色土が混入。	74×94cm。灰褐色土に灰黒色土が混入。	75×130cm。灰黒色土に灰褐色土が混入。
P176	内径	――	68×74cm。灰褐色土。	1辺の長さ97cm。灰黒色土。
P177	内径	不整形。基本的に正方形であるが、西側で歪。125×185cm。褐色ローム土に灰黒色土が混入。	89×97cm。灰褐色土。	99×124cm。灰黒色土。
P178	内径	南東隅部分が残る。	71×89cm。灰褐色土。	110×143cm。灰黒色土。
P179	内径	――	62×89cm。黒色味の濃い黒灰色土。	100×179cm。灰黒色土に褐色ローム土のブロックが多く混じる。
P180	内径	南東隅部分が残る。褐色ローム土に灰黒色土が混入。	63×70cm。灰褐色土。	97×110cm 灰黒色土。
P181	内径	方形。116×120cm。褐色ローム土に灰黒色土が混入。	44×33cm。灰褐色土。	78×84cm。灰黒色土に褐色ローム土が混入。固く引き締まる。
P182	内径	――	73×81cm。灰褐色土。	102×132cm 灰黒色土。
P183	外径	――	80×110cm。灰黒褐色土。	104×116cm。灰黒色土。
P184	外径	――	50×90cm。灰褐色土。	1辺の長さ 108cm。灰黒色土。
P185	外径	――	71×100cm。灰褐色土。	127×149cm。灰黒色土。
P186	外径	1辺の長さ 122cm。褐色ローム土に灰黒色土が混入。	53×61cm。灰褐色土に多量の褐色ローム土が混入。	116×119cm。灰黒色土に褐色ローム土が混入。
P187	外径	方形。104×122cm。褐色ローム土に灰黒色土が混入。	58×75cm。灰褐色土。	――
P188	外径	(溝に大半を切られている)		
P189	外径	――	74×90cm。灰褐色土。80×90cm。	112×126cm。灰黒色土。97×118cm。
P190	外径	――	灰褐色土。	灰黒色土に褐色ローム土が混入。

第17表　30・31号建築址掘形観察表

全に欠損しているからである。

前年度の調査結果から、柱を抜き倒したのであるならば、これはありえないと考える。この場合の可能性として、再建時に柱を根元近くから切り取ったか(1)、あるいは、その時、既に柱が完全に立ち腐れの状態にあったか(2)、はた又、創建時の建物が火災に遇って、地中の根元部分のみが残ったか(3) のいずれかであろう。調査者としては(3)のケースを考える。それは今年度の調査で検出された20号～24号の礎石建物は、いずれも火災に遇っていると思えるからである。八角形という、いわば、特殊な建物が時間をおいて再建される(2)の事態は極めて考えにくく、柱を切り取って再建という(1)の推論も、この場合不自然である。

⑩ すなわち、創建時における掘立柱の掘形を壊して礎石建物の地業穴が掘られているという

考えが最も妥当な様に思える。この場合、南側の建物は再建時に建物全体が23.5度振れているのに対し、北側のものは元の位置に再建された事になる。

⑪ 灰黒褐色土の掘り込みラインは、礎石建物の地業穴に対し中心部にある事に気付く。地業穴の埋土は灰黒色土である事から、調査者はこの部分を礎石の座った部分と見る。聞く所によると、昭和40年頃、16調査区の北側畦畔には十数個の礎石が散乱していたという。おそらくこれらが、掘り起こされた再建時における礎石であったろうと思われる。現に今日でも、数個の礎石を見る事ができる。大きさは20号や21号建物のそれと比較した場合、一回り小振りである。

⑫ 4個(P175・P177・P180・P181)の地業穴には創建時の掘形が一部残っていた。埋土は褐色ローム土と灰黒色土の混入土であるが、土色は地山のものと、然程、差異は無い。

⑬ 心礎部分の掘形はやや歪な円形で、長軸90㎝、短軸80㎝の大きさであった。埋土は灰黒色土(硬度は普通)であったが、掘形の内部に心礎そのものの柱穴ラインは見出せなかった。

掘形を四分割しかかった所、思わぬ結果となった。灰黒色土の層厚は、なんと15～20㎝で、すぐさま地山と思われる褐色ローム土が露呈したのである。これには本当に驚かされた。と言うのも、この時、既に我々は南側の八角形建物を掘り終えて、北側の心礎もかなり深いとのイメージを持っていたからである。当然の事ながら、掘形の断面に柱穴はかからなかった。心礎の掘形に疑問が生じた。

⑭ 従って、床面と考えられる褐色ローム土を再度精査した所、土壌に多少の汚れがある事に気付いた。そこで念のため、掘形の壁を切り込む形で、ローム土を10～15㎝掘り下げた。このローム土が実は掘形の埋土であるという見方がでてきたからである。しかしながら精査を繰り返した結果、プライマリーな土壌であるという結論に達した。この事により、心礎の部分の掘形は皿状の掘り込みである事が確定した。

⑮ かかる真実から北側八角形建物の構造は、心柱に重心のかからぬ造りであった事が考えられる。但し、疑問は残る。前述の様に、環状に巡る計16個の掘形は、創建期が掘立柱用で、再建期は礎石用であったと考えられるからである。

衆人目に、再建期はともかくとして、掘立柱の創建期における心礎部分の掘形はもっと深くなければいけないのではないかと考える。しかし、今回は時間が無いので、調査者の報告のみに留める。次年度の報告書には建築学者の所見を掲載したい。

⑯ 建物周辺からの布目瓦の出土は極端に少なかった。しかし、この八角形建物が到底、茅葺きや板葺きであったとは考えられないので、後世、どこかにすべて持ち去られたものと推察する。このことは、前述の礎石建物(20～24号建物)にも言える事である。これまでの調査では、布目瓦の出土量が絶対的に少ない事から、たとえ礎石建物であっても、屋根自体は茅葺きが主体であるとの見方をされていたが、今回の調査からそうとも言えなくなってきたのは真実である。この事に関し、今後、この八角形建物をも含めて再考する必要がある。

３２・３３号建築址（南側八角形建物）

① 南側の八角形建築址は明らかに建て替えの状況にあり、両時期の掘形に柱穴が認められる所から、いずれも掘立柱建物であった事がわかる。この建物の特徴として、建て替え時期に心礎部分は同じ位置を保つものの、建物自体は23.5度振れている事である。平たく言えば、同じ場所に建て替えられたものの建物自体は23.5度回転した事になる。

② 心礎を中心に巡る八角形の環は３重である。建て替えられているので、計算上は心礎を除き、計48個の掘形が存在する事になるが、例外的に唯一、創建期のＰ196のみが再建時のＰ220によって完全に消滅している。

③ 両時期の掘形はＰ196を除くと、端部を少しづつ切り合ってセット関係を造り出している。南側を背にして、この掘形群を眺めると、創建時は左側、再建時は右側に分かれ、実に壮観である。遺構の説明に際しては、北側の八角形建物と同様に、内側から外側へ内径(1)・(2)・外径とする。

④ まず、心礎である。Ｐ191の掘形はやや楕円形で、長軸154㎝、短軸140㎝、心礎そのものの柱穴は直径80～85㎝を測る。掘形を四分割したが、深さは掘形が85㎝、柱穴が116㎝に及んだ。掘形はほぼ直に地山の褐色ハードローム土に掘り込まれており、断面形状において上位と下位幅にほとんど差異が無い。埋土は基本的に灰色土と褐色ローム層のブロック土の混入土で版築されており、柱穴を境に４～７層に分層された。版築土では最下層の一部に極めて軟層な箇所(灰茶色土)があり、驚かされた。

⑤ 柱穴は第19図のＣ－Ｄラインに見る様にきれいな断面形状を呈する。直径は上位で83㎝、下位で70㎝を測る。しかし、Ａ－ＢラインではＡポイント側が外側へ異常に膨らんでおり、歪な形状である。この部分に限り、掘形埋土と柱穴埋土の境も不明確で、非常に疑問である。

⑥ 柱穴の埋土はパサパサしており、灰褐色土に少量の褐色ロームのブロック土が混じるものであった。但し、根元部分ではブロック土の混入量が少ない様に思えた。

⑦ 次に環状に巡る掘形についてであるが、この部分については創建時と再建時に分けて説明を行う。

⑧ 創建期（32号建築址）

1. 内径(1)は直径3.8m(12.7尺)で柱間は1.4m(4.7尺)、内径(2)は直径5.9m(19.7尺)で柱間は2.3m(7.7尺)、外径は直径9.2m(30.7尺)で柱間は3.5m(11.7尺)となる。
2. 内径(1)の掘形は、いずれも大半を再建期の掘形によって切られており、部分的な検出に留まった。Ｐ196の様に消滅しているものもある。
3. 内径(2)の掘形は、平面形状が長方形のもの(Ｐ201)と楕円形状のもの(Ｐ202～Ｐ204)、さらに方形のもの(Ｐ200・Ｐ205～Ｐ207)に分けられた。大きさは参考数値(掘形に切り合いがあるため、部分的な計測に留まる)のものもある。最大クラスがＰ201で長軸164㎝、短軸112

cm、最小クラスのものはP203で長軸102cm、短軸100cmであった。

4. 外径の掘形は、平面形状が方形のもの(P208・P211～P213・P215)、やや長方形のもの(P209・P210)とに分けられた。この中でP211は歪な形状である。P214については東側の2／3を町道の側溝によって切られている。

5. 柱穴は内径(1)の場合、1個も検出できなかった。

内径(2)ではP200・P203・P206を除き、柱穴が検出できた。しかし大きさはかなりバラついており、最大クラスのもので直径56cm(P204)、最小クラスのもので直径36cm(P205)を測った。P206では柱抜取り穴が検出された。掘形内部に納まる大きさで、長軸88cm、短軸66cmを測る。

外径ではP213とP215から柱穴が検出できた。大きさはP213は直径48～55cm、P215が直径41cmである。従って、これらの事から創建時の柱穴の大きさは、大方、40cm強と推察される。

⑨ 再建期(33号建築址)

1. 内径(1)では直径4.0m(13.3尺)で柱間は1.5m(5尺)、内径(2)は直径6.7m(22.3尺)で柱間は2.5m(8.3尺)、外径は直径9.8m(32.7尺)で柱間は3.8m(12.7尺)となる。

2. 内径(1)の掘形は、平面形状がすべて歪な方形で、大きさは最大クラスがP217で長軸137cm、短軸107cm、P222が長軸123cm、短軸111cm、最小クラスのものはP221で長軸103cm、短軸95cmを測った。

3. 内径(2)の掘形は、方形のP225を除き、すべて長方形であった。大きさは最大クラスがP224で長軸156cm、短軸113cm、最小クラスのものはP226で長軸111cm、短軸91cmを測った。

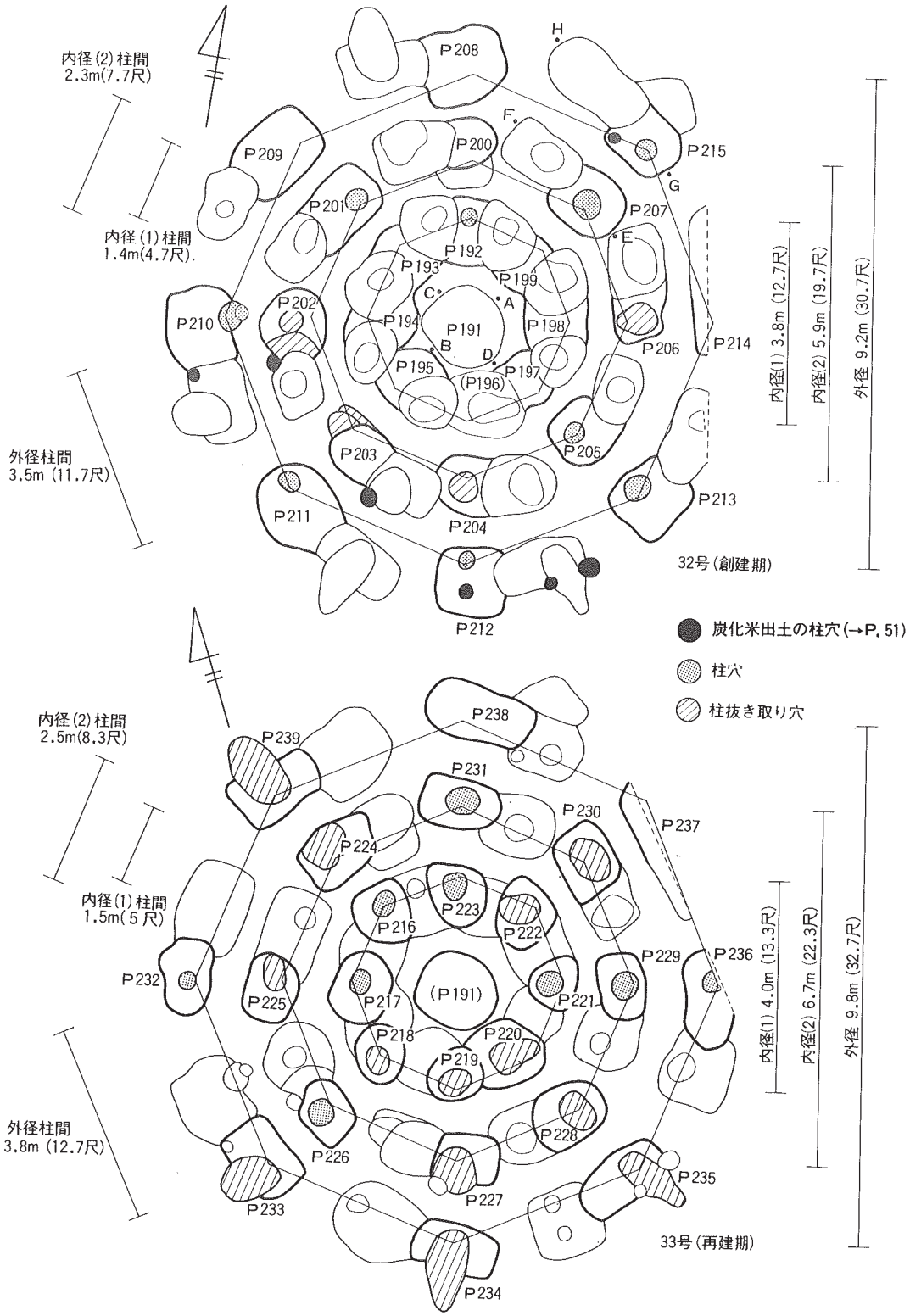
4. 外径の掘形はP237が道路の側溝に東側を切られている他は、すべて歪な長方形であった。大きさは最大クラスがP234で長軸167cmで、短軸128cm、最小クラスのものはP232で長軸137cm、短軸80cmであった。

5. 柱穴は内径(1)の場合、すべて検出され、大方、直径40～45cm前後であった。

内径(2)では、P225・P226・P229・P231の掘形から検出された。大きさは直径43～68cmで、かなりバラついている。残りの掘形(P224・P227・P228・P230)からは、いずれも柱抜取り穴(P227が掘形の枠をはみ出している以外は、いずれも内部に納まっている)が検出された。

外径では、P232とP236から柱穴が検出された。大きさはP232が直径33cmで、P236が42cmを測る。残りの掘形の内、P233・P235・P239には柱抜取り穴がある(いずれも掘形の外側から荒々しく掘り込まれたもので、掘形に対し、柱を直の方向へ引き倒している事がわかる)。

⑩ 切り合い関係にあるP207・P231・P215・P238の掘形を四分割した。前述の様に平面的には掘形の切り合い関係をなんとか捉えていたが、土層断面での線引きは至難の業であった。



第18図　32・33号建築址実測図

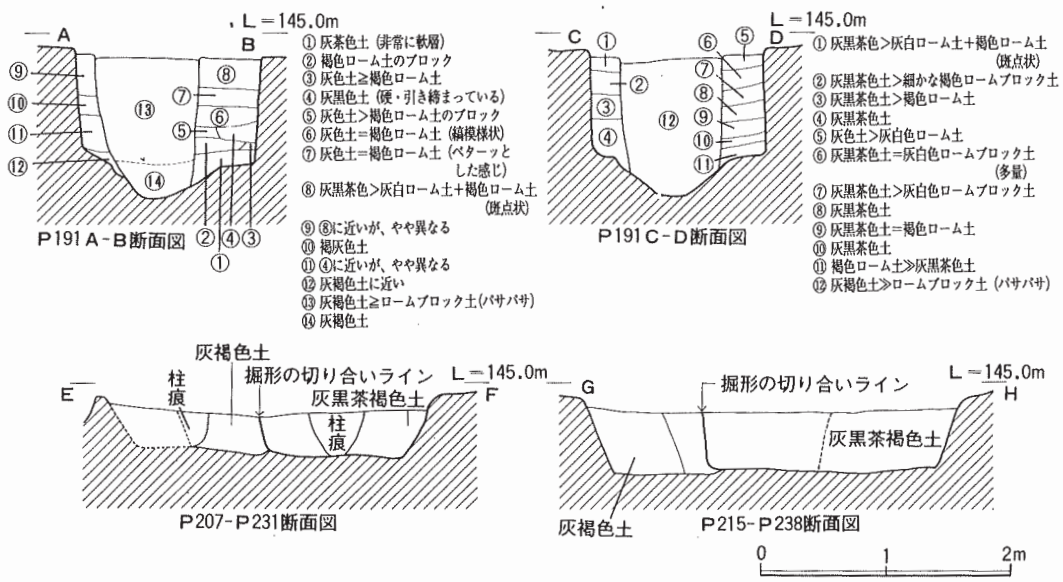
(注) P191は心礎である。掘形は長軸154cm×短軸140cm、柱穴は直径90cmを測る。
なお、表中の数字につけた( )は計測可能な中での最大値であることを示す。

掘形No	形態	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	柱穴(cm)	備　　考
P192	内径(1)	—	—	(132)	34	
P193	〃	—	—	(123)	—	
P194	〃	—	—	(133)	—	
P195	〃	—	—	(118)	—	
P196	〃	—	—	(117)	—	
P197	〃	—	—	(108)	—	
P198	〃	—	—	(119)	—	
P199	〃	—	—	(112)	—	
P200	内径(2)	方形 ?	—	(98)	—	
P201	〃	長方形	(164)	112	40	
P202	〃	楕円形	(140)	127	40～46	
P203	〃	楕円形	(102)	100	—	
P204	〃	楕円形	—	(114)	56	
P205	〃	方形	—	122	36	
P206	〃	方形	—	89	66～88	柱抜き取り穴あり。
P207	〃	方形	(140)	126	49～54	
P208	外径	方形	160	94	—	
P209	〃	やや長方形	(170)	126	—	
P210	〃	やや長方形	153	130	—	
P211	〃	歪な方形	(160)	147	—	
P212	〃	方形	132	—	—	
P213	〃	方形	130	128	48～55	
P214	〃	(道路の側溝で切られている)				
P215	〃	方形	(125)	108	41	

第18表　32号建築址掘形観察表

掘形No	形態	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	柱穴(cm)	備　　考
P216	内径(1)	やや歪な方形	123	107	40～47	
P217	〃	—	137	107	40～44	
P218	〃	—	116	98	44～58	
P219	〃	—	109	98	48～65	
P220	〃	—	—	—	—	
P221	〃	歪な方形	103	95	47～51	掘形は東側ですぼまる。
P222	〃	方形	123	111	62～98	
P223	〃	やや歪な方形	116	110	44～51	
P224	内径(2)	やや歪な長方形	156	113	—	柱抜取り穴あり。71×77cm。
P225	〃	方形	122	97	43～68	
P226	〃	方形	111	91	50	
P227	〃	長方形	123	93	—	柱抜取り穴あり。80×88cm。
P228	〃	やや歪な長方形	140	112	—	柱抜取り穴あり。62×74cm。
P229	〃	長方形	126	85	52	
P230	〃	長方形	130	103	—	柱抜取り穴あり。56×89cm。
P231	〃	長方形	153	95	51～61	
P232	外径	歪な長方形	137	80	33	
P233	〃	長方形	152	106	—	柱抜取り穴あり。80×107cm。
P234	〃	長方形	167	128	—	柱抜取り穴あり。73×128cm。
P235	〃	長方形	178	91	—	柱抜取り穴あり。55×142cm。
P236	〃	歪な長方形	185	94	42	道路の側溝に切られている。
P237	〃	(道路の側溝に切られている)				
P238	〃	歪な長方形	202	110	—	
P239	〃	歪な長方形	162	83～108	—	柱抜取り穴あり。82×146cm。

第19表　33号建築址掘形観察表



第19図　32・33号建築址掘形断面図

何度も精査を繰り返したが土色は、まったく差異が無かったのである。線引きにはかなりの時間を要した（同じ様な事が平成２年度の第12次調査の際にも起こっている。17号建築址と18号建築址の切り合い関係が類似しており、掘形を分ける線引きが極めて困難であった事を記憶している。この場合、雨上がりにおいてやっと線引きができる程度であった。なお、この事に関しては平成２年度分の報告書＝熊本県文化財調査報告 第116集に記載がある）。今後の研究課題である。結局、最終的には、埋土の硬度の差異によって２つの掘形を分けた。すなわち、掘形の埋土は基本的に灰茶褐色土で叩き締められた観はあったが、いずれも版築の状況を示す線引きはできなかった。但し、比較すれば創建時のものが硬く、再建時のものがやや軟らかいという感じであった。さらに土色に、あえて相違を見い出せば、再建時のものがほんの僅かであるがやや黒っぽい感じであった（平面形での線引きではこの土色の違いを参考にした。平面形で見た場合はもっと黒かったように思えた）。

⑪ 創建時と再建時の掘形の埋土に差異がない事について考える。ここで、さらに掘形の断面図（第19図）に見る様に底部においては両時期とも、ほとんど同一レベルである事も記しておく。

切り合い関係にある掘形の線引きの難しさについては、前述の様に、17号建築址と18号建築址の事例がすでにある。南側の八角形が初めてでは無い。

無難な考え方は、創建時と再建時の間に時間的な隔たりが余り無いという事である。すなわち建て替えの時期が極めて早かったという考えである。この裏付け資料の一つとして、17号建築址と18号建築址の事例があげられる。第12次調査の調査区は、時期的に７世紀後半の遺構が集中しており、時期的な幅は無いと考えられている。しかるに、これらの建物はその中にある所から、必然的に建て替え時期も時間的な隔たりが無い事になる。

⑫ 建て替えの時期が早い事については、30号建築址(北側八角形建物)の⑨で述べた様に、まずもって火災で焼失した事が考えられるが、この他に自然災害(台風・地震)や設計ミス等が上げられる。

⑬ 八角形建物の使用目的についても未解決である。現時点では(平成4年3月現在)、調査者が現地で指導を受けた諸先生方の考えを列記するにとどめる。

1. 楼観であろう。城主にあたる役人が守備兵を鼓舞した所であろう。 〔 坪井清足 〕
2. 仏教施設の円堂もしくは円塔であろう。国家の非常時に直面し、大和朝廷が国家鎮護のために建立した。 〔 岡田茂弘・小田富士雄 〕
3. 鼓楼であろう。城内に時を告げる大太鼓を吊るした建物であろう。 〔 沢村 仁 〕
4. 天壇・地壇であろう。 〔 キム・ビョンモ 〕

⑭ 建物の時期について述べる。心礎の柱穴から土師器(No.139)、再建期の掘形から須恵器の胴部片(No.137)が出土した。さらに建物の周辺から須恵器で高坏の身(No.136)が出土している。これらの事から、八角形建物は8世紀を下るものではないと推察される。建物の下限を奈良時代までと見る。

⑮ 韓国京畿道河南市春宮洞に所在する二聖(イーソン)山城から、最近の発掘調査で、八角形建物が検出されている。この事については後述する。

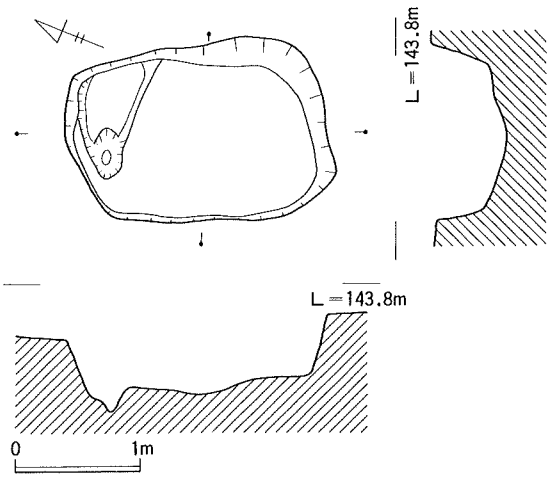
第6節 鞠智城以前の遺構について

〔1〕土 坑

12区の西側寄りから検出されたもので、一部は20号建築址にかかる。長軸4.15m、短軸2.8m、深さ1.15mを測る。埋土はサラサラした締まりのない黒色土で、上層部分には焼土粒子が混入していた。

出土遺物は極めて少なく、甑の破片が出土した程度である(この遺物は盗難にあった)。

決め手に欠くが、埋土の状況から20号建築址以前の遺構と考えられる。



第20図 土坑実測図

〔２〕竪穴住居址

① 18調査区から検出されたもので、一辺の長さは3.75mのほぼ、正方形の住居址である。12次調査の調査結果と同じく、上位部分が大きく削られて床面のみの残存である。覆土の厚さは約２～５㎝で、灰褐色土に多量のカーボン粒子が混入していた。

② 硬化面は住居址の中央部、南側寄りにあるが、長さ96㎝、幅65～70㎝の範囲に留まる。

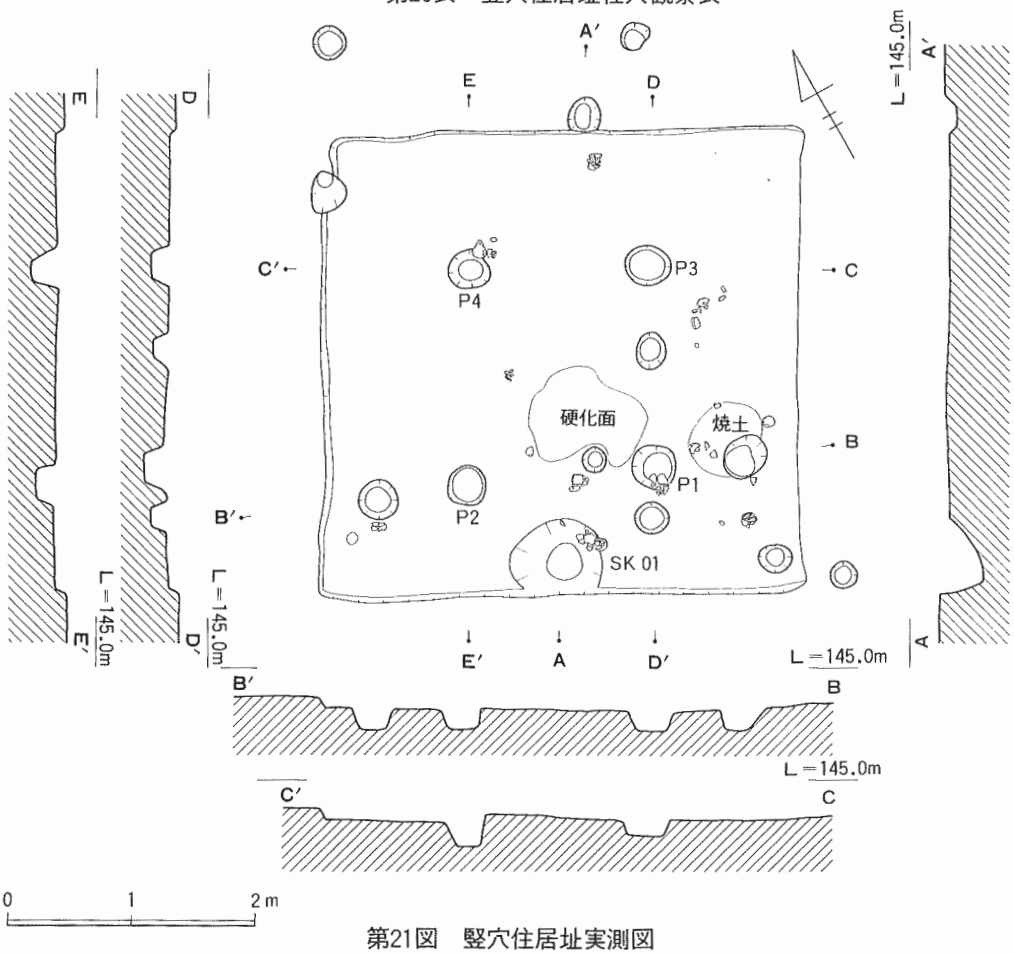
③ 住居址は４本柱(P1～P4)で、南縁のほぼ中央に貯蔵穴らしい掘り込み(SK01)がある。

④ 出土遺物(No.142～149)から、６世紀中葉～後半の住居址と思われる。

遺構名	長径	短径	深さ	備　　考
Ｐ１	35	34	16	
Ｐ２	31	29	12.5	埋土にカーボンと焼土粒が混じる。
Ｐ３	37	32	13.4	
Ｐ４	34	30	18.9	
ＳＫ０１	74	(58)	26.3	埋土に多量のカーボンが混じる。

（単位：㎝）

第20表　竪穴住居址柱穴観察表



第21図　竪穴住居址実測図

第７節　出土炭化物について

平成３年度の第13次調査で炭化米が出土したので、カーボンの年代測定を京都産業大学理学部の山田　治 教授に依頼した。結果は下記の通りであるが、若干の補足説明を行う。

① 山田教授によれば、一年生植物である炭化米の年代測定は、年輪を有する木材等と違い、試料自体に原因を持つ誤差は生じないという。

② 南側八角形建築址の掘形埋土を切る柱穴より出土した炭化米の年代は1000±15ＢＰで、これは西暦950±15年に該当するが、この値は更に細かく考察すると第21表の^{14}Ｃ年代と年輪年代との対照表では、標準偏差２倍、信頼度95％でＡＤ(西暦)1000～1020年になる。しかるに、文献上から鞠智城が消える年代が879年(『三代実録』による) なのでカーボン測定値と文献資料の年代は大体一致する事になる。

③ 17調査区の北東隅から検出された炭化米の年代測定結果は1450±15ＢＰとなり、これは西暦500±15年という事になるが、同じく、第21表によりＡＤ590～640年(６世紀後半～７世紀中葉)という事になる。この年代は大きな問題である。そもそも文献上に鞠智城が現われるのは西暦698年(『続日本紀』による)であるので、年代が若干、遡る事になる。平成２年度に鞠智城の第９次調査(昭和62年度調査)で長者山より出土した炭化米を同教授のもとで年代測定した所、西暦650±30年(第21表によりＡＤ660～770年)という文献記録と照合しても妥当な線がでているが、今回はその年代よりも70～130年程以前のものとなってしまう。この件に関し、鞠智城の築造年代にもかかわってくる問題なので(これまでの調査結果では城内から検出される竪穴住居址の最終年代が６世紀後半であるので、それ以前に鞠智城の築城年代が遡る事は考えられない。炭化米の年代はギリギリの線である)、今回は山田教授の結果報告のみの掲載に留める事にする。

測定番号	試料名・採取地	^{14}Ｃ年代測定値(ＢＰ)
ＫＳＵ－2220	南側八角形建築址の掘形埋土を切る柱穴より出土した炭化米	1000±15ＢＰ
ＫＳＵ－2221	17調査区の北東隅から検出された炭化米層の一部	1450±15ＢＰ

〔註〕^{14}Ｃ年代測定値の表現法は、次のごとき国際的約束に基づいています。
①^{14}Ｃの半減期は5568年とします。現在知られている最も確からしい^{14}Ｃの半減期は5730±30(年)ですが、まだ完全ではありません。今までずっとLibbyの採用した半減期5568年が用いられてきているので、確実な半減期が得られるまで変更しないほうが世界全体のデータの比較のために便利です。
② ＢＰは Before Present の略です。ただし、PresentはＡＤ1950年に固定しています。例えば、500ＢＰということはＡＤ 1950年から500年前であることを意味します。
③ 測定誤差は１標準偏差です。なお、真の値が１標準偏差の中にはいる確率は68％、標準偏差の２倍幅の中には95％、３倍幅の中には 99.7％が入ります。
④ 測定値には測定機関記号(京都産業大学の場合はＫＳＵ)と測定番号をつけることになっています。
データの索引や確認になくてはならないものですから、記録や引用の際には必ずこの記号と番号をつけておいて下さい。

^{14}CAge	年	輪	年	代						
	0	10	20	30	40	50	60	70	80	90
0 BP									AD1898＊	AD1892
100	AD1885＊	AD1791	AD1696＊	AD1691	AD1686＊	AD1683	AD1679＊	AD1676	1673＊	1670
200	1666＊	1663	1660＊	1657	1654	1651	1648	1645	1642	1639
300	1636	1580	1523＊	1519	1514＊	1500	1486	1480	1474	1467
400	1460	1454	1448	1446	1443	1440	1437	1444	1431	1434
500	1442	1428	1414	1411	1407	1404	1401	1365	1328＊	1323
600	1317＊	1312	1306＊	1301	1295	1292	1288	1286	1283	1281
700	1279	1277	1275	1273	1270	1267	1265	1262	1259	1252
800	1245	1235	1225	1221	1217	1199	1181	1174	1166	1163
900	1159	1103	1047＊	1043	1039	1035	1030	1027	1024	1021
1000	1018	1015	1012	1006	999	992	985	980	974	968
1100	961	929	897	894	891	889	886	883	880	846
1200	811＊	798	785	781	776	751	725＊	707	689	690
1300	681	677	673	670	666	663	660	657	654	651
1400	647	642	637	629	620	613	605	601	596	579
1500	561	555	548	545	539	501	462＊	452	441	435
1600	429	425	420	416	412	405	398	390	381	362
1700	343	304	265＊	261	257＊	253	249	244	238	236
1800	227	221	214	177	140	130	129	124	118	103
1900	87	82	77	71	66	47	28＊	22	15	8
2000	BC 1	BC 18	BC 36	BC 43	BC 50	BC 73	BC 96	BC 101	BC 105	BC 128
2100	151＊	160	168	178	187	192	196	268	339＊	346
2200	353＊	358	362＊	366	370	375	379	384	388	390
2300	392	394	395	397	399	401	402	404	405	407
2400	408	446	484＊	504	523	639	755＊	758	760＊	763
2500	765＊	768	770	778	786	790	793	795	797	799
2600	801	803	805	807	809	814	818	823	828	833
2700	838	865	892＊	897	901	905	909	915	920	948
2800	976＊	984	992	998	1003	1012	1021	1033	1045	1069
2900	1093	1109	1124＊	1142	1159＊	1206	1252＊	1255	1258＊	1261
3000	1263	1282	1300＊	1307	1314	1348	1382＊	1388	1394＊	1400
3100	1406	1411	1416	1420	1424	1429	1433	1439	1445	1476
3200	1506＊	1510	1514	1517	1519	1521	1523	1557	1590＊	1599
3300	1607＊	1614	1621	1632	1643	1660	1677	1681	1685	1709
3400	1733＊	1737	1740	1743	1746	1749	1851＊	1862	1872＊	1875
3500	1877＊	1880	1883	1885	1888	1903	1908	1922	1936	1949
3600	1961	1990	2018＊	2025	2032	2035	2037	2080	2123＊	2128
3700	2133＊	2136	2138	2160	2181＊	2188	2195＊	2199	2202	2240
3800	2278＊	2283	2288	2302	2316	2330	2343	2398	2453＊	2455
3900	2457	2460	2462	2464	2466	2468	2470			

＊印の場所は、1つの Radiocarbon Age に対して2つ以上の Caliblated Age が存在しますから、第22表を参照してください。

第21表　^{14}C年代と絶対年代(年輪年代)の対照表〔 1986　Radiocarbon誌 アメリカ による 〕

^{14}CAge	年	輪	年	代			
80BP	AD1898	AD1902	AD1955F				
100	1885	1912	1955F				
120	1696	1726	1818	1859	1861	1921	1955F
140	1686	1736	1808	1930	1955F		
160	1679	1743	1802	1938	1955F		
180	1673	1754	1796	1945	1954		
200	1666	1790	1951	1952			
320	1523	1565	1629				
340	1514	1600	1616				
580	1328	1333	1395				
600	1317	1347	1388				
620	1306	1359	1379				
920	1047	1092	1119	1143	1153		
1200	811	847	851				
1260	725	735	765				
1560	462	477	526				
1720	265	281	333				
1740	257	296	321				
1960	28	44	51				
2100	BC151	BC 149	BC 117				
2180	339	323	203				
2200	353	306	236				
2200	362	282	258				
2420	484	438	423				

（F は未来）

第22表　^{14}C 年代と絶対年代（年輪年代）の対照表 2

第Ⅲ章　出土遺物

① 第13次調査で出土した遺物は、昨年までの調査と同様に、大方のものが地山(ローム層土)直上の土層からで、遺構からの出土は極く少量であった。

② 遺物包含層は、後世の農耕によって攪乱された状況にあり、この土層から遺構は検出できなかった。

③ 従って、遺構の年代を推定する判断材料の出土遺物は、やや資料的価値においてマイナス面がある事を最初に述べておきたい。

1.12 調査区

須恵器〔1～26〕　1～14は蓋で、上限は7世紀前半(2・10)、下限は8世紀(12)に入るが、時期的には7世紀後半に集中する。返りは1のみが貼り付けで、長さ1.1cmを測る。4は復元口径13.5cmで、返りの削り出しは5と同じく極めて小さい。15は7世紀後半の坏である。体部は大きく開き、復元底径は7.4cmを測る。16・17は甕の頸部である。16は内外器面とも横ナデ調整で、17の外器面には2条の凹線間に波状文が施されている。18～26は甕の胴部である。18は器厚が1.8～1.9cmと肥厚する。内外器面の調整は次の通りである。

〔外器面〕　極細目の格子タタキ(18)　細目の格子タタキ(19・22)　直交の平行タタキ(20)
平行タタキ後ハケ目(21・23)　細目の平行タタキ(24・25・26)

〔内器面〕　平行タタキ(18・22・24)　円文タタキ(19～21・23・25・26)

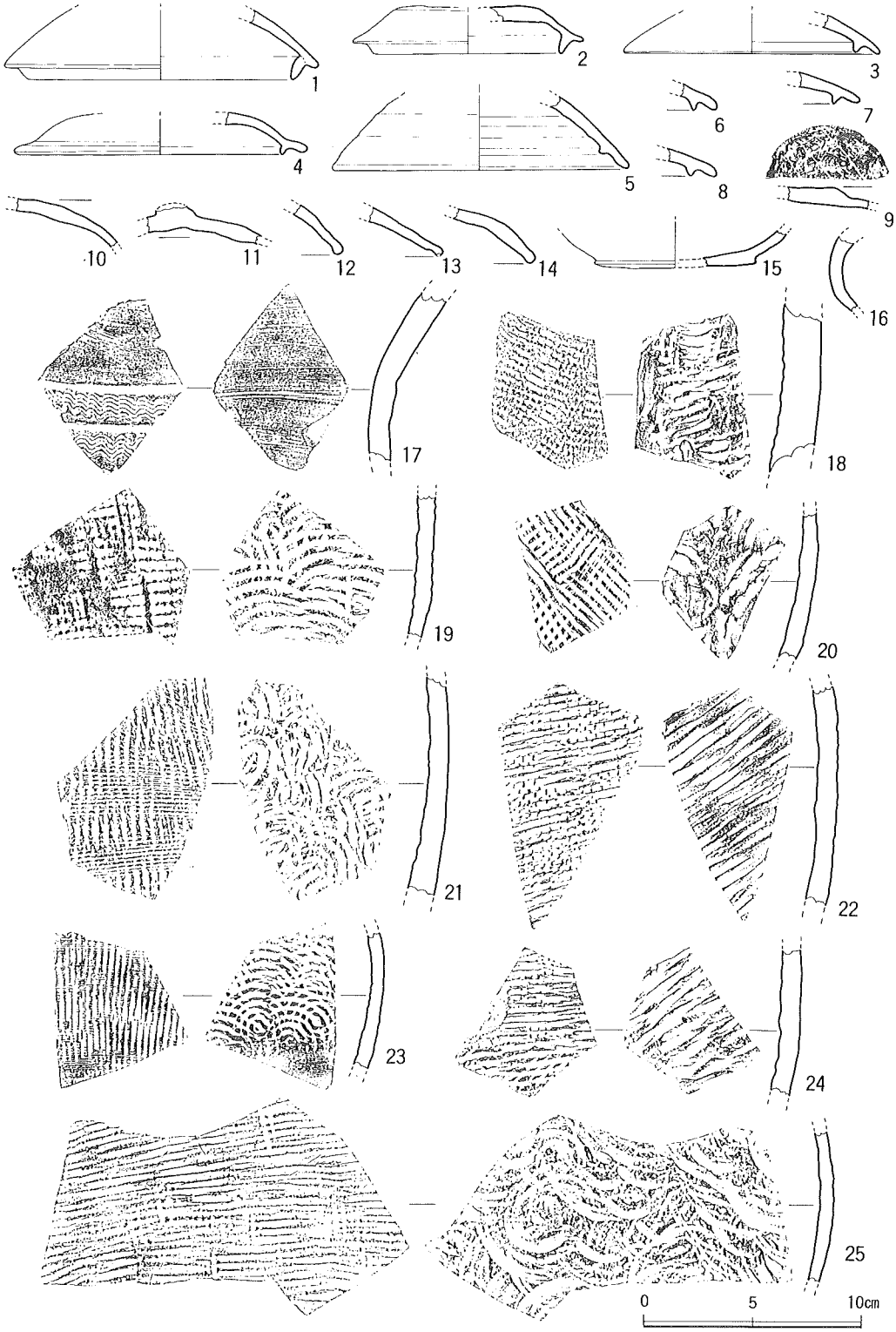
土師器〔27～33〕　高台付き椀(27・28)、杯(29)、皿(30・33)、甑(31)、甕(32)がある。27・28は赤彩土器で、復元底径は27が8.4cm、28が7.9cmを測る。29は底部で、外底面はヘラ切りされており、板目圧痕が残る。底径6.6cmを測る。30は底部である。器厚は中央が極めて薄壁で、端部にかけて肥厚する。外底面はヘラ切りで、復元底径8.0cmを測る。33は口縁直口で、復元口径13.5cmを測る。

弥生土器〔34～36〕　34は口縁部の上位が直立し、口唇部は扁平である。35は底部で、外底端は角張り、復元底径8.4cmを測る。36は体部が大きく内弯し、復元口径14.5cmを測る。

縄文土器〔37・38〕　37は底部で平底である。底径10.2cmを測る。38は晩期の土器で、口唇部に貝殻条痕が残る。

中世遺物〔39～44〕　青磁碗(39・41・42)、白磁皿(40)、土器(43)、瓦質擂鉢(44)がある。39は12世紀、40は15世紀末～16世紀、41・42は14世紀末～15世紀のものである。

布目瓦〔48～79〕　別途記載。



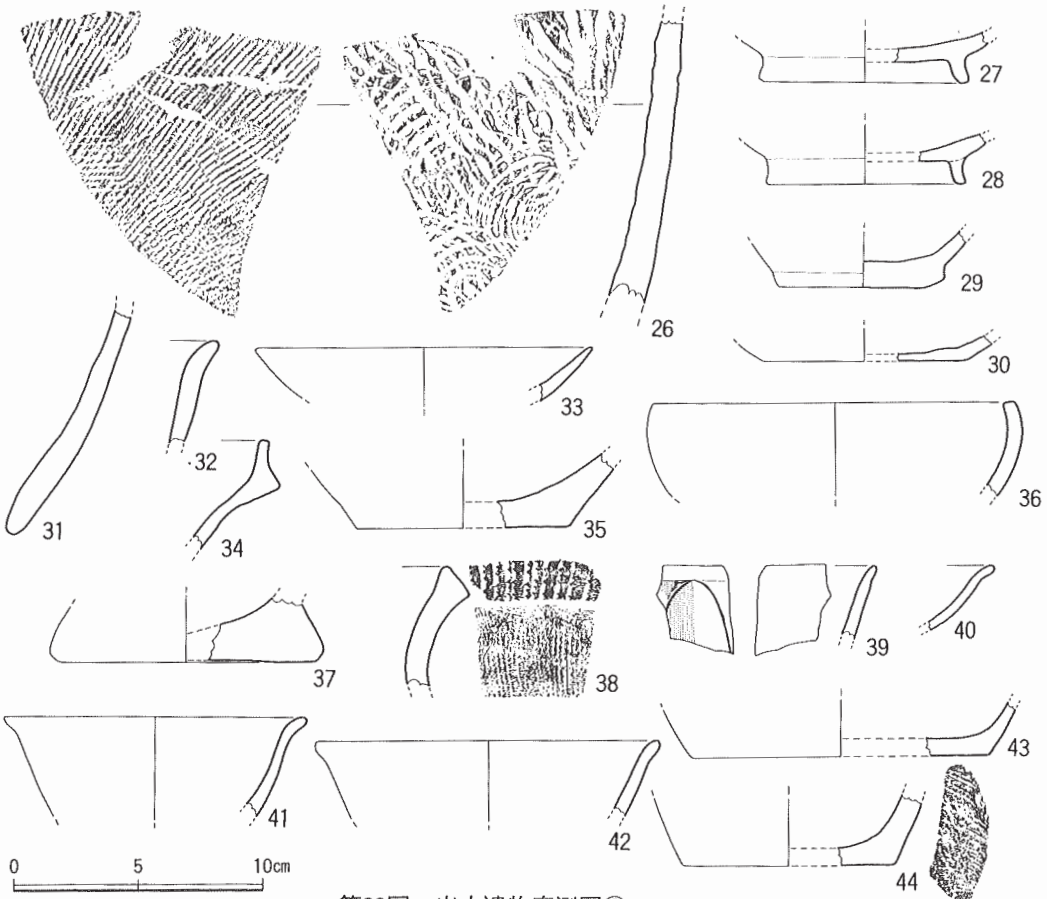
第22図　出土遺物実測図①

No	器　種	器厚(mm)	胎　土	色　調	焼成	形　　態	調　　整
1	須恵器 (蓋) 7C後	中位　6.0 下位　4.0	密 混入物 (極少量)	白灰色	普通	返りは貼り付けで、長さは1.1cmを測る。	〔外器面〕丁寧な回転ナデ。
2	須恵器 (蓋) 7C前	上位　6.5 中位　3.0 下位　2.5	堅緻 砂粒(微細) 鉱物(微細) (多量)	灰黒色	良好	返りは削り出し。	〔外器面〕上位：ヘラ削り後、未調整。 中～下位：回転ナデ。 〔内器面〕上位：不定ナデ。 中～下位：回転ナデ。
3	須恵器 (蓋) 7C前～中	中位　6.0 下位　3.0	堅緻 砂粒(微細) 雲母(微細) (多量)	白灰色	良好	返りは削り出し。	〔外器面〕丁寧なナデ。
4	須恵器 (蓋) 7C前～中	中位　5.0 下位　3.5	緻密 砂粒 (極少量)	灰黄色	良好	復元口径　13.5cm 端部は弯曲する。 返りは削り出しで、非常に小さい。	〔外器面〕中位：回転ヘラ削り。
5	須恵器 (蓋) 7C中～後	上位　6.0 中～下位　4.0	堅緻 砂粒(微細) (少量)	灰　色	良好	返りは削り出しで、極めて小さい。長さ2mm程度。	〔外器面〕上位：回転ヘラ削り。 中～下位：回転ナデ。 〔内器面〕回転ナデ。
6	須恵器 (蓋) 7C後	中位　5.0 下位　4.5	緻密 混入物 (極少量)	灰　色	良好	返りは削り出し。	〔外器面〕非常に丁寧な回転ナデ。
7	須恵器 (蓋) 7C後	中位　6.5 下位　3.5	緻密 砂粒 (極少量)	灰黒色	良好	返りは削り出し。	〔外器面〕非常に丁寧な回転ナデ。
8	須恵器 (蓋) 7C後	中位　5.5 下位　4.5	緻密 混入物 (極少量)	灰白色	良好	返りは削り出し。	〔外器面〕非常に丁寧な回転ナデ。
9	須恵器 (蓋) 7C後	上位6.0～8.0 端部　3.5	緻密 砂粒(微細) (やや多し)	灰　色	良好	――	〔外器面〕 中央部：粗いナデ。ヘラ記号あり。 端部：ナデ。 〔内器面〕回転ナデ。
10	須恵器 (蓋) 7C前	上位　6.0 中位　7.0 下位　3.5	密 砂粒 (極少量)	灰白色	良好	――	〔外器面〕上位：粗いナデ。 中～下位：回転ナデ。 〔内器面〕回転ナデ。
11	須恵器 (蓋) 7C前～中	上位　7.0 中位　6.5	堅緻 混入物 (極少量)	灰　色	良好	(つまみの一部を欠損) つまみ部は貼り付けによる。 貼り付ける前に削りによって段をいくつか付けている。	〔外器面〕刷け目？ 〔内器面〕上位：不定ナデ。 中位：回転ナデ。
12	須恵器 (蓋) 8C	上位　5.0 中位　4.0 下位3.5～5.0	堅緻 白色粒 (やや多い)	灰　色	良好	――	〔外器面〕回転ナデ。 上位：ハケ状工具の痕。 〔内器面〕回転ナデ。
13	須恵器 (蓋) 8C	上位　7.0 中位　5.0 下位3.0～4.0	堅緻 砂粒 (極少量)	灰白色	良好	――	〔外器面〕回転ナデ。 〔内器面〕回転ナデ。 上位：不定ナデ。
14	須恵器 (蓋) 8C	上位　4.5 中位　7.0 下位4.0～5.5	堅緻 砂粒 (極少量)	灰黄色	良好	――	〔外器面〕上位：ヘラ削り。 下位：回転ヘラ削り。 〔内器面〕回転ヘラ削り。
15	須恵器 (坏) 7C後	底部　5.0 外底端　7.0 体部　5.0	密 砂粒 (極少量)	灰白色	普通	復元底径　7.4cm 体部は大きく開く。 体部の立ち上がりは窪む。	〔外器面〕粗い回転ナデ。 〔内器面〕粗い回転ナデ。 〔外底面〕回転ヘラ切り離し後、未調整
16	須恵器 (甕の頸部)	上位　7.5 下位　4.0	堅緻 砂粒 (極少量)	〔内〕灰白色 〔外〕灰色 一部に自然釉がかかる	良好	――	〔外器面〕回転横ナデ。 〔内器面〕回転横ナデ。
17	須恵器 (頸部)	上位　12.0 中位　10.5 下位　10.0	堅緻 砂粒 (極少量)	〔内〕 灰白黄色 〔外〕黒灰色	良好	――	〔外器面〕指押え。ナデ。 2条の凹線(3mm幅)。凹線間に波状文。 〔内器面〕横ナデ。
18	須恵器 (胴部)	上位　18.0 下位　19.0	堅緻 白色粒 (極少量)	〔内〕灰白色 〔外〕灰黒色	良好	胴部は大きく肥厚。	〔外器面〕極細目の格子タタキ。 凹：2×3mm　凸：縦横1mm 〔内器面〕粗い平行タタキ。
19	須恵器 (胴部)	上位　8.0 中位　8.0 下位　6.0	堅緻 白色粒 (やや多し)	灰　色	良好	――	〔外器面〕細目の格子タタキ。 凹：3×4mm　凸：縦横1.5mm 〔内器面〕円文タタキ。
20	須恵器 (胴部)	上位　6.0 中位　8.0 下位　8.0	堅緻 鉱物(大粒) (やや多し)	〔内〕灰黄色 〔外〕茶黄色	良好	――	〔外器面〕直交する平行タタキ。 凹凸：2～3mm 〔内器面〕円文タタキ。

第23表　出土遺物観察表①

No	器　種	器　厚(mm)	胎　土	色　調	焼成	形　　態	調　　整
21	須恵器 (胴部)	上位　9.0 中位　9.5 下位　13.0	堅緻 白色粒 (やや多し)	〔内〕灰色 〔外〕灰黒色	良好	――――	〔外器面〕平行タタキ後、ハケ目。 〔内器面〕円文タタキ。
22	須恵器 (胴部)	上位　10.0 中位　10.0 下位　10.0	堅緻 混入物 (極少量)	〔内〕灰色 〔外〕黒灰色	良好	――――	〔外器面〕細目の格子タタキ。 凹：4×3mm 凸：縦1mm・横2mm 〔内器面〕平行タタキの後、指押え。
23	須恵器 (胴部)	上位　6.0 中位　6.0 下位　7.0	堅緻 混入物 (極少量)	灰　色	良好	――――	〔外器面〕平行タタキの後、直行する細かいハケ目。 〔内器面〕円文タタキ。 下位：ナデ消しが加わる。
24	須恵器 (胴部)	上位　9.0 中位　10.0 下位　9.0	堅緻 (極少量)	〔内〕黒小豆色 〔外〕灰小豆色	良好	――――	〔外器面〕細目の平行タタキ。 凹：2mm　凸：1.5mm 〔内器面〕太目の粗い平行タタキ。
25	須恵器 (胴部)	上位　6.0 中位　6.5 下位　5.0	堅緻 砂粒 (やや多し)	灰　色	良好	――――	〔外器面〕細目の平行タタキ。 凹凸：2mm 〔内器面〕円文タタキ。
26	須恵器 (胴部)	上位　9.0 中位　11.0 下位　15.0	密 白色粒 (やや多い)	〔内〕灰褐色 〔外〕褐灰色	やや甘い	――――	〔外器面〕細目の平行タタキ。 凹：1mm　凸：1.5mm 〔内器面〕円文タタキ。
27	土師器 (底部)	底部　5～7 高台　5～6 体部　5.5	灰褐色斑点 (全面)	鈍い橙色 (赤彩剥落)	良好	復元底径　8.4cm 高台高　8.0～9.5mm	〔内外器面〕ローリングを受けている。
28	土師器 高台付き椀 (底部)	底部　4.0 高台 4.5～6 体部　5.0	精良 砂粒 (やや多し)	鈍い橙色 (赤彩剥落)	良好	復元底径　7.9cm 高台高　9.0mm 畳付きは扁平。	〔内底面〕ナデ。 他はローリングを受けている。
29	土師器 杯 (底部)	底部　11.0 体部　5.0	小石 白色粒 (やや多し)	薄チョコレート色	良好	底径　6.6cm 底部は体部に比べ、大きく肥厚。	〔内底面〕回転ナデ。 〔外底面〕ヘラ切り後、ナデ。 板目圧痕。
30	土師器 皿 (底部)	底部　3.0 外底端　6.0 体部　4.5	精良 混入物 (極少量)	鈍い橙色 (赤彩剥落)	良好	復元底径　8.0cm 底部は中央から端部にかけて肥厚。平底。しゃげた感じ。	〔内外器面〕ローリングを受けている。 〔外底面〕ヘラ切り。 〔内底面〕指頭圧痕。
31	土師器 甑 (体部)	上位　7.0 中位　10.0 下位　4.5	堅緻 小礫 (やや多し)	赤褐色	良好	――――	〔外器面〕丁寧な横ナデ。 〔内器面〕ナデ。指押え。
32	土師器 (口縁部)	上位　6.0 中位　8.0 下位　6.0	金雲母 (やや多し)	赤褐色	良好	――――	〔内外器面〕ナデ。 ローリングを受けている。
33	土師器 皿 (体部)	上位　2.0 中位　4.0 下位　6.0	精良 混入物 (極少量)	鈍い橙色 (赤彩剥落)	良好	復元口径　13.5cm 体部から口縁部にかけ漸次薄壁となる。口縁直口。	〔内外器面〕ナデ。 ローリングを受けている。
34	弥　生 (体部)	上位　5.0 中位　7.5 下位　4.0	灰色小粒 金雲母 (やや多し)	褐白色 (内部は黒灰色)	良好	口唇部は扁平。 口縁部の上位は直行する。	〔内外器面〕ナデ。 ローリングを受けている。
35	弥　生 (底部)	底部　11.0 外底端　18.0 体部　8.0	白色粒 金雲母 (多量)	〔内〕 鈍い橙色 〔外〕灰褐色	良好	復元底径　8.4cm 外底端は角張る。	〔外器面〕ハケ目。 〔外底面〕ナデ。
36	弥　生 椀 (体～口縁)	上位　6.0 中位　6.0 下位　5.0	砂粒 金雲母 (やや多し)	鈍い橙色 (内部は黒灰色)	良好	復元口径　14.5cm 体部は大きく内弯。 口唇部は扁平。	〔内外器面〕横ナデ。 堅緻な焼成。
37	縄　文 (底部)	底部　1.5 外底端　30.0	白色粒 砂粒 金雲母(多し)	褐灰色 (内底面は灰黒色)	良好	底径　10.2cm 平底。	〔外器面〕ナデ。 〔内器面〕ナデ。ハケ目。 〔外底面〕ナデ。
38	縄　文 (口縁部) 晩期	上位　16.0 中位　9.5 下位　8.0	白色粒 (多量に混じる)	チョコレート色 褐灰色 (内部は黒灰色)	普通	口唇部は幅広(1.4～1.6cm)で、扁平。	〔外器面〕ナデ。 下位：ハケ目が加わる。 〔内器面〕ナデ。 〔口唇部〕貝殻条痕。
39	青　磁 (口縁部) 12C	上位　3.0 中位　5.0 下位　5.5	精良	〔胎〕灰白色 〔釉〕黄灰色	普通	口縁部の上位で僅かに外弯。	〔外器面〕大型の蓮弁文様。櫛目描き。 〔内器面〕横位のヘラ描き沈線。
40	白磁皿 (体～口縁部) 15C末～16C	上位　3.5 中位　3.5 下位　3.5	精良	白黄色 (釉の発色不良)	普通	口縁部で外弯。	〔内外器面〕丁寧なナデ。
41	青　磁 碗 (体～口縁部) 14C末～15C	上位　4.5 中位　4.5 下位　6.5	精良	〔胎〕白色 〔釉〕灰緑色 (釉の発色は良好)	良好	体部は内弯気味に伸びて、口縁部で外弯。	無文。 〔内外器面〕丁寧なナデ。

第24表　出土遺物観察表②

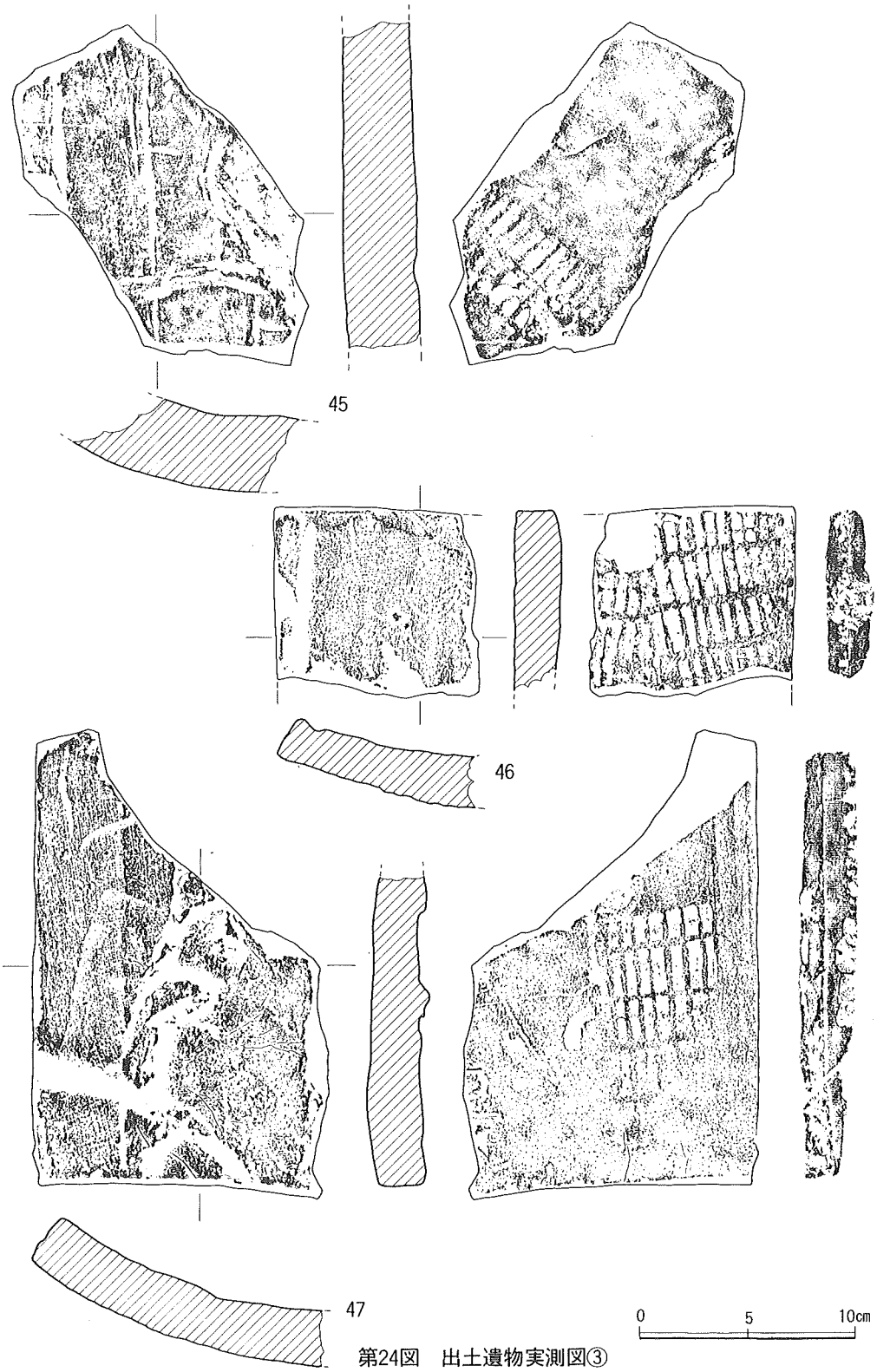


第23図　出土遺物実測図②

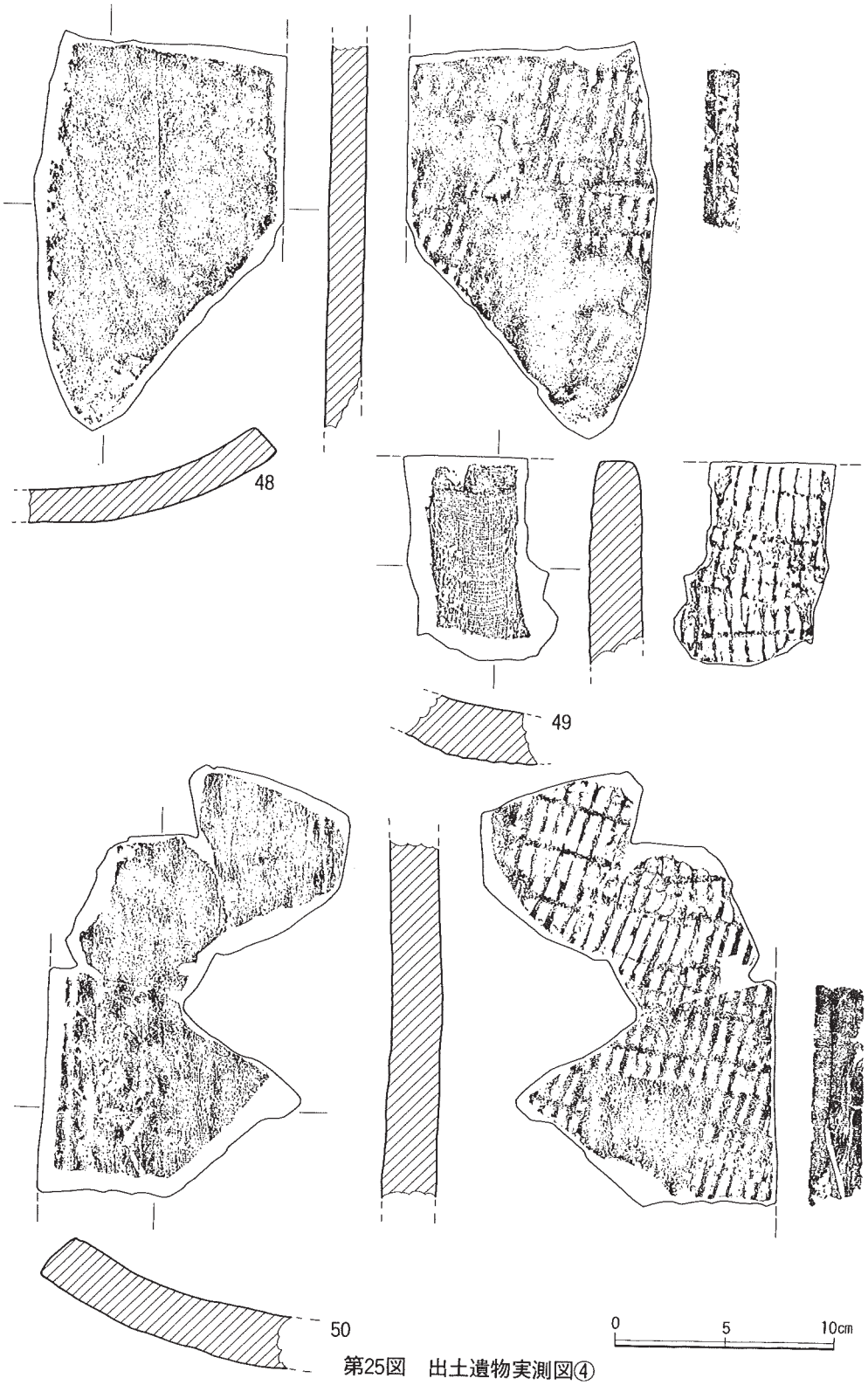
No	器　種	器 厚(mm)	胎　土	色　調	焼成	形　　態	調　　整
42	青　磁 碗 (体～口縁部) 14C末～15C	上位　5.0 中位　4.5 下位　6.0	精良 混入物 (極少量)	〔胎〕灰色 〔釉〕緑灰色	良好	復元口径　13.8cm 体部は上位で僅かに外弯。 口唇部は丸味を帯びる。	無文。 〔内外器面〕 丁寧なナデ。
43	中世土器 椀 (体～底部)	底部　7.0 外底端　9.5 体部　4.0	金雲母 白色粒 (やや多し)	〔内〕灰桃色 〔外〕桃灰色	良好	復元底径　11.8cm 外底端の調整粗し。	〔内外器面〕 ナデ。 〔外底面〕 ナデ。板目圧痕。調整粗し。
44	瓦質擂鉢？ (底部)	底部　7.0 外底端　14.0 体部　8.0	精良 混入物 (極少量)	灰白色	良好	復元底径　8.5cm 平底。外底端は角張る。	〔外器面〕 横ナデ。 〔内器面〕 横ナデ。指押え。 〔外底面〕 ナデ。 堅緻な焼成。

No	器　種	器 厚(cm)	重さ(g)	胎　土	色　調	焼成	調　　整
45	平　瓦	縦位 狭 3.1 広 3.4 横位 中 3.5 側 3.6	620.4	砂粒 黒雲母	灰褐色	やや 硬	〔凹面〕 布目。模骨痕。粘土紐痕(1cm幅)。 ローリングを受けている。 〔凸面〕 格子叩き(短冊形)。凹：6mm×2cm 凸：横不明、縦 2mm ローリングを受けている。
46	平　瓦	縦位 狭 2.0 広 2.0 横位 中 2.3 側 2.0	258.5	混入物 (極少量)	灰白色	硬	〔凹面〕 布目。分割界線(5mm幅)。 〔凸面〕 格子叩き(短冊形)。凹：4～8mm×2.1cm 凸：横 1.5×3.0mm、縦 2mm 狭端面寄りはヘラ削り。 〔側面〕 破面。

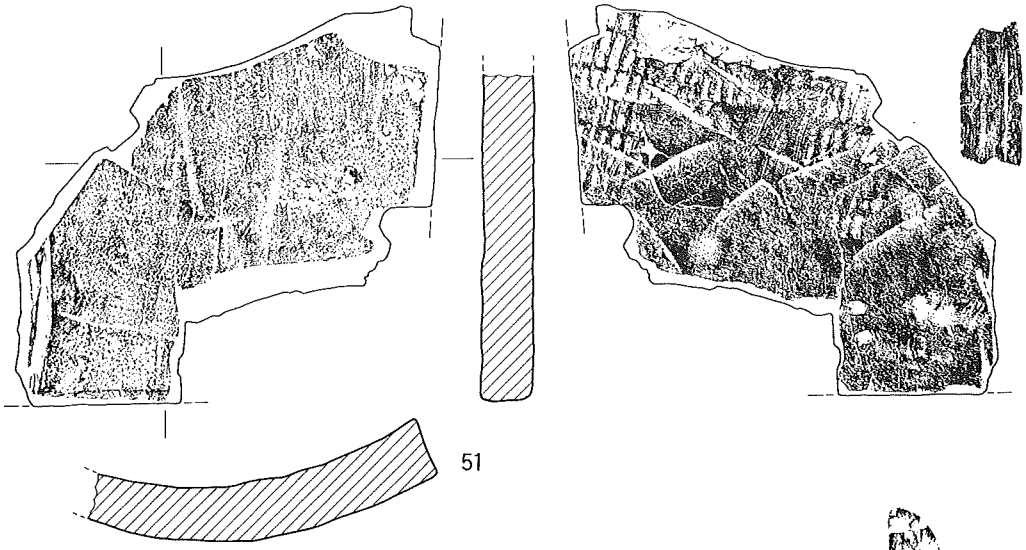
第25表　出土遺物観察表③

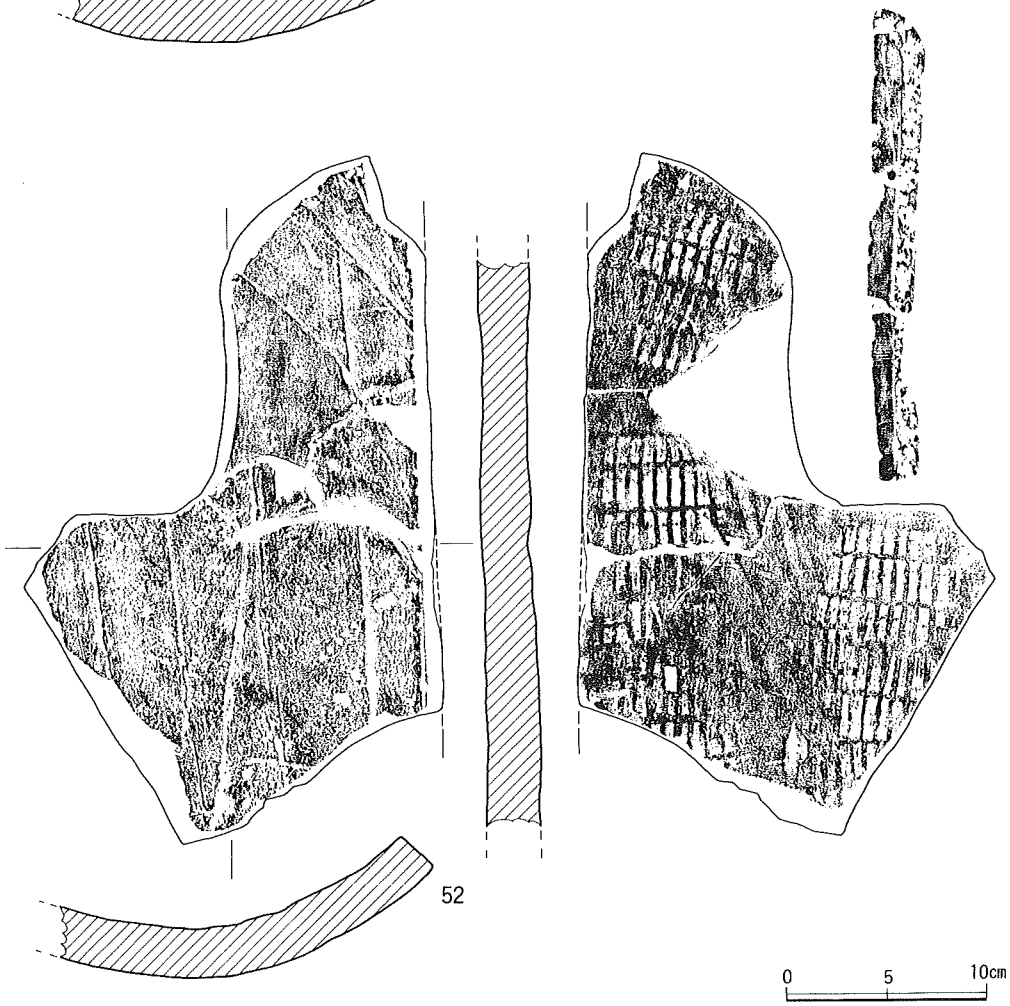


第24図　出土遺物実測図③

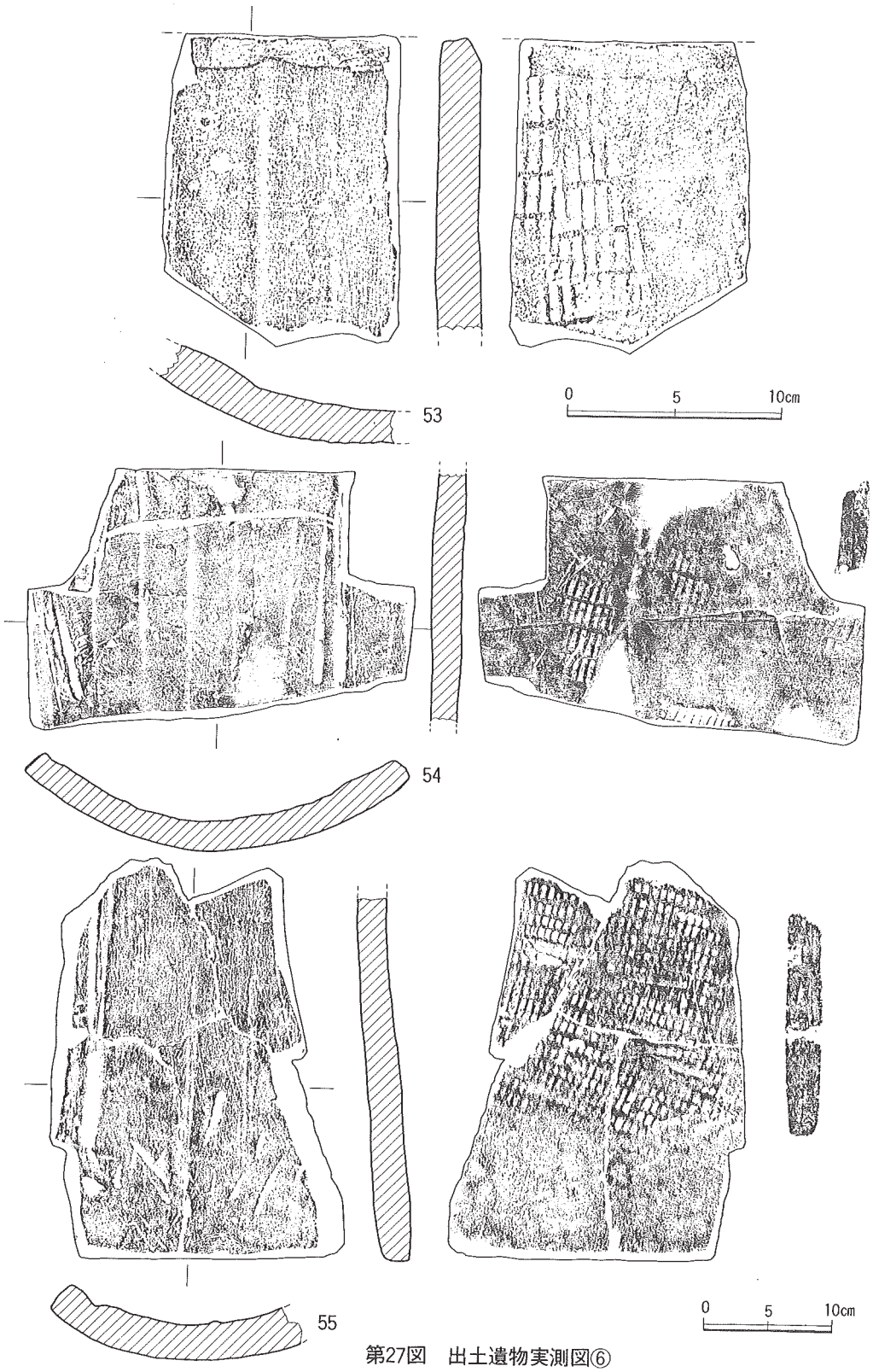


第25図　出土遺物実測図④

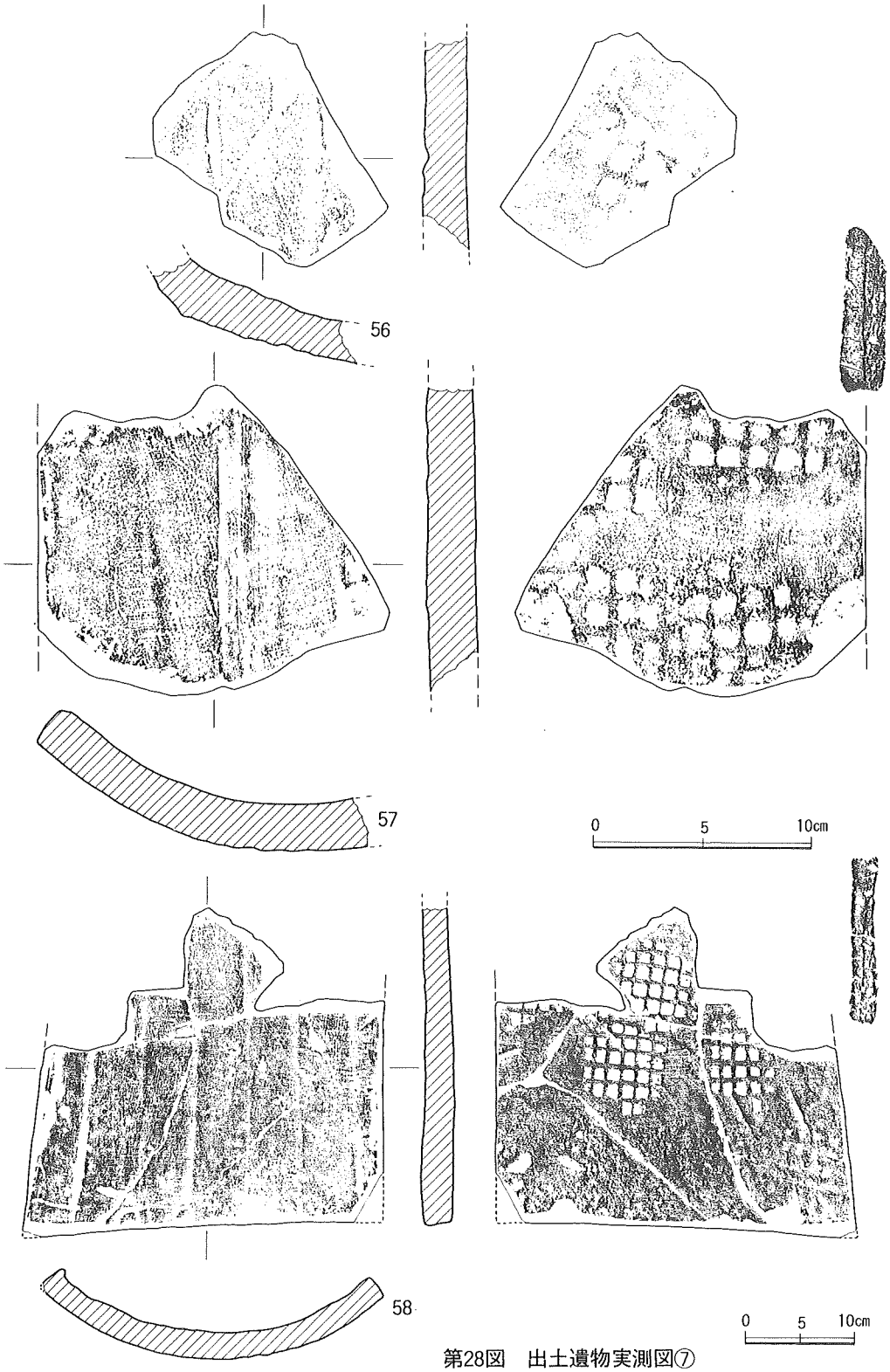




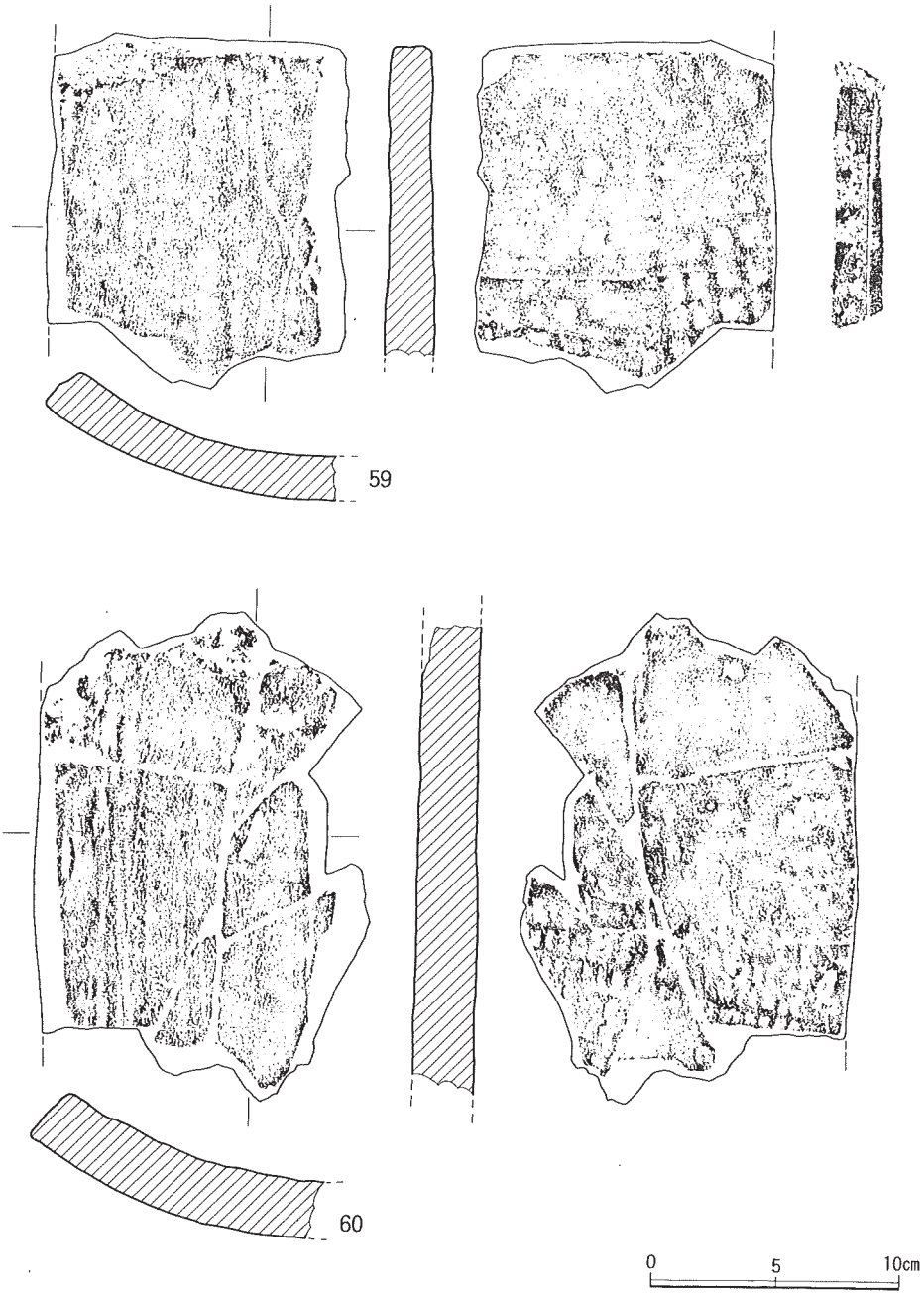
第26図　出土遺物実測図⑤



第27図　出土遺物実測図⑥



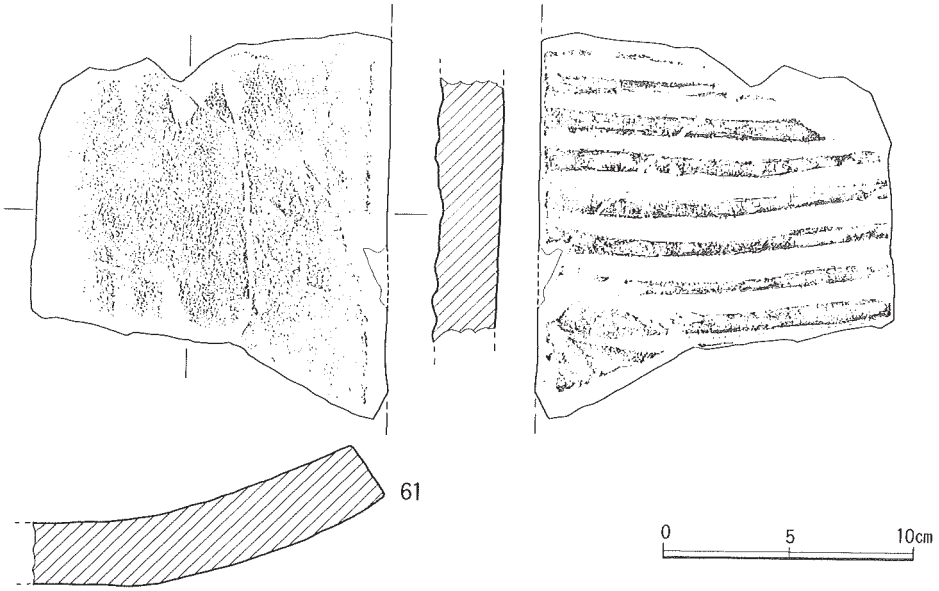
第28図　出土遺物実測図⑦

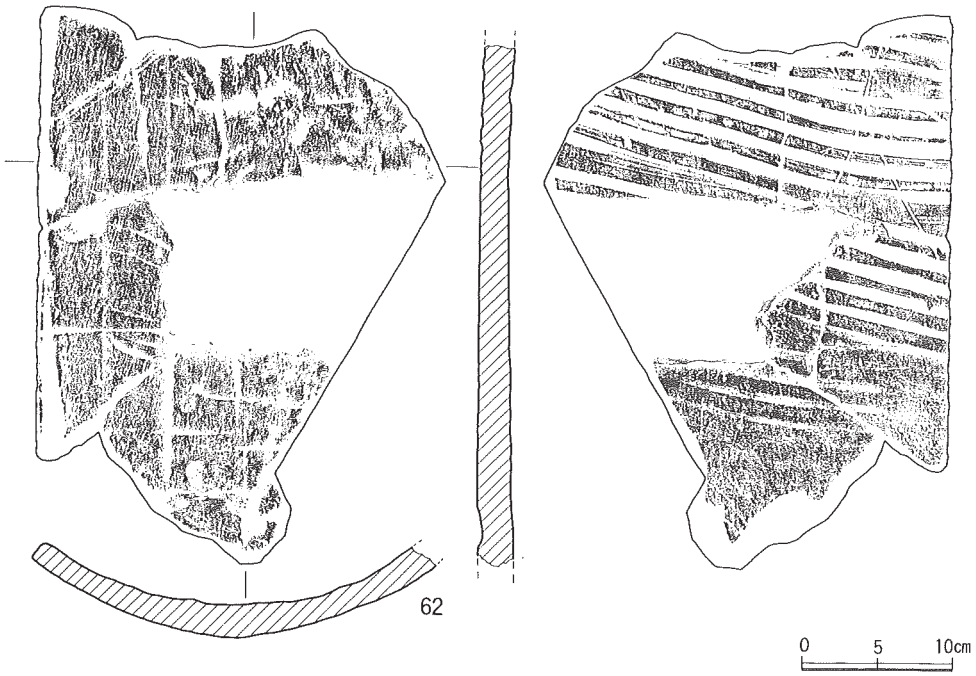


第29図　出土遺物実測図⑧

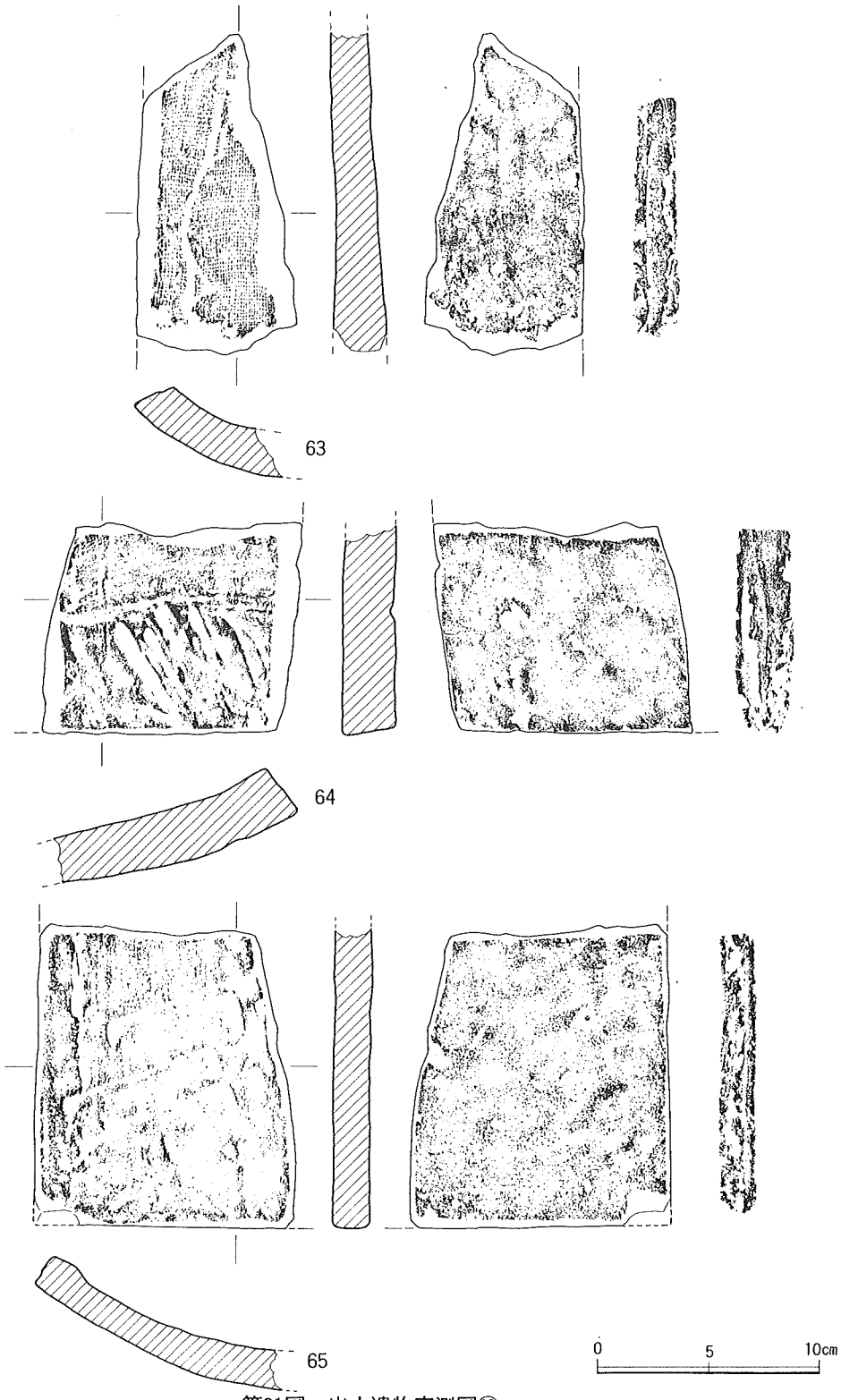
No	器　種	器 厚(cm)	重さ(g)	胎　土	色　調	焼成	調　　整
47	平　瓦	縦位 狭 2.3 広 2.3 横位 中 2.5 側 2.4	872.0	砂粒 (少量)	褐灰色	やや 硬	〔凹面〕 布目。模骨痕。粘土板合わせ目(粗い)。 〔凸面〕 格子叩き(短冊形)。凹：5mm×2cm 凸：横 2mm、縦 3mm 〔側面〕 破面。
48	平　瓦	縦位 狭 1.6 広 1.6 横位 中 1.4 側 1.6	416.9	砂粒 黒雲母 (やや多し)	灰白色	やや 軟	〔凹面〕 布目。斜めの細沈線。ナデ。 〔凸面〕 格子叩き(短冊形)。凹：3.5mm×1.6cm 凸：横 4mm、縦 4mm
49	平　瓦	縦位 狭 1.6 広 2.5 横位 中 2.3 側 2.3	171.0	砂粒 (少量)	灰　色	硬	〔凹面〕 布目。狭端面寄りはヘラ削り。 〔凸面〕 格子叩き(短冊形)。凹：6mm×1.6～1.8cm 凸：横 3mm、縦 2mm
50	平　瓦	縦位 狭 2.2 広 2.5 横位 中 2.4 側 2.4	595.7	砂粒 (やや多し)	灰　色 灰白色	硬	〔凹面〕 布目。分割界線(5mm幅)。一部に縦位のナデ。 〔凸面〕 格子叩き(短冊形)。凹：5mm×2cm 凸：横 3mm、縦 2mm
51	平　瓦	縦位 狭 2.5 広 2.6 横位 中 2.3 側 2.0	1095.3	鉱物 砂粒 (少量)	灰　色	硬	〔凹面〕 布目。布端痕。分割界線(5～6mm幅)。細い沈線。 〔凸面〕 格子叩き(短冊形)。凹：5mm×1.3cm 凸：横 1mm、縦 2～4mm 〔側面〕 削り。
52	平　瓦	縦位 狭 2.6 広 2.6 横位 中 2.4 側 2.3	1618.0	黒雲母 鉱物 (やや多し)	褐灰色 (一部灰色)	硬	〔凹面〕 布目。模骨痕。斜めのナデ。斜めの極く細い沈線。 ローリングを受けている。 〔凸面〕 格子叩き(短冊形)。凹：5mm×2cm　凸：横縦 2mm 〔側面〕 破面。
53	平　瓦	縦位 狭 1.9 広 2.0 横位 中 1.5 側 1.9	443.6	鉱物 砂粒 (極少量)	灰　色	硬	〔凹面〕 布目。模骨痕。粘土板合わせ目。 狭端面寄りはヘラナデ。 〔凸面〕 格子叩き(短冊形)。凹：4mm×1.7cm 凸：横 3mm、縦 2mm
54	平　瓦	縦位 狭 2.1 広 2.1 横位 中 1.9 側 2.1	1840.0	砂粒 (極少量)	灰白黄色	硬	〔凹面〕 布目。模骨痕(5mm幅)。粘土紐痕。 やや斜めの分割界線。 〔凸面〕 格子叩き(短冊形)。凹：4mm×1cm 凸：横 2mm、縦 3mm 〔側面〕 破面。
55	平　瓦	縦位 狭 2.3 広 2.5 横位 中 2.8 側 2.6	2470.4	黒雲母 砂粒 (やや多し)	灰黒褐色 (一部は黄 褐色)	やや 硬	〔凹面〕 布目。模骨痕。指頭痕。布端痕。分割界線。 ローリングを受けている。 〔凸面〕 格子叩き(方形)。凹：5mm×6mm 凸：横 3mm、縦 3mm 〔側面〕 削り。
56	平　瓦	縦位 狭 1.9 広 2.0 横位 中 1.8 側 1.9	174.7	砂粒 (少量)	褐　色	やや 硬	〔凹面〕 布目。模骨痕。ローリングを受けている。 〔凸面〕 格子叩き(方形)。凹：1.4cm×7～9mm 凸：横 3～5mm、縦 3～6mm
57	平　瓦	縦位 狭 2.1 広 2.2 横位 中 2.2 側 2.1	531.6	砂粒 (少量)	褐　色	硬	〔凹面〕 布目。模骨痕。ローリングを受けている。 〔凸面〕 格子叩き(方形)。凹：1cm×1.1cm 凸：横 7mm、縦 6mm 〔側面〕 削り。
58	平　瓦	縦位 狭 2.3 広 2.8 横位 中 2.5 側 2.8	2832.7	黒雲母 (やや多し)	灰白褐色	やや 甘い	〔凹面〕 布目。模骨痕。分割界線。 ローリングを受けている。 〔凸面〕 格子叩き(方形)。凹：1.1cm×1cm 凸：横 5mm、縦 4mm 〔側面〕 削り。
59	平　瓦	縦位 狭 1.6 広 2.0 横位 中 1.8 側 2.0	443.5	砂粒 黒雲母 (極少量)	灰　色	硬	〔凹面〕 布目。細い粘土紐痕。ローリングを受けている。 〔凸面〕 格子叩き(方形、やや不鮮明)。凹：9mm×1.5cm 凸：横3mm、縦4mm 〔側面〕 破面。
60	平　瓦	縦位 狭 1.6 広 2.0 横位 中 1.8 側 2.0	723.1	砂粒 黒雲母 (少量)	灰白褐色	やや 硬	〔凹面〕 布目。細い沈線。ローリングを受けている。 〔凸面〕 格子叩き(方形)。凹：4mm×5mm 凸：横 3mm、縦 3mm 〔側面〕 削り。
61	平　瓦	縦位 狭 2.5 広 2.5 横位 中 2.4 側 2.5	648.1	混入物 (極少量)	灰褐色	やや 軟	〔凹面〕 布目。細い沈線。ローリングを受けている。 〔凸面〕 条痕(太目)。凸：4～6mm　凹：1cm　深さ1mm 〔側面〕 削り。

第26表　出土遺物観察表④

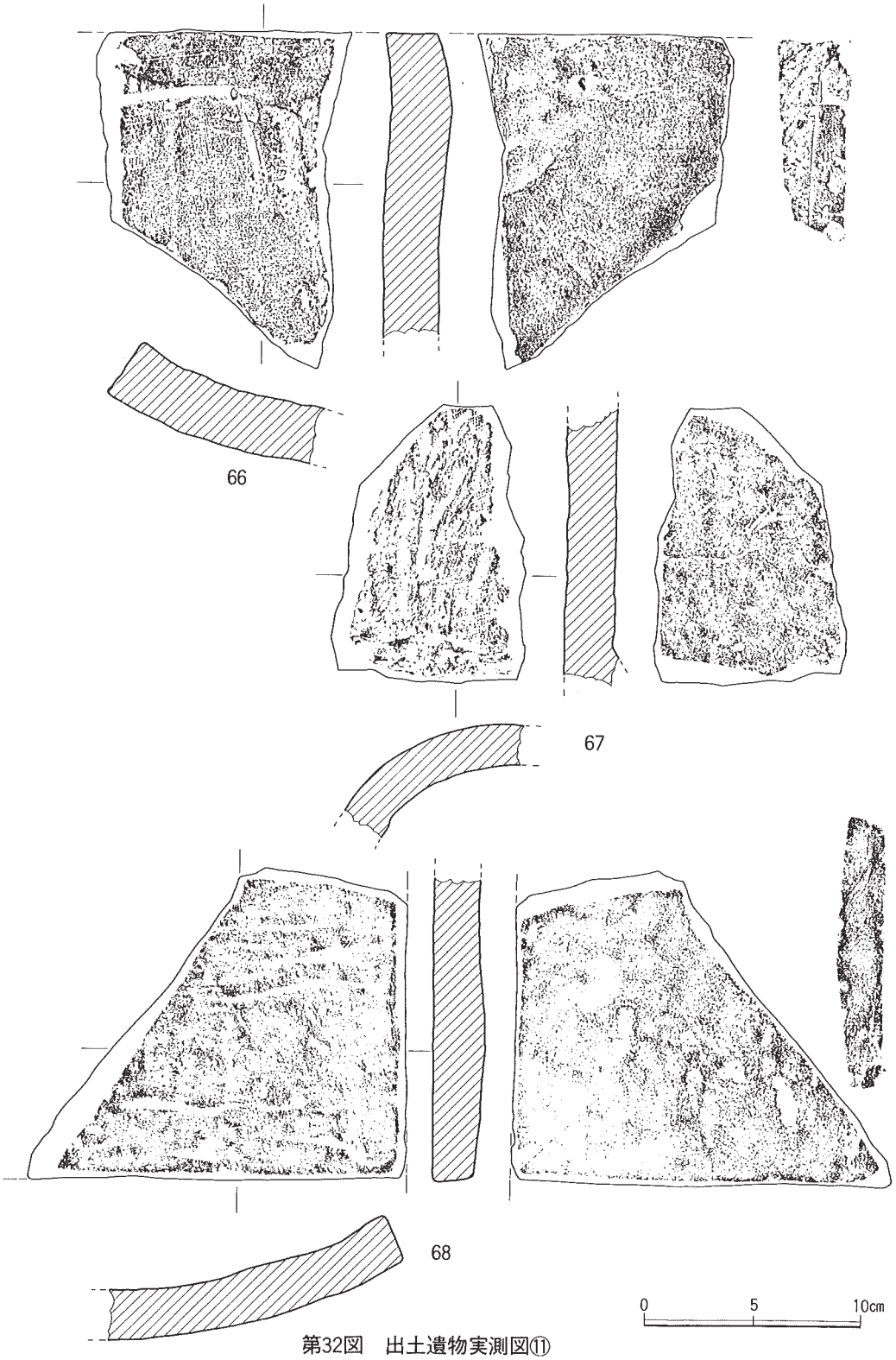




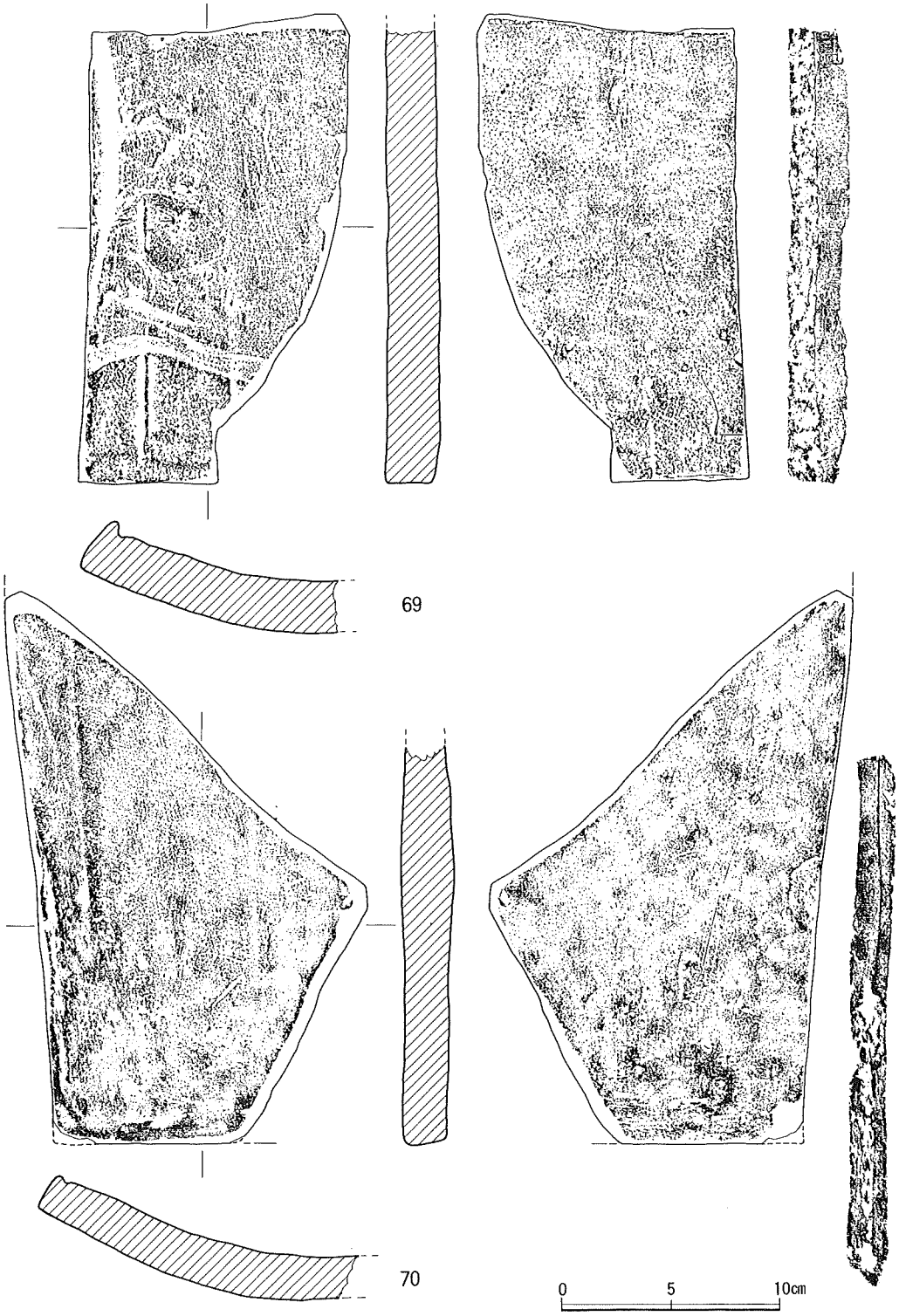
第30図　出土遺物実測図⑨



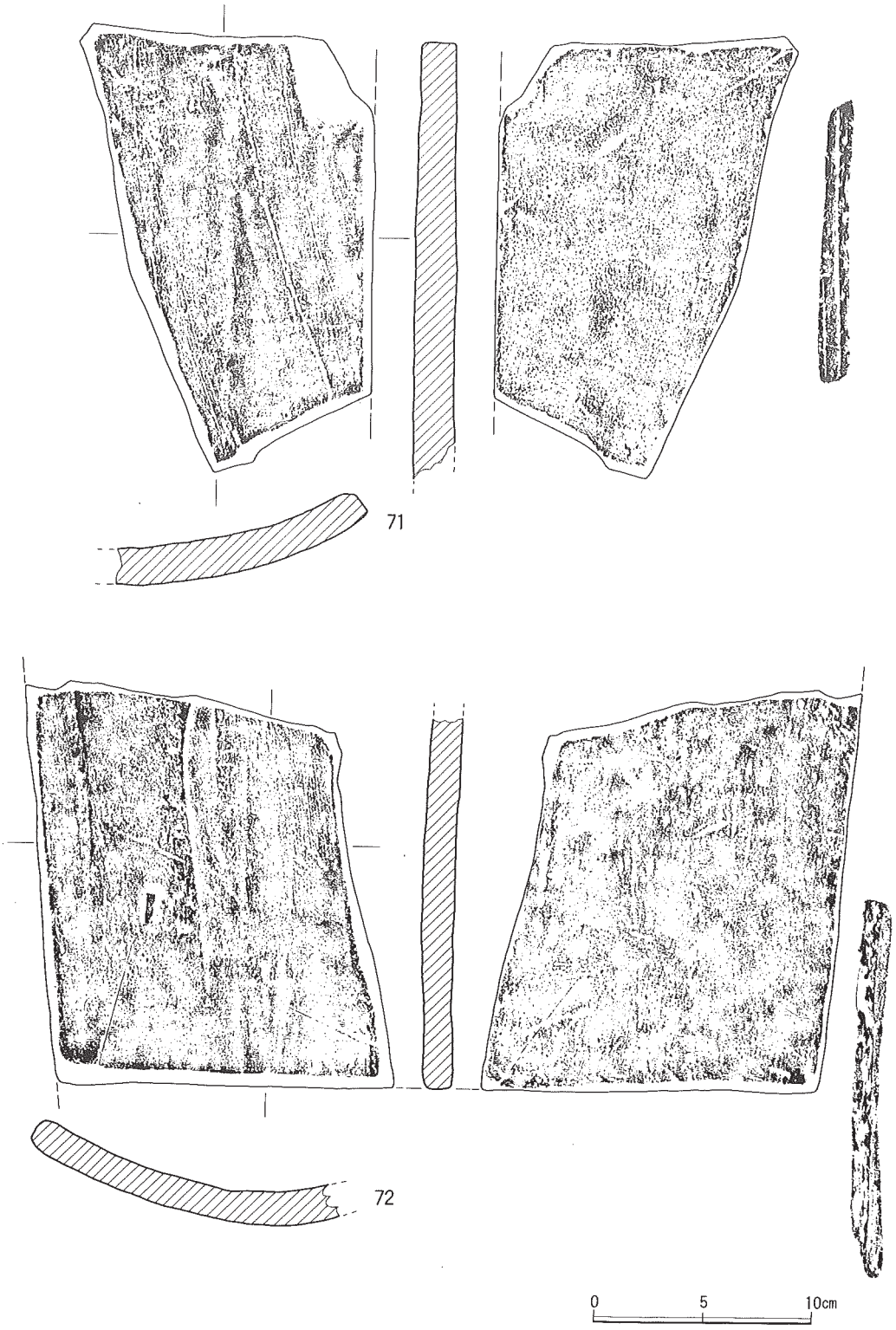
第31図　出土遺物実測図⑩



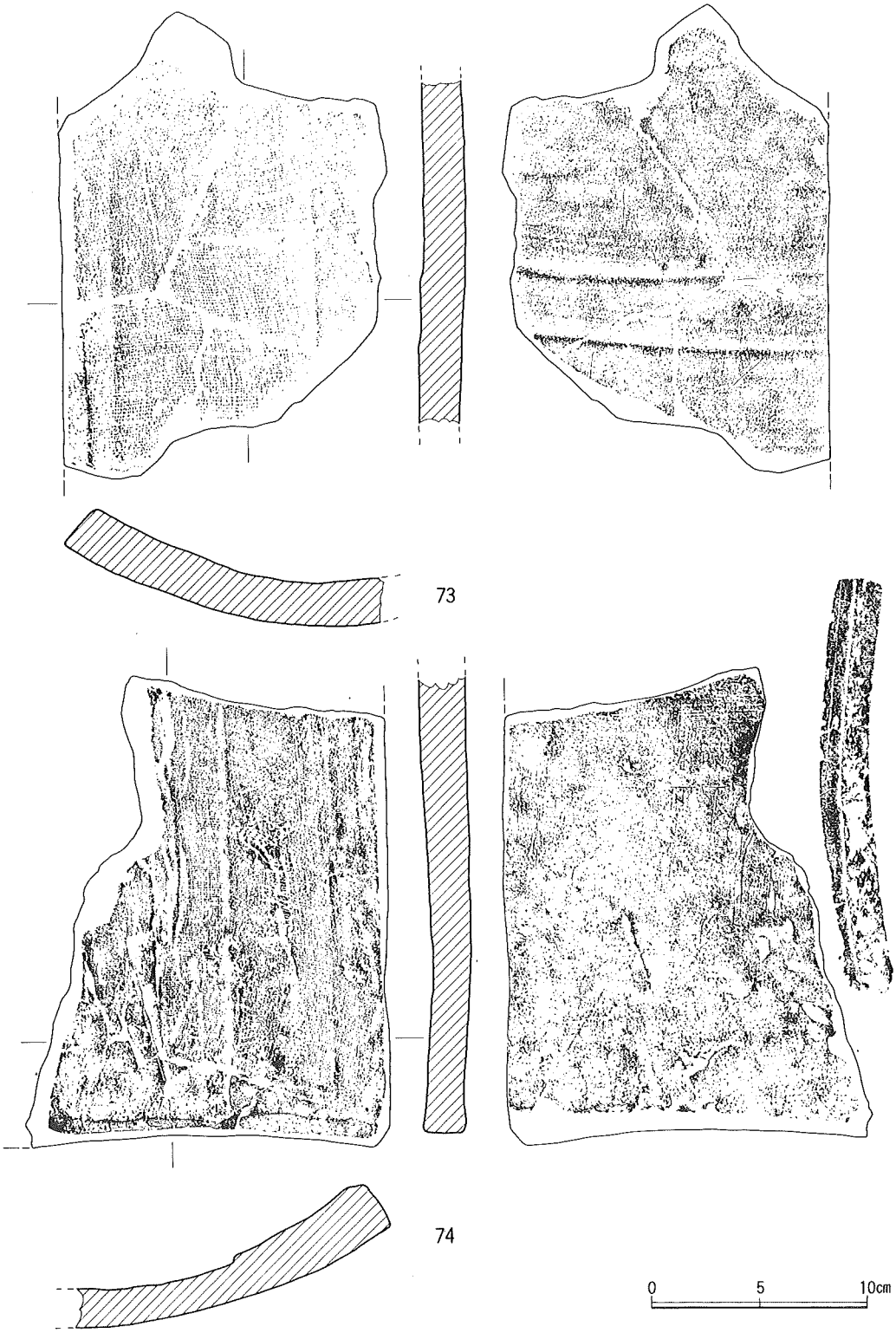
第32図　出土遺物実測図⑪



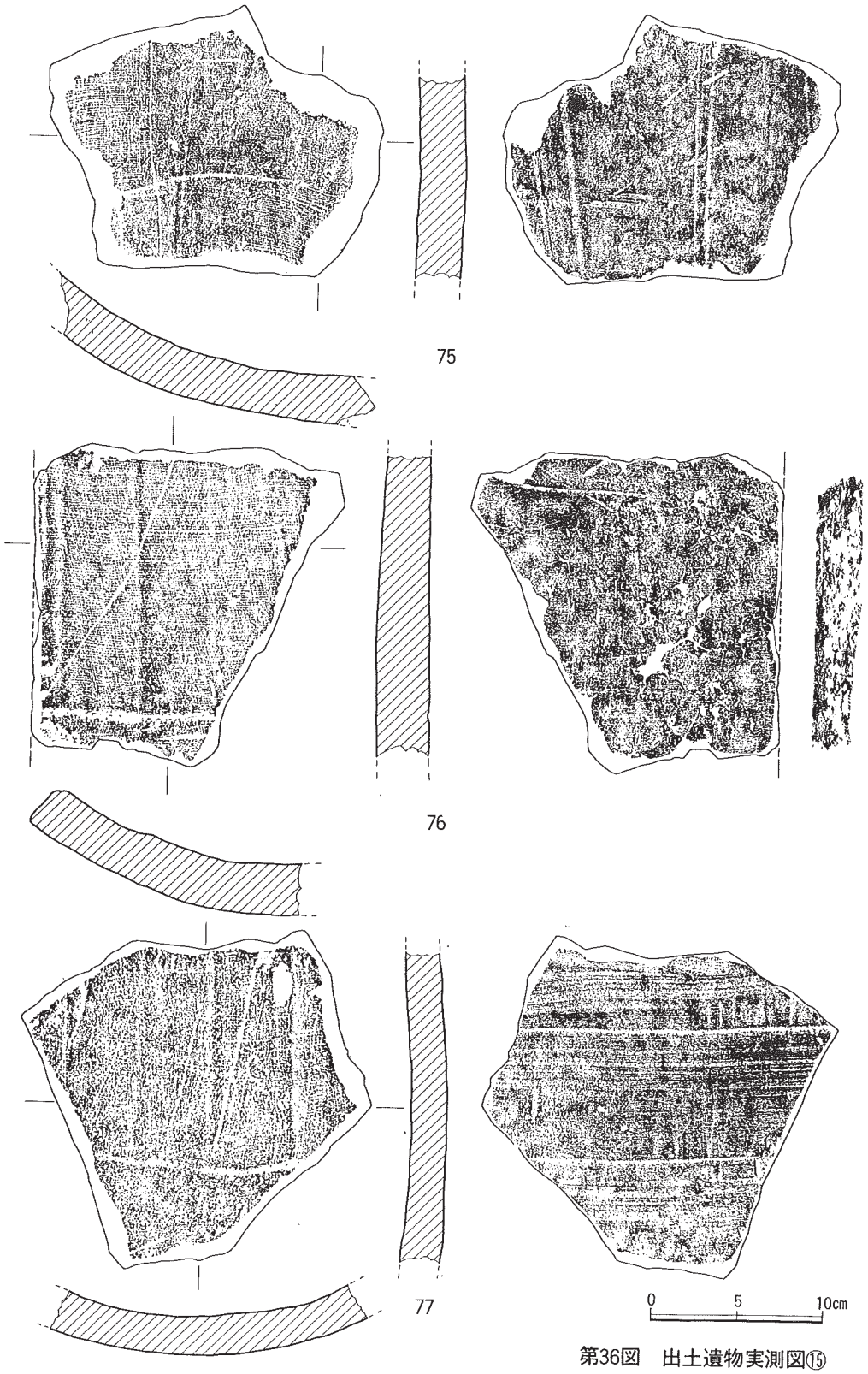
第33図　出土遺物実測図⑫



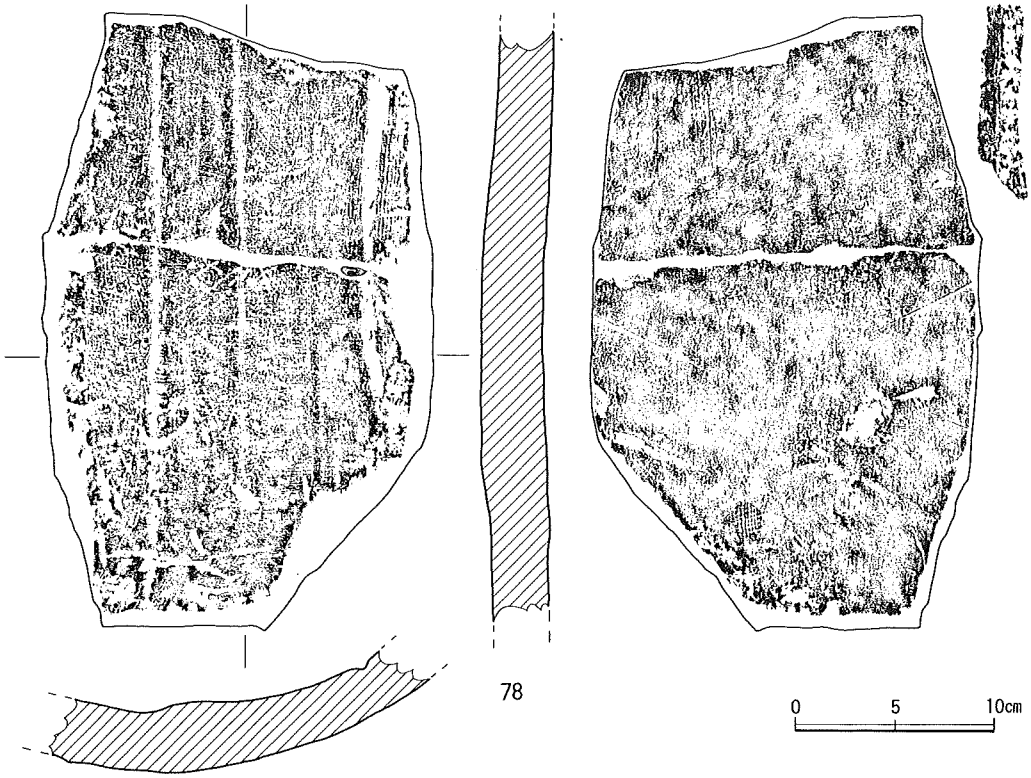
第34図　出土遺物実測図⑬

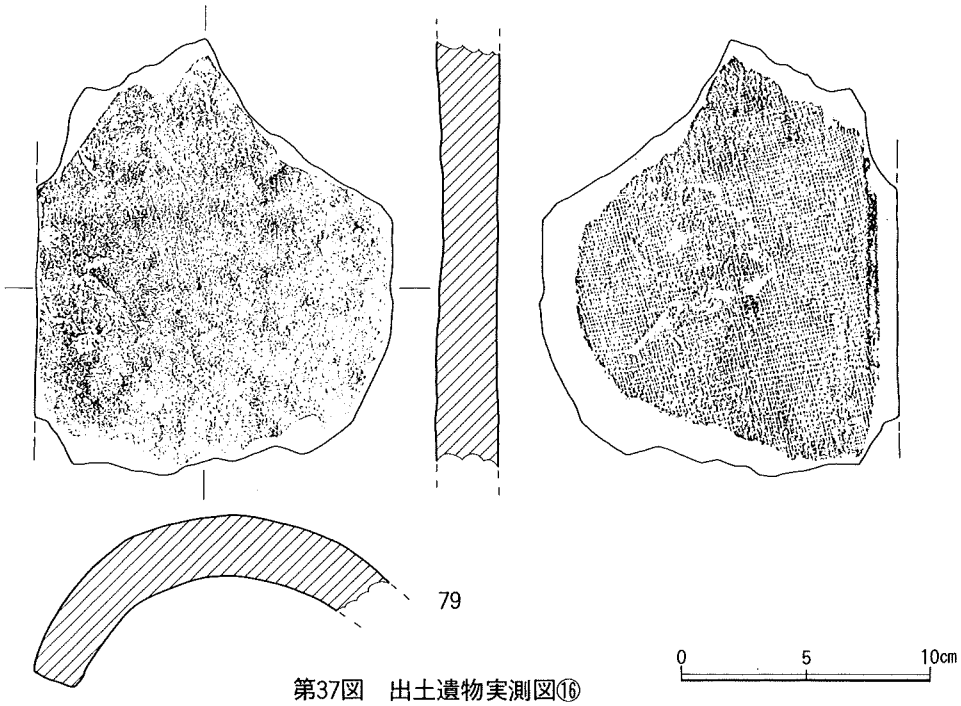


第35図　出土遺物実測図⑭



第36図　出土遺物実測図⑮





第37図　出土遺物実測図⑯

No	器　種	器 厚(cm)	重さ(g)	胎　土	色　調	焼成	調　　整
62	平　瓦	縦位 狭 2.0 広 2.4 横位 中 1.8 側 1.4	1992.9	鉱物 (極少量)	灰褐色	やや 軟	〔凹面〕 布目。模骨痕。粘土紐痕が目立つ。 ローリングを受けている。 〔凸面〕 条痕(太目)。凸：4mm～1mm　凹：9mm～1cm 下位はローリングを受けている。 〔側面〕 削り。
63	平　瓦	縦位 狭 1.7 広 2.4 横位 中 1.9 側 1.8	209.4	砂粒 (少量)	灰　色	硬	〔凹面〕 布目。粘土板合わせ目。 〔凸面〕 強いナデ(ヘラ状のものを使用)。1.2～1.4cm幅 〔側面〕 削り。
64	平　瓦	縦位 狭 2.3 広 2.4 横位 中 2.0 側 2.5	370.7	鉱物 (やや多し)	灰白褐色	やや 硬	〔凹面〕 布目。細長板による圧痕。粘土紐痕。 〔凸面〕 布端痕。
65	平　瓦	縦位 狭 1.6 広 1.7 横位 中 1.7 側 1.5	342.4	鉱物 (やや多し)	灰白褐色	やや 硬	〔凹面〕 布目。細長板による圧痕。 ローリングを受けている。 〔凸面〕 ナデ。ローリングを受けている。 〔側面〕 ローリングを受けている。
66	平　瓦	縦位 狭 2.5 広 2.6 横位 中 2.6 側 2.9	578.1	砂粒 (少量)	灰　色	硬	〔凹面〕 布目。模骨痕。狭端面寄りはヘラ削り。 〔凸面〕 ナデ。 〔側面〕 破面。
67	丸　瓦	縦位 狭 2.3 広 2.5 横位 中 1.9 側 2.1	294.8	白色粒 (多量)	茶　色	硬	〔凹面〕 布目。ナデ。 〔凸面〕 ナデ。器面に亀裂。
68	平　瓦	縦位 狭 2.1 広 1.9 横位 中 2.3 側 2.3	546.1	鉱物 (やや多し)	白褐色 白　色	軟	〔凹面〕 布目。粘土紐痕。ローリングを受けている。 〔凸面〕 ナデ。ローリングを受けている。 〔側面〕 ローリングを受けている。
69	平　瓦	縦位 狭 2.2 広 2.4 横位 中 2.4 側 2.6	905.2	混入物 (極少量)	灰　色	硬	〔凹面〕 布目。粘土紐痕。分割界線。布端痕。 広端面寄りはヘラ削り。 〔凸面〕 ナデ。 〔側面〕 破面。
70	平　瓦	縦位 狭 1.9 広 2.0 横位 中 1.9 側 1.8	782.0	鉱物 (やや多し)	白　色	軟	〔凹面〕 布目。模骨痕。分割界線。布端痕。 ローリングを受けている。 〔凸面〕 ナデ。 〔側面〕 破面。ローリングを受けている。
71	平　瓦	縦位 狭 1.6 広 1.9 横位 中 1.6 側 1.5	487.3	砂粒 (やや多し)	灰黒色	軟	〔凹面〕 布目。細い沈線。ローリングを受けている。 〔凸面〕 ナデ。 〔側面〕 破面。ローリングを受けている。
72	平　瓦	縦位 狭 1.4 広 1.4 横位 中 1.6 側 1.2	597.5	鉱物 (やや多し)	白　色	甘い	〔凹面〕 布目。模骨痕。布端痕。粘土紐痕。 ローリングを受けている。 〔凸面〕 ナデ。ローリングを受けている。 〔側面〕 破面。ローリングを受けている。
73	平　瓦	縦位 狭 1.8 広 1.9 横位 中 2.1 側 2.2	816.3	小礫 砂粒 (やや多し)	褐灰色	やや 硬	〔凹面〕 布目。模骨痕。粘土紐痕。 ローリングを受けている。 〔凸面〕 ナデ。桶造り(3cm幅で帯状の圧痕あり)。 〔側面〕 削り。
74	平　瓦	縦位 狭 2.1 広 1.8 横位 中 1.7 側 2.5	942.2	混入物 (極少量)	灰　色	硬	〔凹面〕 布目。模骨痕。布端痕。広端面寄りはヘラ削り。 〔凸面〕 ナデ。指頭痕。 〔側面〕 破面。
75	平　瓦	縦位 狭 2.7 広 2.7 横位 中 2.8 側 2.6	872.2	砂粒 (やや多し) 小石粒 (太め)	橙　色	硬	〔凹面〕 布目。縦横に細目の沈線。 〔凸面〕 ナデ(粘土紐状の沈線がナデ消されている)。
76	平　瓦	縦位 狭 2.5 広 3.0 横位 中 3.0 側 2.7	1157.4	混入物 (極少量)	灰　色	硬	〔凹面〕 布目。模骨痕。粘土紐痕。鮮明な斜めの沈線。 〔凸面〕 ナデ。 〔側面〕 割ったままの状態。
77	平　瓦	縦位 狭 1.9 広 2.3 横位 中 2.1 側 2.4	969.0	砂粒 (少量)	鈍い橙色	硬	〔凹面〕 布目。模骨痕。粘土紐痕。細目の沈線。 ローリングを受けている。 〔凸面〕 ナデ。横位の細目の沈線がナデ消されている。

第27表　出土遺物観察表⑤

No	器　種	器 厚(cm)	重さ(g)	胎　土	色　調	焼成	調　　整
78	平　瓦	縦位 狭 2.7 広 2.8 横位 中 2.5 側 3.0	2057.2	砂粒 (少量)	灰白褐色	やや 軟	〔凹面〕布目。模骨痕。分割界線。 ローリングを受けている。 〔凸面〕 ナデ。指頭痕。ローリングを受けている。 〔側面〕 破面。
79	丸　瓦	縦位 狭 2.5 広 2.5 横位 中 2.2 側 1.8	705.9	混入物 (極少量)	褐　色	硬	〔凹面〕 布目。 〔凸面〕 ナデ。 〔側面〕 削り。

第28表　出土遺物観察表⑥

2.13調査区

須恵器〔80～88〕　身(80・81)、甕の頸部(82・83)、高台付き(84・85)、甕の胴部(86～88)がある。80は8世紀、81は6世紀後半、83は8～9世紀、84は7世紀後半のものである。復元口径は80が12.6cm、81が14.0cm、82が11.0cm、83が9.5cmを測る。83は口唇部が扁平で、85は付け高台である。87は器厚が1.6～1.7cmで大きく肥厚する。胴部(86～88)の調整は次の通りである。

〔外器面〕　平行タタキ後ハケ目(86・87)　格子タタキ(88)

〔内器面〕　円文タタキ(86～88)

土師器〔89～96〕　杯(89・90)、高台付き椀(91～94)、甕(95)、甑の取っ手(96)がある。93は完形品の赤彩土器である。96の先端は直立気味となる。法量については下記の通りである。89(復元底径 7.4cm)、90(復元口径 10.0cm)、91(復元底径 6.8cm)、92(復元底径 8.7cm、高台高 3.0～5.0mm)、93(口径 14.0cm、器高 6.0cm、底径 7.6cm、高台高 4.0mm)、94(口径11.9cm、器高 4.6cm、復元底径 6.9cm、高台高 5.0mm)。

弥生土器〔97～100〕　97は小形椀で体部は内弯する。口唇部は扁平である。98は小形丸底壷の胴部である。99は甕の胴部で外器面に貼り付けの突帯が付く。100は甕の頸部で、復元口径 20.5cmを測る。

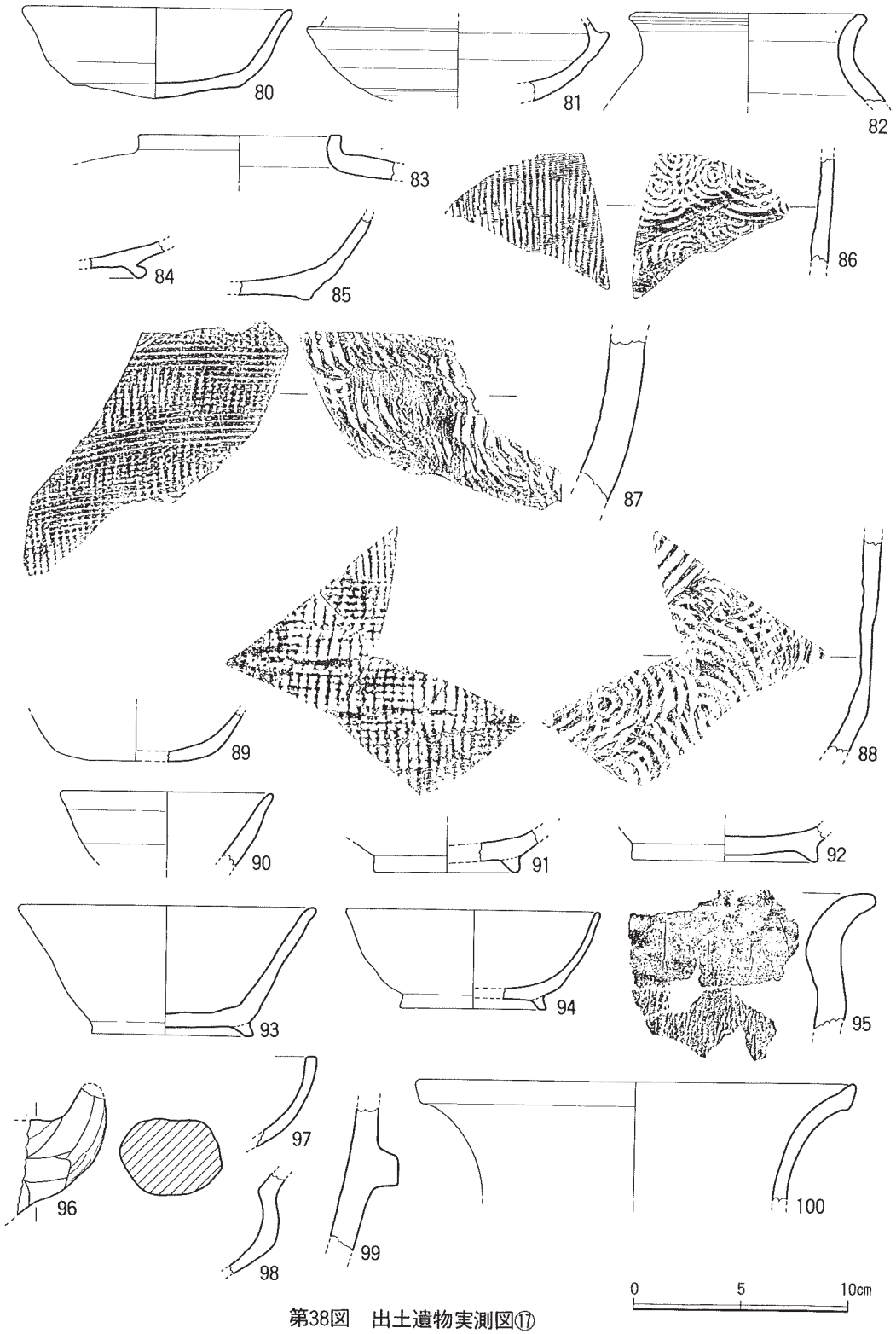
縄文土器〔101・102〕　いずれも晩期の土器である。101は外器面に貼り付けの突帯が付く。突帯には斜めの刻み目がある。102は復元口径16.2cmをを測る。

中世遺物〔103～111〕　青磁碗(103～105)、白磁(106～108)、瓦質擂鉢(109)、須恵系土器(110)、雑器(111)がある。103は14世紀末～15世紀、104～106は13～14世紀、107は12世紀のものである。青磁の外器面の文様は雷文帯(103)と蓮弁文(104・105)がある。106は口禿げ白磁である。

布目瓦〔112・113〕　別途記載。

No	器　種	器 厚 (mm)	胎　土	色　調	焼成	形　　態	調　　整
80	須恵器 身 (完形) 8C	底部　7.0 外底端　7.0 体部上　6.0 下　4.0	精良 白色粒 (少量)	灰(黄)色	普通	復元口径　12.6cm 器高　4.2cm 底部の中央は、やや凸の形状となる。	〔内外器面〕 丁寧な回転ナデ。 〔外底面〕 粗いナデ。 〔内底面〕 渦巻痕。回転ナデ。
81	須恵器 身 (体部) 6C後	先端部　2.5 上位　9.5 中位　6.0 下位　9.0	堅緻 砂粒 (少量)	灰　色	良好	復元口径　14.0cm	〔外器面〕上位：回転ナデ。 下位：回転ヘラ削り。 〔内器面〕 回転ナデ。 堅緻な焼成。

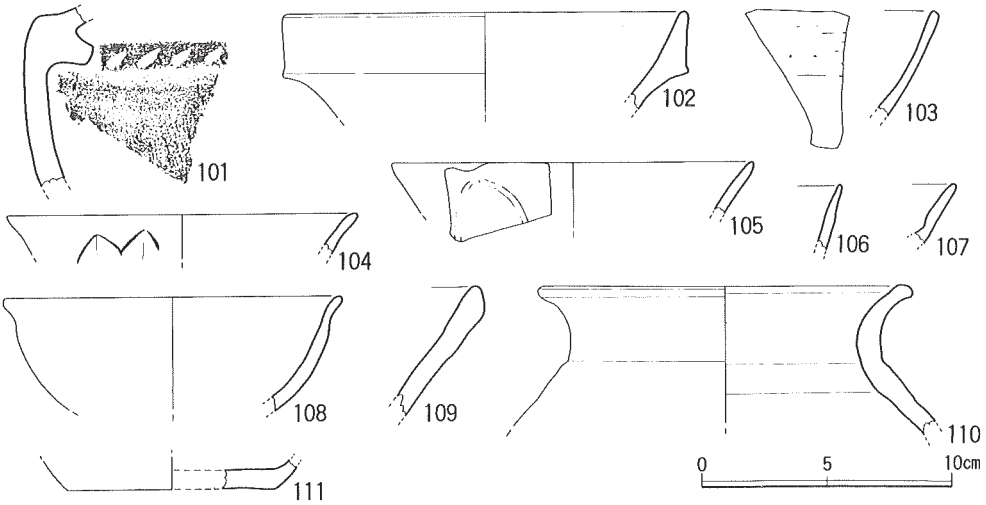
第29表　出土遺物観察表⑦



第38図　出土遺物実測図⑰

No	器　種	器厚(mm)	胎　土	色　調	焼成	形　　態	調　　整
82	須恵器	上位　6.0 中位　7.0 下位　7.0	砂粒 (少量)	黄灰色	普通	復元口径　11.0cm	〔内外器面〕 回転横ナデ。
83	須恵器 甕 (頚部) 8C～9C	上位　6.0 中位　9.0 下位　8.5	堅緻 砂粒 鉱物 (極少量)	灰　色	良好	復元口径　9.5cm 口唇部は扁平(6mm幅)。	〔内外器面〕 回転横ナデ。 〔内器面〕 上位：下方はヘラ削り後、回転ナデ。
84	須恵器 高台付き ７Ｃ後	底部　4.5 外底端　9.0 高台　5.0 体部　5.0	緻密 砂粒 (極少量)	灰(黄)色	良好	高台部は削り出しによる。 高台端は尻上がりとなる。	〔内外器面〕 回転ナデ。 〔内底面〕 ナデ。 〔高台端〕 ヘラナデ。
85	須恵器 高台付き椀 (底部)	底部6.0～9.0 体部上　5.0	砂粒 (極少量)	灰白色	やや 甘い	付け高台。	〔内外器面〕 回転ナデ。 ローリングを受けている。
86	須恵器 (胴部)	上位　6.0 中位　7.0 下位　8.0	緻密 混入物 (極少量)	灰　色	普通	――――	〔外器面〕平行タタキ後、細かいハケ目。 凸：1mm　凹：1～2mm 〔内器面〕円文タタキ。一部横ナデ。
87	須恵器 (胴部)	上位　17.0 中位　16.0 下位　17.0	緻密 砂粒 鉱物 (少量)	〔内〕灰色 〔外〕 灰白黒色	良好	胴部は大きく肥厚。	〔外器面〕細目の平行タタキ後、ハケ目。 〔内器面〕円文タタキ。
88	須恵器 (胴部)	上位　8.5 中位　5.0 下位　9.0	砂粒 (やや多し)	〔内〕灰色 〔外〕黒灰色	良好	(器形は歪)	〔外器面〕 格子タタキ。 凹：2.5×3.5mm 凸：横1.5mm 縦2mm 〔内器面〕 円文タタキ。
89	土師器 杯 (底～体部)	底部　5.0 外底端　7.0 体部　3.5	鉱物 (やや多し)	灰白褐色	不良	復元底径　7.4cm 外底端は丸味を帯びる。	ローリングを受けている。
90	土師器 杯 (体部)	上位　7.5 中位　7.0 下位　3.0	砂粒 鉱物 (少量)	鈍い橙色	良好	復元口径　10.0cm 体部は上位で外側がやや外弯する。	〔内外器面〕 丁寧なナデ。
91	土師器 高台付き椀 (底部)	底部　9.0 高台5.0～9.0 体部　7.0	黒雲母 (少量)	灰褐色	普通	復元底径　6.8cm 高台高　5.0～6.0mm 付け高台。	〔外器面〕 横ナデ。 〔内器面〕 ナデ。 〔外底面〕 ナデ。
92	土師器 高台付き椀 (底部)	底部9.0～8.0 高台　5.0 体部　7.0	金雲母 鉱物 (やや多し)	〔内〕 灰白黒色 〔外〕灰褐色	普通	復元底径　8.7cm 高台高　3.0～5.0mm	ローリングを受けている。
93	土師器 高台付き椀	底部6.5～7.0 外底端　9.0 高台4.0～8.0 体部上　9.0 下　5.0	黒雲母 鉱物 (やや多し)	褐灰色 (赤彩剥離)	普通	口径　14.0cm 器高　6.0cm 底径　7.6cm 高台高 4.0mm 付け高台。	ローリングを受けている。 〔内外器面〕 横ナデ。 〔内底面〕 渦巻痕。 軽量土器。
94	土師器 高台付き椀	底部　5.0 外底端　7.0 高台4.0～5.0 体部上　6.0 下　3.0	黒雲母 鉱物 (多量)	灰桃色 〔高台〕 赤褐色	普通	口径　11.9cm 器高　4.6cm 復元底径　6.9cm 高台高 5.0mm 付け高台。	ローリングを受けている。 〔内外器面〕 ナデ。 〔外器面〕 上位は横ナデ。
95	土師器 甕 (胴～頚部)	上位　6.0 中位　16.0 下位　13.0	砂粒 小石 (多量)	赤褐色	良好	体部は肥厚。	〔外器面〕 ナデ。下位にハケ目。 〔内器面〕 ナデ。下位でヘラ削り。 質量感ある土器。
96	土師器 甑の取っ手	――――	砂粒 (極少量)	鈍い橙色	良好	取っ手の先端は直立気味となる。	ナデ。 一部に、粗いヘラナデ。
97	弥　生 小形椀 (体部)	上位　5.5 中位　4.0 下位　5.0	鉱物 (多量)	褐白灰色	良好	体部は内弯し、上位でやや肥厚。 口唇部は扁平。	〔内外器面〕 ナデ。 ローリングを受けている。
98	弥　生 小型丸底壺 (胴部)	上位　7.0 中位　9.0 下位　4.5	砂粒 (やや多し)	〔外〕白褐色 〔内〕黒灰色	良好	――――	ローリングを受けている。
99	弥　生 (胴部)	上位　11.0 突帯　24.0 中位　14.0 下位　12.0	白色粒 小石 金雲母 (やや多し)	褐灰色	良好	貼り付けの突帯が付く。	〔外器面〕 丁寧な横ナデ。 〔内器面〕 ナデ。
100	弥　生 甕 (頚部)	上位　12.0 中位　7.5 下位　6.0	砂粒 金雲母 (多量)	〔内〕灰褐色 〔外〕 灰黒褐色	普通	復元口径　20.5cm	ローリングを受けている。

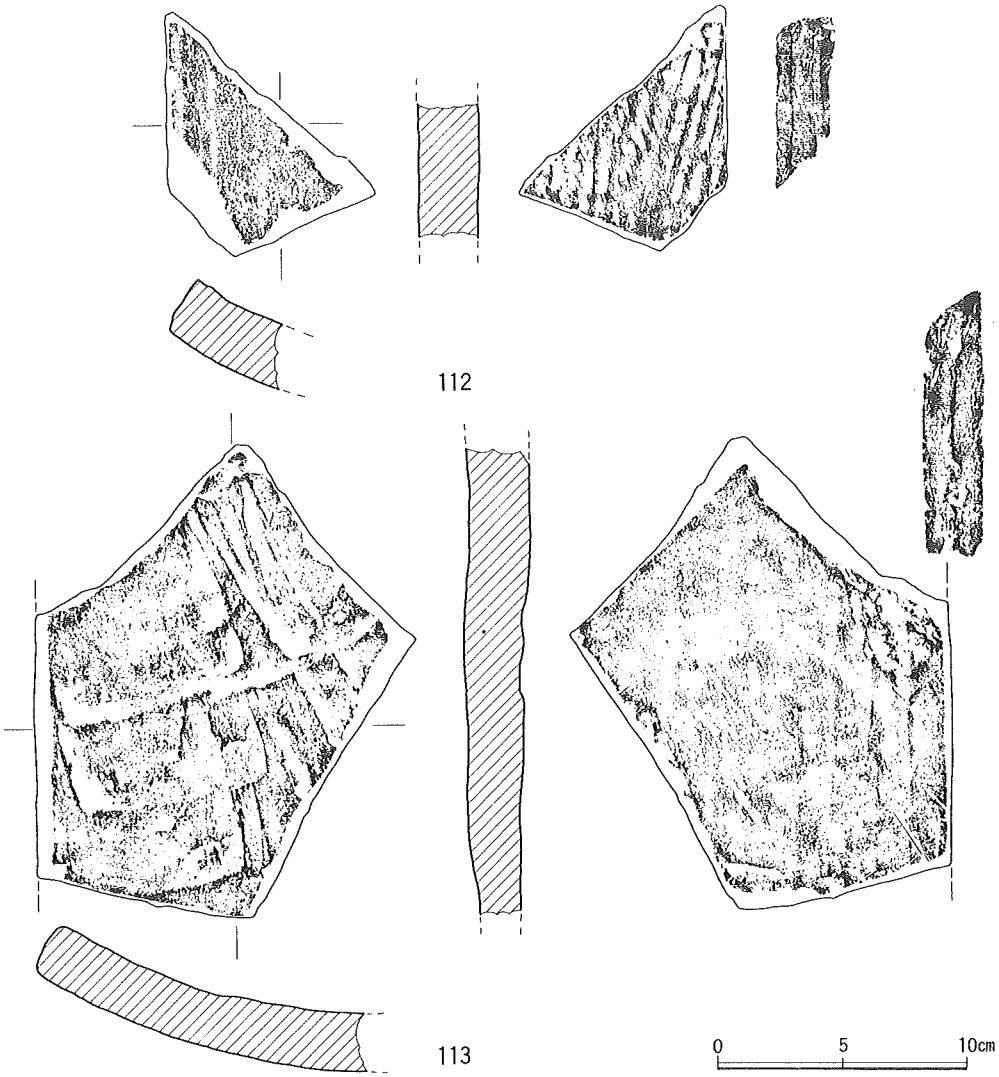
第30表　出土遺物観察表⑧



第39図　出土遺物実測図⑱

No	器　種	器厚（mm）	胎　土	色　調	焼成	形　態	調　整
101	縄　文 晩期	上位　7.5 突帯　27.0 中位　9.5 下位　9.5	砂粒 金雲母 (やや多し)	鈍い橙色 (内器面の 一部は黒 灰色)	良好	貼り付けの突帯が付く。 突帯には斜めの刻目がある。	〔内外器面〕ナデ。 〔外器面〕下位でハケ目。
102	縄　文 晩期	上位　4.0 中位　14.0 下位　6.0	砂粒 (少量)	〔外〕褐灰色 〔内〕黒灰色	良好	復元口径　16.2cm	〔内外器面〕ナデ。
103	青　磁 碗 14C末～15C	上位　4.0 中位　4.0 下位　5.0	精良	〔釉〕 薄緑灰色 (透明感)	良好	体部は薄壁で、僅かに内弯する。	〔外器面〕雷文帯文様。 〔内器面〕モチーフ不明の文様あり。
104	青　磁 碗 13C～14C	上位　4.5 中位　4.0	精良	〔胎〕灰褐色 〔釉〕 緑黄灰色	やや 劣る	復元口径　14.0cm	〔外器面〕蓮弁文様。蓮弁の先端部は尖がる。 〔内外器面〕細かい貫入が走る。
105	青　磁 碗 13C～14C	上位　3.0 中位　4.5 下位　4.5	精良	〔釉〕黄緑色	普通	――	〔外器面〕かすかな蓮弁文様。蓮弁は太めで丸味を帯びる。 〔内器面〕無文。
106	白　磁 13C～14C	上位　2.0 中位　4.0 下位　4.5	精良	白灰色	普通	口縁部は上位で外側が大きく窪む。	口禿げ白磁。 (口唇部から内器面にかけて1.5mm幅で無釉)
107	白　磁 皿 12C	上位　3.5 中位　5.0 下位　5.5	精良	灰色 (光沢あり)	良好 (完全焼成)	――	――
108	白　磁 碗	上位　4.0 中位　5.5 下位　5.5	精良	灰白色	普通	復元口径　13.6cm 体部はやや内弯し、上位で括れて外弯する。	〔外器面〕横ナデ。多くの不純物が付着。 〔内器面〕丁寧なナデ。
109	瓦質擂鉢 中世	上位　10.0 中位　8.5 下位　7.5	小石 砂粒 鉱物 (やや多し)	灰白色	普通	――	〔外器面〕ナデ。指押え。 〔内器面〕横ナデ。指押え。
110	須恵系土器 壺 中世	上位　6.0 中位　8.5 下位　7.0	砂粒 (極少量)	〔内〕 にぶい赤 褐色 〔外〕灰白色	良好	復元口径　14.8cm	〔外器面〕 最上位から内器面中位まで回転ナデ。 中位：ハケ状工具による回転ナデ。 下位：タタキ後、回転ナデ。 〔内器面〕中位：粗い回転ナデ。 下位：タタキ後、ナデ。 上位に自然釉がかかる。
111	中世土器	底部　7.5 外底端　8.0 体部　4.5	混入物 (極少量)	灰薄茶色	良好	復元底径　8.3cm	〔内器面〕ナデ。

第31表　出土遺物観察表⑨



第40図　出土遺物実測図⑲

No	器　種	器厚(cm)	重さ(g)	胎　土	色　調	焼成	調　　整
112	平　瓦	縦位 狭 2.4 広 2.4 横位 中 2.5 側 2.5	133.9	黒雲母 (少量)	灰　色	硬	〔凹面〕 布目。模骨痕。 〔凸面〕 格子叩き(短冊形)。凹：3㎜×1.6cm 凸：横 3㎜、縦 3㎜ 部分的にナデ消し。 〔側面〕 削り。
113	平　瓦	縦位 狭 2.5 広 1.7 横位 中 2.4 側 2.1	641.7	砂粒 (やや多し)	褐　色	やや 硬	〔凹面〕 布目。細板状圧痕(幅の違うものが交差している) ローリングを受けている。 〔凸面〕 ナデ。 〔側面〕 破面。ローリングを受けている。

第32表　出土遺物観察表⑩

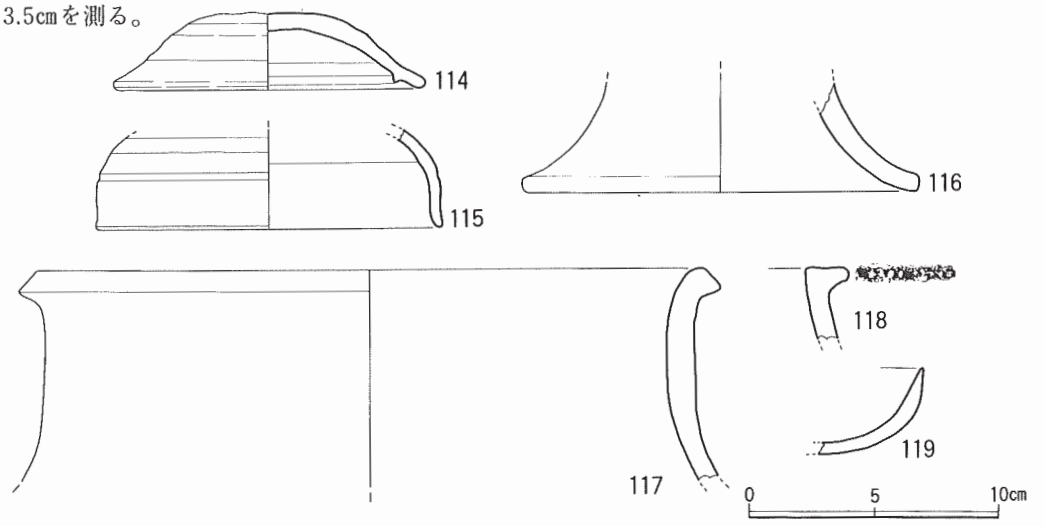
3.14 調査区

須恵器〔114・115〕　いずれも蓋で、114は7世紀中葉、115は6世紀後半のものである。復元口径は114が12.4cm、115が13.6cmを測る。

土師器〔116〕　甕の脚部で、復元底径は15.8cmを測る。

弥生土器〔117～119〕　117・118は甕の頸部である。117は復元口径26.7cmを測る。118は口唇部が張り出し、外縁部に刻目を有する。119は椀で、体部は内弯し、口縁直口である。

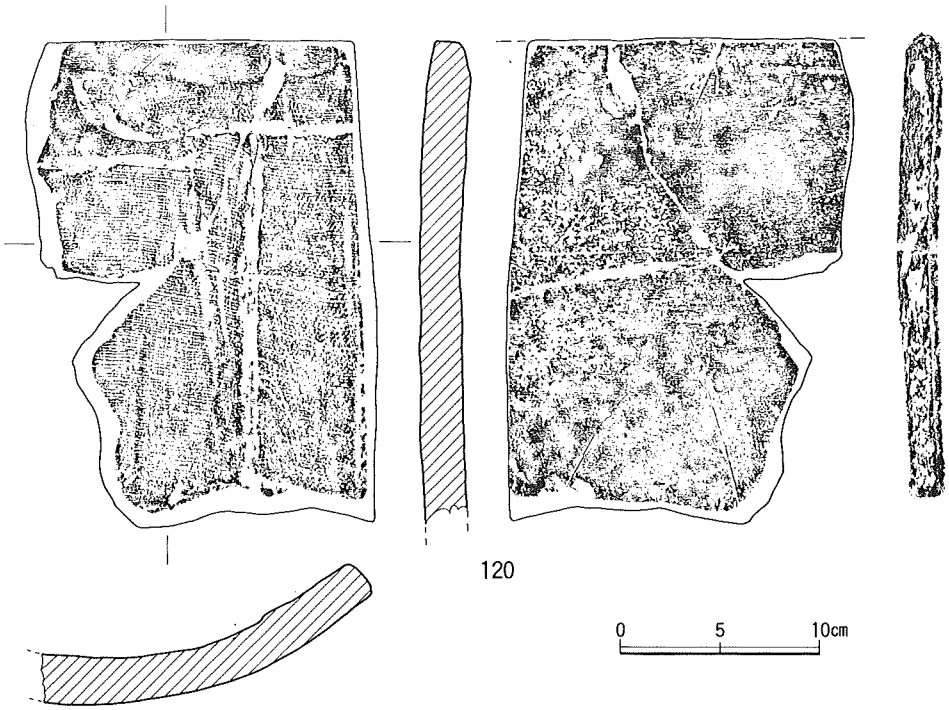
布目瓦〔120・121〕　121は単弁八葉模様の百済系軒丸瓦(瓦当)で、花弁の残存最大幅は3.5cmを測る。

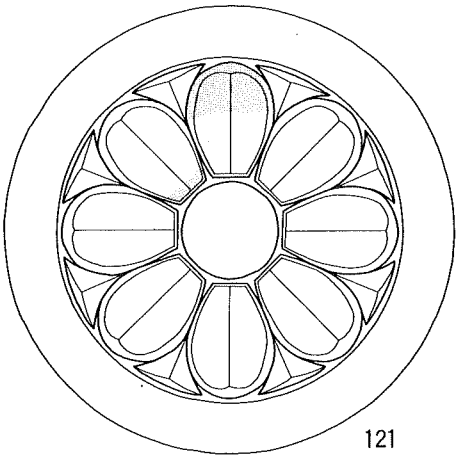


第41図　出土遺物実測図⑳

No	器種	器厚 (mm)	胎土	色調	焼成	形態	調整
114	須恵器 蓋 7C中	上位 7.0 中位 7.0 下位 4.5	砂粒 (極少量)	灰色	良好	復元口径 12.4cm	〔外器面〕 上～中位：不定方向のヘラ削り。 (ヘラ幅は1.5cm) 中～下位：回転ナデ。 〔内器面〕上位：不定ナデ。 中位：回転ナデ。 下位：回転ヘラ削りで返りを際立たせ、その後、回転ナデ。 〔つまみ部〕欠損。
115	須恵器 蓋 6C後	上位 4.0 中位 5.0 下位 3.0	砂粒 (極少量)	灰色	良好	復元口径 13.6cm	〔外器面〕上位：回転ヘラ削り 中～下位：回転ナデ。 〔内器面〕回転ナデ。
116	土師器 (脚部)	上位 9.0 中位 8.5 下位 7.0	砂粒 鉱物 (多量)	鈍い橙色	良好	復元底径 15.8cm	〔内外器面〕横ナデ。
117	弥生 (頸～体部)	上位 13.0 中位 11.0 下位 7.0	砂粒 鉱物 小石 (多量)	乳褐色 [外]上位と内部は黒灰色	良好	復元口径 26.7cm	ローリングを受けている。
118	弥生 (口縁部)	上位 17.0 中位 8.0 下位 8.0	砂粒 (少量)	褐白色	良好	口唇部は、1.7cm幅で張り出し、外縁部に刻目を有する。 内器面に斜めの沈線あり。	ロリングを受けている。 〔内外器面〕ナデ。
119	弥生 椀 (体部)	上位 1.5 中位 6.0 下位 5.0	鉱物 (多量)	褐灰桃色 (一部、灰黒色)	良好	口縁直口。 体部は内弯。	ローリングを受けている。 〔内外器面〕ナデ。

第33表　出土遺物観察表⑪





※百済系軒丸瓦（瓦当）復元図
スクリーントン部が残存部

第42図　出土遺物実測図㉑

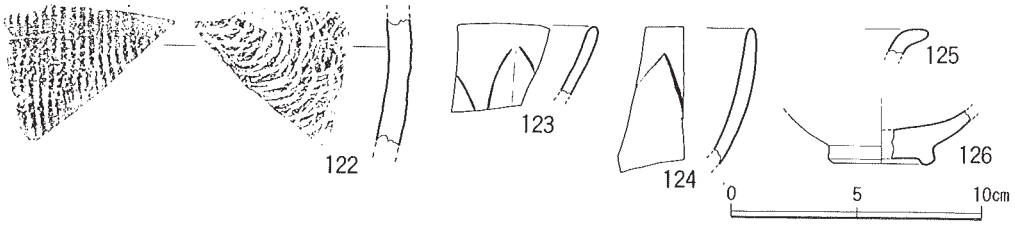
No	器　種	器厚（cm）	重さ(g)	胎　土	色　調	焼成	調　　整
120	平　瓦	縦位 狭　1.9 広　2.1 横位 中　2.4 側　1.9	1232.2	砂粒 (少量)	橙　色	硬	〔凹面〕 布目。模骨痕。粘土紐痕。 狭端面寄りでヘラ削り。 〔凸面〕 ナデ。 〔側面〕 破面。ローリングを受けている。
121	瓦　当	中心部　2.8	285.4	砂粒 (多量)	橙　色	硬	花弁の残存最大横幅　3.5cm 百済系と思われる。

第34表　出土遺物観察表⑫

4.15 調査区

須恵器〔122〕　甕の胴部である。調整は外器面が細目の格子タタキで、内器面は円文タタキである。

中世遺物〔123～126〕　青磁(123・124・126)、白磁(125)がある。123・124は碗の体部で、いずれも外器面に弱いヘラ描きによる蓮弁文様があり、時期的には14世紀末～15世紀のものである。126は底部で、復元底径3.4cm、高台高2～2.5mmを測る。125は完全焼成の皿で、器面に光沢がある。



第43図　出土遺物実測図㉒

No	器種	器厚(mm)	胎土	色調	焼成	形態	調整
122	須恵器 (胴部)	上位 9.0 中位 8.0 下位 9.5	砂粒 (少量)	灰色	良好	――――	〔外器面〕細目の格子タタキ。 凹：1.5×1mm 凸：横 1mm 縦 3mm 〔内器面〕円文タタキ。
123	青磁 碗 (体部) 14C末～15C	上位 5.0 中位 4.5 下位 4.0	精良	〔釉〕 緑黄灰色	普通	口唇部は丸味を帯びる。	〔内外器面〕器面はややデコボコの感あり。 〔外器面〕弱いヘラ描きによる蓮弁文様。 (先端はやや尖る) 〔内器面〕無文。
124	青磁 碗 (体部) 14C末～15C	上位 3.5 中位 6.0 下位 5.0	精良	〔胎〕灰白色 〔釉〕 緑青灰色	普通	体部はやや内弯。	〔内外器面〕丁寧なナデ。 〔外器面〕弱いヘラ描きによる蓮弁文様。 (先端は鋭く尖る) 〔内器面〕無文。
125	白磁 皿 (体部) 15C末～16C	上位3.0～6.0 下位 6.0	精良	灰白青色	良好 (完全焼成)	体部は上位で屈曲する。 内器面の屈曲箇所に稜線。	〔内外器面〕薄い貫入が走る。
126	青磁	底部 12.0 高台 6.0 体部上 5.0 下 9.0	精良	〔胎〕灰白色 〔釉〕 コバルトブルー	良好	復元底径 3.4cm 高台高 2～2.5mm	高台の畳付きから外底面にかけて無釉。 素地はチョコレート色。 〔内外器面〕太めの貫入が走る。

第35表　出土遺物観察表⑬

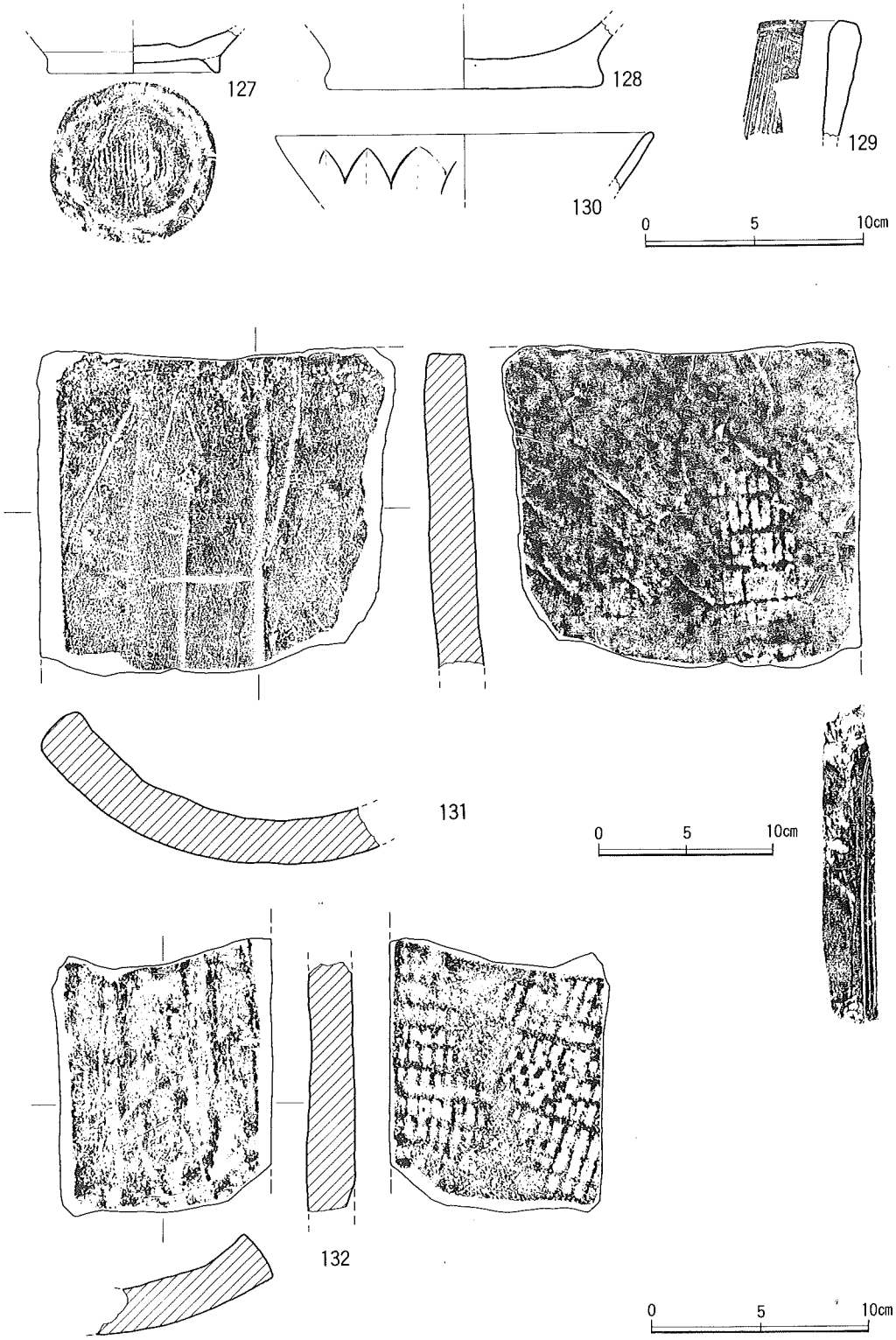
5.16 調査区

土師器〔127〕　高台付き椀で、復元底径7.8cm、高台高5～6mmを測る。付け高台で、外底面に板目圧痕が残る。

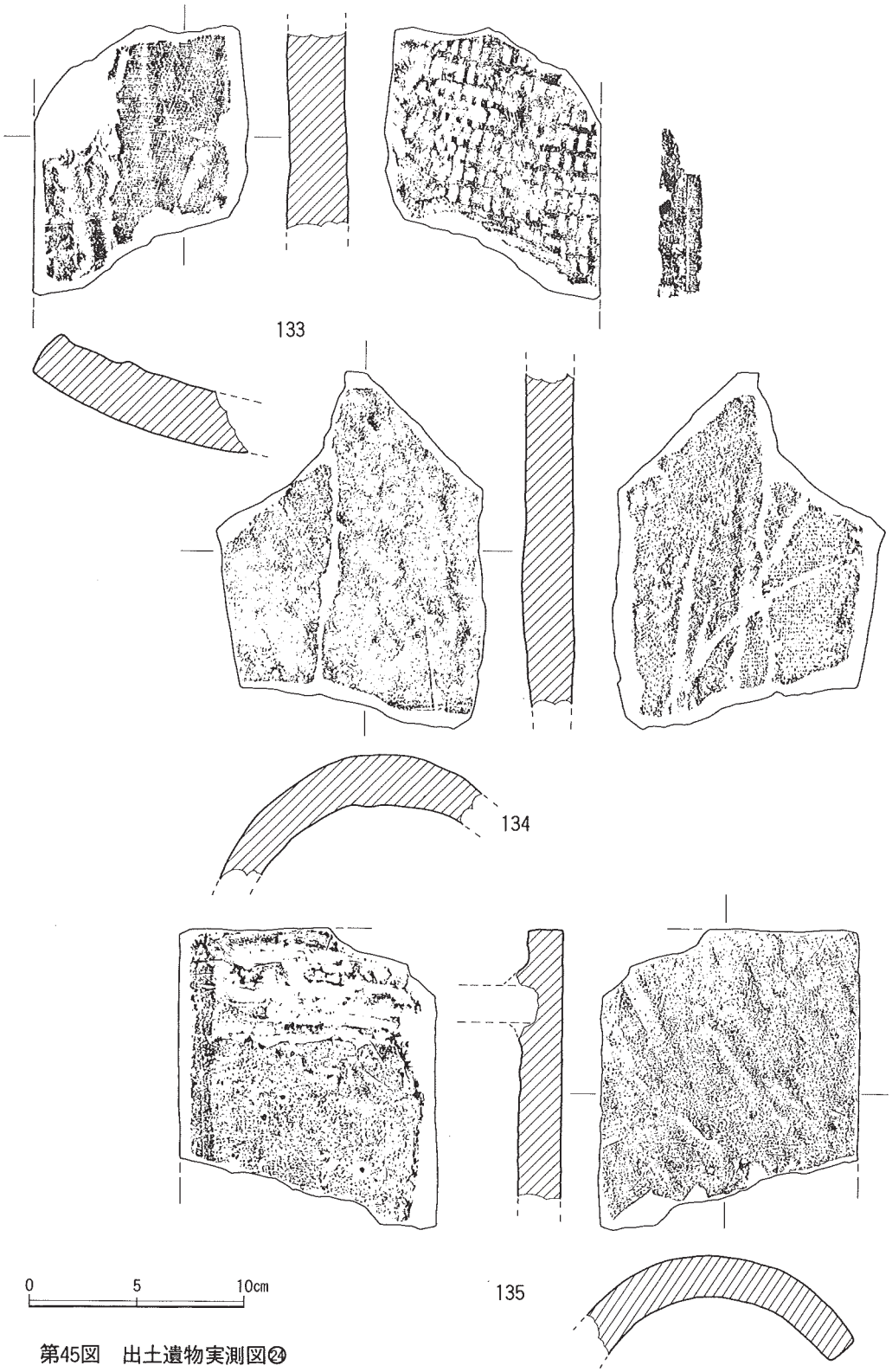
縄文土器〔128〕　晩期の土器で底部は平底である。復元底径12.7cmを測る。

中世遺物〔129・130〕　瓦質擂鉢(129)、青磁(130)がある。129は条線が7本まで確認できる。130は13～14世紀のもので、外器面に蓮弁文様がある。

布目瓦〔131～135〕　平瓦(131～133)、丸瓦(134・135)がある。135は瓦当が剥落した可能性もあるが、この事については意見が分かれる。



第44図　出土遺物実測図㉓



第45図　出土遺物実測図㉔

No	器　種	器 厚 (mm)	胎　土	色　調	焼成	形　　態	調　　整
127	土師器 高台付き椀 (底部)	底部6.0～8.0 高台3.0～7.0 体部　5.5	砂粒 (少量)	鈍い橙色	良好	復元底径　7.8cm 高台高　5～6mm 付け高台。 内底面は同心円状に窪む。	〔外器面〕板目圧痕。 〔内器面〕ナデ。
128	縄　文 (底部) 晩期	底部　14.0 外底端 24.0 体部　8.0	小石 黒雲母 長石 (やや多し)	鈍い橙灰色	良好	復元底径　12.7cm 平底。	〔外器面・外底面〕丁寧なナデ。 〔内底面〕ローリングを受けている。
129	瓦質擂鉢 (体部)	上位　15.0 中位　12.0 下位　7.5	砂粒 (少量)	灰白黒色	良好	口唇部は横ナデで、扁平。 内器面の条線は7本まで確認できる。	〔外器面〕ナデ。指押え。 〔内器面〕上位：強いナデ。
130	青　磁 (体部) 13C～14C	上位　4.5 中位　5.0 下位　5.0	精良 混入物 (極少)	〔胎〕白灰色 〔釉〕緑灰色	良好	復元口径　17.4cm	〔外器面〕ヘラ削りによる蓮弁文様 (先端部はやや丸味帯びる)。 〔内器面〕無文。 〔内外器面〕細目の貫入が走る。

No	器　種	器 厚 (cm)	重さ(g)	胎　土	色　調	焼成	調　　整
131	平　瓦	縦位 狭 2.1 広 2.5 横位 中 2.6 側 2.9	1558.0	混入物 (極少量)	灰　色	硬	〔凹面〕布目。模骨痕。粘土紐痕。 やや太めの沈線(2mm幅)。 〔凸面〕格子叩き(短冊形)。凹：5mm×1.7cm 凸：横 2～3mm　縦3～4mm 〔側面〕削り。細目の沈線。
132	平　瓦	縦位 狭 2.0 広 2.1 横位 中 2.0 側 2.4	340.9	砂粒 (やや多し)	白灰色 灰黒色	やや 軟	〔凹面〕布目。模骨痕。ローリングを受けている。 〔凸面〕格子叩き(短冊形)。凹：2.5mm×6mm 凸：横 5mm　縦 2mm 〔側面〕削り。ローリングを受けている。
133	平　瓦	縦位 狭 2.7 広 2.8 横位 中 2.5 側 2.2	328.5	混入物 (極少量)	灰　色	硬	〔凹面〕布目。粘土板合わせ目。調整が粗い。 〔凸面〕格子叩き(方形)。凹：3mm×5mm 凸：横 4.5mm　縦 2.5～3mm 〔側面〕破面。
134	丸　瓦	縦位 狭 2.2 広 1.9 横位 中 1.7 側 1.7	475.0	砂粒 (少量)	灰白色	やや 硬	〔凹面〕布目。粘土紐痕。 〔凸面〕ナデ。
135	丸　瓦	縦位 狭 1.6 広 2.0 横位 中 1.9 側 1.4	430.0	砂粒 (やや多し)	灰　色	硬	〔凹面〕布目。ナデ。瓦当が剥落したものか？ 〔凸面〕ナデ。

第36表　出土遺物観察表⑭

6.17 調査区

須恵器〔136～138〕　高坏の身(136)、甕の胴部(137・138)がある。136は7世紀後半で、復元口径13.4cmを測る。

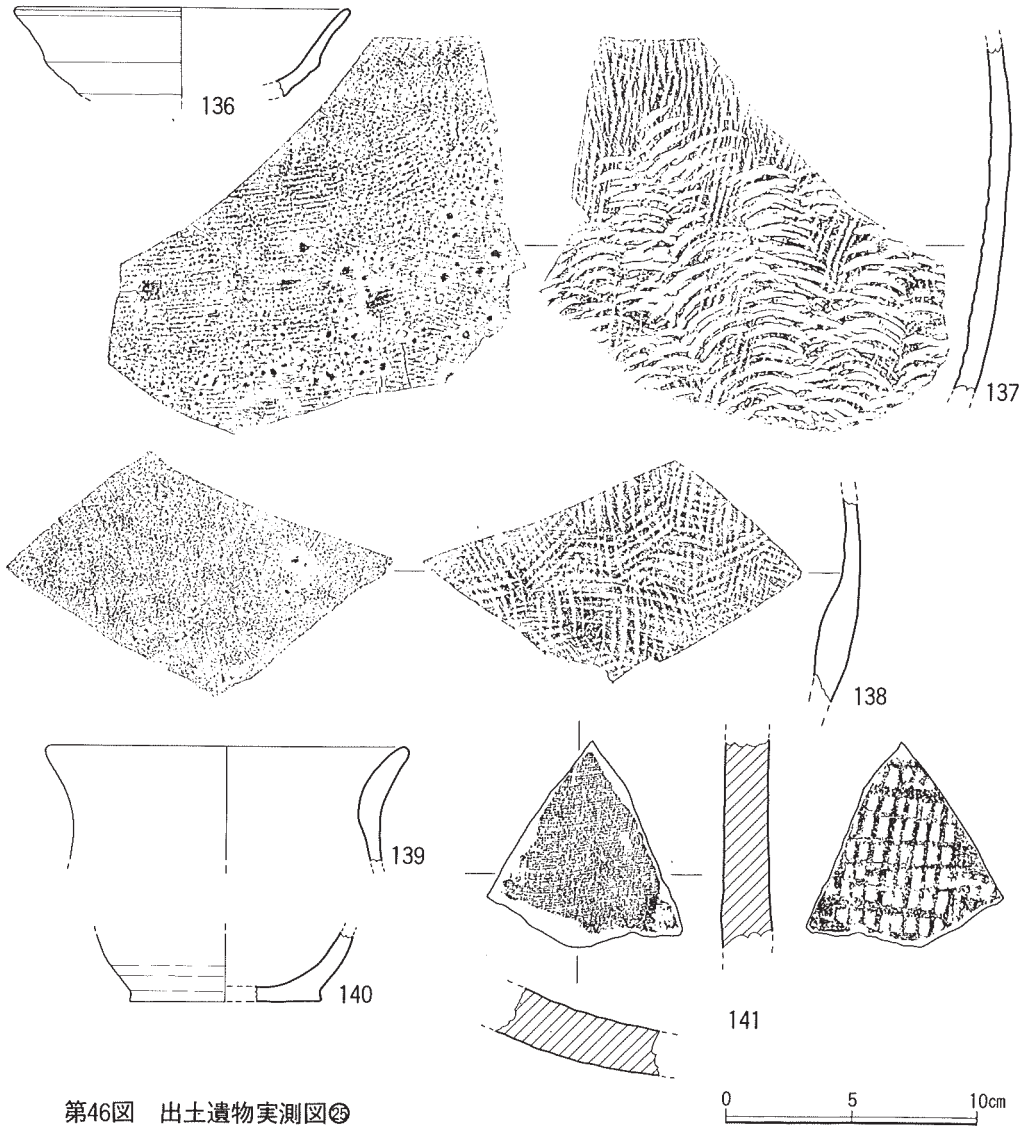
137は8世紀で、南側八角形建物の掘形(再建期)から出土した。外器面はハケ状の工具による横ナデが施されているが、コブ状の隆起が目立つ。138は器面が歪で凸凹の状態である。内器面に平行タタキが交差する。

土師器〔139・140〕　140は杯で、復元底径は7.6cmを測る。平底で、外底端は角張る。

布目瓦〔141〕　別途記載。

No	器　種	器 厚 (mm)	胎　土	色　調	焼成	形　　態	調　　整
136	須恵器 (高坏の身) 7C後半	上位　5.0 中位　7.5 下位　7.0	砂粒 (極少量)	灰黄色	良好	復元口径　13.4cm	〔内外器面〕回転ナデ。 〔外器面〕上位：一部にナデ痕あり。
137	須恵器 (胴部) 8C	上位　6.0 中位　7.5 下位　8.5	砂粒 (極少量)	〔内〕灰色 〔外〕黒色	良好	外器面にコブ状の隆起がある。	〔外器面〕ハケ状の工具による横方向のナデ。 〔内器面〕細目の平行タタキと円文タタキ。

第37表　出土遺物観察表⑮



第46図　出土遺物実測図㉕

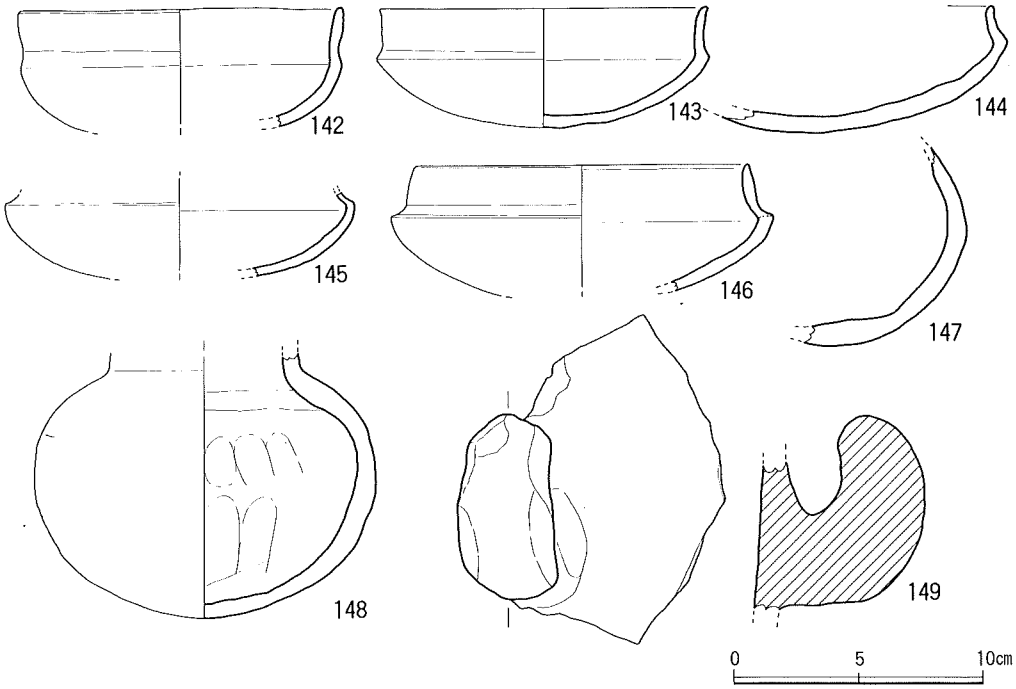
No	器　種	器厚（mm）	胎　土	色　調	焼成	形　態	調　整
138	須恵器 （胴部）	上位　6.0 中位　14.0 下位　11.0	砂粒 （やや多し）	〔内〕灰色 〔外〕灰褐色	良好	外器面は歪で、器面は凹凸の状態。	〔外器面〕粗いナデと指押え。 〔内器面〕平行タタキが交差する。
139	土師器 （頸～体部）	上位　5.0 中位　9.0 下位　4.5	砂粒 （やや多し）	〔内〕小豆色 〔外〕黒色	良好	体部で薄壁。 頸部で肥厚。	〔外器面〕ナデ後、指押え。 〔内器面〕上位：横ナデ。 下位：ヘラ削り。 堅緻な焼成。
140	土師器 杯 （体～底部）	底部　6.0 外底端　14.0 体部　5.5	金雲母 砂粒 （やや多し）	鈍い橙色	良好	復元底径　7.6cm 平底で外底端は角張る。 体部の立ち上がりは窪む。	〔内外器面〕ナデ。 〔外底面〕ヘラ切り後、ナデ。一部に指押え。

No	器　種	器厚（cm）	重さ（g）	胎　土	色　調	焼成	調　整
141	平　瓦	縦位　狭 1.7 広 2.0 横位　中 1.8 側 2.0	105.7	砂粒 （少量）	灰　色	硬	〔凹面〕布目。 〔凸面〕格子目叩き（短冊形）。凹：3.5mm×6～8mm 凸：横 2mm　縦 2mm

第38表　出土遺物観察表⑯

7.18 調査区

土師器〔142～149〕　杯身(142～146)、小型丸底壺(147・148)、甑の取手(149)があり、いずれも6世紀中葉～後半の竪穴住居址からの出土である。



第47図　出土遺物実測図㉖

No	器種	器厚(mm)	胎土	色調	焼成	形態	調整
142	土師器 杯身	上位 4.0 中位 5.0 下位 4.5	金雲母 砂粒 (やや多し)	赤褐色 〔中～下位〕 黒色	良好	復元口径 13.0cm	ローリングを受けている。 〔内外器面〕ナデ。
143	土師器 杯身	上位 3.5 中位 4.0 下位 5.0	砂粒 (極少量)	鈍い橙色	普通	口径 13.1cm	ローリングを受けている。 〔内外器面〕ナデ?
144	土師器 杯身	上位 3.5 中位 7.0 下位 7.0	砂粒 (極少量)	淡赤褐色	やや 甘い	――――	ローリングを受けている。 〔内外器面〕ナデ?
145	土師器 杯身	上位 2.0 中位 5.0 下位 3.0	砂粒 (多量)	〔内〕赤褐色 〔外〕黒色	良好	最大復元胴部径 14.0cm	ローリングを受けている。 調整不明。 〔外器面〕かなり強く火を受けている。
146	土師器 杯身	上位 4.0 中位 6.0 下位 4.0	砂粒 鉱物 (多量)	鈍い橙色	良好	口径 13.4cm	〔内外器面〕回転ナデ。
147	土師器 小型丸底土器	上位 6.0 中位 7.0 下位 10.0	混入物 (極少量)	淡赤褐色 ～暗褐色	普通	――――	ローリングを受けている。 〔外器面〕ナデ。 〔内器面〕ヘラ削り。
148	土師器 小型丸底壺	上位 6.0 中位 9.0 下位 6.0	砂粒 (少量)	〔内〕淡橙色 〔外〕橙色 ～暗褐色	良好	復元最大胴部径 13.6cm	〔外器面〕丁寧なナデ。 〔内器面〕体部はヘラ削り後、ナデ。 〔頸部〕ナデ。
149	土師器 甑の取手	――――	砂粒 鉱物 (多量)	〔内〕黒色 〔外〕 鈍い橙色	良好	取手は直立気味となる。	〔外器面〕縦方向のハケ目。 〔内器面〕ナデ。 〔取手〕ヘラ削り後、粗いナデ

第39表　出土遺物観察表⑰

8．瓦について

① 第12次調査の結果をまとめた報告書(熊本県文化財調査報告第116集)では、平瓦を凸面の叩き目と調整方法によって4類18種に分類した。

内訳は格子叩き目を持つもの(Ⅰ類)、条痕を持つもの(Ⅱ類)、縄目を持つもの(Ⅲ類)、調整により叩き目が消去されているもの(Ⅳ類)である。さらにⅠ・Ⅱ類は下記の様に細分した。

Ⅰ類

分類	形　　状
Ⅰa	大型の方形
Ⅰb	やや小型の方形
Ⅰc	短冊形
Ⅰd	大型の短冊形
Ⅰe	2種の叩き目 (Ⅰa・Ⅰbを合わせ持つ)

Ⅱ類

分類	形　　状
Ⅱa	横方向で、深く明確な条痕。
Ⅱb	縦方向で、深く明確な条痕。
Ⅱc	浅い条痕で、ナデにより単位不明のもの。
Ⅱd	浅い条痕で単位が判り、幅が狭く、間隔の広いもの。
Ⅱe	浅い条痕で単位が判り、幅が広く、間隔の狭いもの。
Ⅱf	深い条痕で単位が判り、幅と間隔の広いもの。

なお、Ⅰaは3種、Ⅱbは2種に再細分している。これらは基本的には上記の分類により小型のものであるが、該当するものが各々1点づつであるので、再細分の中にいれてある。

② 第13次調査では、上記のⅠ類とⅣ類に関し、次の様に分類を修正した。

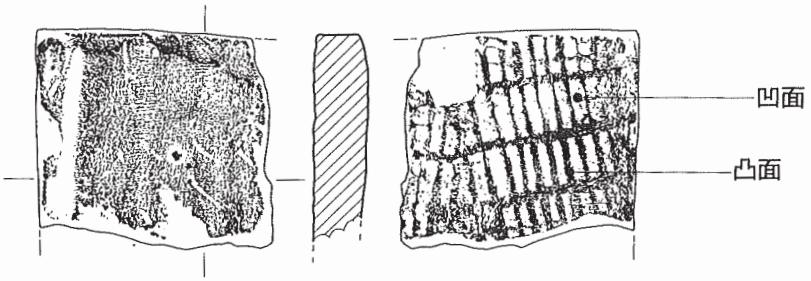
Ⅰ類

分類	形　状	12次調査の分類
Ⅰa	大型の方形	大型の方形
Ⅰb	中型の方形	やや小型の方形(Ⅰaの再細分)
Ⅰc	小型の方形	(Ⅰbの再細分)
Ⅰd	大型の短冊形	大型の短冊形
Ⅰe	中型の短冊形	短冊形
Ⅰf	小型の短冊形	――――

Ⅳ類

12次調査の分類をⅣa類として、今回、新たに見つかった3㎝幅で帯状の圧痕があるものをⅣb類とした。

12次調査のⅠe類は分類から除外した。さらに、12次調査では格子叩き目の形状を、幅・間隔の横刻線・縦刻線としたが、13次調査では凹・凸に表現を変えた。



参考例：No.46　　第48図　格子叩き目形状模式図

③ 13次調査で出土した布目瓦の分類（凸面の調整方法による分類）

Ⅰ類(格子目叩き)

形状	分類	実測図No.	凹	凸
方形	Ⅰa (大型)	56	14×7～9	3～5×3～6
		57	10×11	7×6
		58	11×10	5×4
		59	9×15	3×4
	Ⅰb (中型)	55	5×6	3×3
		60	4×6	3×3
	Ⅰc(小型)	132	3×5	4.5×2.5～3
短冊型	Ⅰd (大型)	45	6×20	－×2
		46	4～8×21	1.5～3×2
		47	5×20	2×3
		49	6×16～18	3×2
		50	5×20	3×2
		52	5×20	2×2
	Ⅰe (中型)	48	3.5×16	4×4
		51	5×13	1×2～4
		53	4×17	3×2
		54	4×10	2×3
		112	3×16	3×3
		130	5×17	2～3×3～4
	Ⅰf (小型)	131	2.5×6	5×2
		141	3.5×6～8	2×2

(単位：mm)

Ⅱ類（条痕）

分類	実測図 No.	幅	間隔	深さ
Ⅱa	－	－	－	－
Ⅱb	－	－	－	－
Ⅱc	－	－	－	－
Ⅱd	－	－	－	－
Ⅱe	－	－	－	－
Ⅱf	61	10	4～6	1
	62	9～10	4～10	1

(単位：mm)

Ⅲ類（縄目）　　出土例なし。

Ⅳ類（横・縦方向のナデ）

分類	凸面の形状	実測図 No.
Ⅳa	平ら	63～72・74～79 113・120・133・134
Ⅳb	帯状の圧痕が付く	73

第40表　布目瓦分類表①

④ 下記の第41表は、今年度に出土した布目瓦を、総て細片に至るまで分類し、調査区・凸面の調整方法・色調・重さの４つを組み合わせたものである。

色調				白色	灰黒色	灰白褐色	灰色	茶色	褐色	橙色	灰褐色	計
焼成				軟	軟	やや軟	硬	硬	やや硬	硬	やや軟	
調整	ナデ		12区	15,237.9	2,586.7	12,575.9	8,508.3	1,278.6	34,362.5	10,029.0		84,578.9
			13区						641.7			641.7
			14区							1,232.2		1,232.2
			16区			475.0	758.5					1,233.5
	タタキ 短冊方形	大型	12区	427.3		1,924.4	4,070.8		6,897.8			13,320.3
			13区				133.7					133.7
		中型	12区			170.7	416.6					587.3
			13区				133.9					133.9
		小型	17区				105.7					105.7
		大型	12区			259.8			4,638.8			4,898.6
		中型	12区			114.0						114.0
		小型	12区	156.0		249.7	27.6		751.5			1,184.8
			16区				328.3					328.3
条痕			12区								1,821.8	1,821.8
計				15,821.2	2,586.7	15,769.5	14,483.4	1,278.6	47,292.3	11,261.2	1,821.8	110,314.7

(単位：g)

第41表　布目瓦分類表②

第Ⅳ章　ま　と　め

今年度の第13次調査は、調査区を町道沿いに移しての調査であった。結果として平成２年度(12次調査)の調査区を東側へ拡大した事になる。

１.建築址

① 今回の調査では12棟の建築址を検出したが、建て替えられたり、重複している建物もあったので、最終的に16棟分(20～35号建築址)を確認した事になる。建物の種類は、倉庫跡と思われるものが12棟あり、この他に我国の古代山城から初めて検出された八角形建物(南北に並んでおり、それぞれ建て替えられているので、棟数としては４棟分を数える)がある。

② 倉庫跡の建物の構造は礎石建物が５棟(20～23号・34号)、掘立柱建物が６棟(24～28号・35号)、礎石と掘立柱建物の併用建物が１棟(29号)を数える。この中で掘立柱建物は部分的な検出にとどまった35号を除き、総柱(25号)と側柱のみの建物(24号・26～28号)に分けられる。さらに24号と27号は庇が付く建物である。

③ 今回の調査で、３棟重なり合う建物(21号・22号・35号)が初めて検出された。先後関係は35号の掘立柱建物が最も古く、22号礎石建物→21号礎石建物へと建て替えられている事がわかる。昨年の12次調査までの遺構検出の特色として、遺構の切り合いが極めて少なく、重複しても２棟までであったので、これは鞠智城の築城時期を考える上で、極めて、貴重な資料である。どう見ても最下層の35号建物は、最上層の21号建物より数十年古くなることが考えられるが、最上層遺構の21号建物は、出土遺物から７世紀後半頃のものと推察される。

さらに、21号・22号建物の先後関係に関し、先行する22号建物の礎石より、後代の21号建物の礎石が一回りも二回りも大きい事に注目すべきである。国家の非常時に築城された鞠智城の性格からして、創建期よりも再建期の建物が大きいと言う事は非常に疑問である。この建て替えが『続日本紀』のいう「繕治」に該当するものかを含めて、今後の研究課題である。

④ 八角形建物も大きな課題を残す。北側のものは創建期が掘立柱建物で再建期が礎石建物との判断を下したが、疑問が残る。皿状を呈する心柱の掘形との関連が不可解である。再建期の場合、韓国の二聖山城にならって４個の礎石があったと仮定するならば、皿状の掘形でもおかしくはない。しかし、これが創建期の掘立柱建物の時代では、常識的に心柱の掘形は南側建物(掘立柱建物)の様に深くなる筈である。考えられる事は、創建期の場合、心柱には建物の重心が余り係らない様な建物構造であったが、あるいは極論として心柱のみ礎石が座っていたのかのどちらかと考えられるが、結論に至らない。

一方、南側建物も掘形の切り合い関係で疑問を残す。本文中でも記した様に、土層断面において切り合い関係を示す明確な線引きができない。この件に関し、同様な事例が12次調査の17

号と18号建物にあった事も本文で取り上げた。唯一、考えられることは建て替えの時期が極めて早期であったという事であるが、これ又、確たる推論でない事は明らかである。さらに、南側の建物は再建期において心柱の位置は同じくして建物全体が23.5°回転していると言うことである。相対する北側建物は原位置で再建されているだけに疑問となる。これに加えて北側建物は裳階が２層であるに対し、南側は３層と構造上の違いがある。この相違点は何か意味を持つものであろうか。

八角形建物の性格も現時点では不明である。様々な解釈があることは本文中でも説明したが、３月の時点で、道教思想との関連を指摘する意見も出ており、この事については、次年度の第14次調査で詳しく検討したい。

⑤ 建物の配列について

平成２年度(第12次調査)の報告書(第116集)でも述べた様に、大野城程ではないにしろ、台地に築かれた鞠智城の場合も、建物の建造に際し、ある程度の地形の制約があった事は明らかである。ほぼ同時期の７世紀後半と推定される18棟の建物でさえ、桁行方向で５つのグループに細分された。

今年度の第13次調査でも、最終的に16棟分を確認しているが、八角形建物や全体規模を把握できないもの(34号建物は礎石２個、35号建物は掘形１個の検出にとどまった)を除いた、倉庫跡と考えられる10棟分にも同様な事が言える。

結果として、昨年度のグループに属するものは無く、新たに３グループ(F～H)が追加された。内訳は下記の通りである。

＊Ｆグループ(20・21号建物)

12区と13区からの検出で、礎石建物である。２棟の建物は、桁行方向で柱筋が通りＮ６°Ｗを示す。

＊Ｇグループ(22・23・26号建物)

22号・23号建物は、Ｆグループの下層遺構で、13区と14区からの検出である。礎石建物で、Ｆグループと同じく桁行方向で柱筋が通り、Ｎ11°Ｗを示す。さらにこのグループには16区の26号建物を加えて良い。26号建物は掘立柱(側柱のみ)建物でＮ12°Ｗを示す。

＊Ｈグループ(24・27・28号建物)

いずれも掘立柱(側柱のみ)建物である。24号と28号建物はＮ49°ＥとＮ47°Ｅを示し、一つのグループとしてみなされる。さらにこれらの建物に桁行方向で、直交する27号建物(Ｎ48°Ｗ)がある。

＊その他

上記の３グループに属さないものに25号建物と29号建物がある。25号建物は総柱の掘立柱建物で、29号建物は礎石と掘立柱の併用建物である。

2. 出土遺物

(1) 第13次調査で出土した遺物は非常に少なかった。6つの調査区(12～18区)の内、まとまった遺物が出土したのは、12・13調査区のみであった。これらについては本文の冒頭で述べた様に、開田事業の対象外地で、少なくとも昭和30年代の地形がそのまま残っていた為と見る。他の調査区は開田事業により、一旦、地山のローム層土まで掘り下げて整地した後、今の水田土層を上に乗せ、一面に薄く(層厚20～30cm)押し馴らしている事がわかる(水田土層を剥ぐと下層はすぐに地山のローム層土である)。これに加え、遺構の掘り下げは調査の性格上(学術調査)一部分にとどめた為、出土遺物が少なかったものと思われる。四分割した掘形からの出土も2点のみにとどまり、出土量の多かった昨年度の調査とは際立った違いを見せた。

(2) 以下、出土遺物について述べる。

① 須恵器

調査区	器種	実測図No.	時代	備考
12	坏蓋	1	7世紀後半	20号建物の礎石を覆う攪乱土層より出土。
	〃	2	7世紀前半	〃
	〃	3	7世紀前半～中葉	〃
	〃	4	〃	〃
	〃	5	7世紀中葉～後半	〃
	〃	6	7世紀後半	〃
	〃	7	〃	〃
	〃	8	〃	〃
	〃	9	〃	〃
	〃	10	7世紀前半	〃
	〃	11	7世紀前半～中葉	〃
	〃	12	8世紀	〃
	〃	13	〃	〃
	〃	14	〃	〃
13	坏身	80	8世紀	21号建物の礎石を覆う攪乱土層より出土。
	〃	81	6世紀後半	〃
	甕	83	8世紀～9世紀	〃
	高台付き碗	84	7世紀後半	〃
14	坏蓋	114	7世紀中葉	24号建物の礎石を覆う攪乱土層より出土。
	〃	115	6世紀後半	〃
17	高坏の身	136	7世紀後半	南側八角形の心礎の掘形より出土。
	甕	137	8世紀	南側八角形の再建期、掘形より出土。

第42表　須恵器分類表

〔小結〕

須恵器の年代は12次調査と同様に7世紀後半のものが多い。さらに前年度の調査で問題となった7世紀前半～中葉のものも相変わらず目立つ。少量ではあるが、8世紀代のものも出土した、鞠智城の築城時期の問題と搦めて今後の大きな研究課題である。

② 土師器

点数は少ないが下記の様に、今回、9世紀前半から後半にかけての高台付き椀が出土している。「文徳実録」及び「三代実録」にいう鞠智城の終焉時期に見合う遺物であるが、出土した須恵器の年代と一致しない。

この高台付き椀の土師器は第12次調査でも出土例がある。器形の復元には至ってないが、89－1調査区(宮野礎石建物の南側調査区)の攪乱土層(地山直上)からの出土は11点を数える。しかし、同時に出土した須恵器は6世紀後半(1点)、7世紀初頭(2点)、7世紀前半(1点)、7世紀中葉(2点)、7世紀中葉～後半(2点)で、年代が一致しない。数は少ないが同じく出土した中世遺物(備前・青磁・白磁・糸切り土師皿)に関連するものであろうか。中世遺物の上限は12世紀まで遡る。この事は、第13次調査で出土した高台付き椀にも言える事で、今後はこの土師器に見合う須恵器の出土が課題となる。

調査区	実測図No.	備　考
12	28	赤彩土器
13	91	
	92	
	93	赤彩土器
	94	
16	126	

第43表　高台付土師器出土一覧

③ 南側八角形建物からの出土遺物

再建期の掘形から須恵器の甕片(No.137)(胴部片)が出土したのを初め、心礎の掘形から須恵器高坏(No.136)(坏部分)と土師器片(No.139)(胴部片)が出土している。これらの出土遺物から南側八角形建物の再建期の年代は少なくとも、奈良時代の8世紀にかかる事が推定される。

④ 布目瓦

〔軒丸瓦〕　第5次調査以来、実に13年振りに軒丸瓦の瓦当が出土した(No.121)。14区の23号建築址を覆う攪乱土層からの出土である。単弁八葉模様の百済系のものである。橙色で花弁は先端部を含め、全体がやや丸味を帯びている。花弁の残存最大横幅は3.5cmを測る。

〔丸　瓦〕　12区(No.79)と16区(No.134・135)から出土している。この中で135は瓦当が剥落した様な痕跡を残す。

〔平　瓦〕

＊出土量：全部で約110.3kgの出土があった。この中では、12区の瓦の占める割合が圧倒的に大きく、全体の96.6%にあたる106.5kgが出土している。

＊色　調：第13次調査で初めて瓦の色別を試みた。大きく7種類に大別できるが、その内訳と全体に占める割合は次の通りである。灰褐色(1.7%)白色(14.3%)、灰黒色(2.3%)、灰白褐色(14.3%)、灰色(13.1%)、茶色(1.2%)、褐色(42.9%)、橙色(10.2%)である。全体として褐色のものが群を抜いて多い。

＊調　整：第12次調査分と同様に、叩き(Ⅰ類)、条痕(Ⅱ類)、調整により叩き目が消されているもの(Ⅳ類)とがあった。この中では叩きの調整が目立った。なお、13次調査で、新たにⅣ類の中に帯状の圧痕があるものが見つかった(Ⅳb類)。

区	g	%
12	106,505.7	96.6
13	909.3	0.8
14	1,232.2	1.1
15	0	0
16	1,561.8	1.4
17	105.7	0.1
計	110,314.7	100.0

第44表　調査区毎の出土瓦の割合

色　調	g	%
灰褐色	1,821.8	1.7
白　色	15,821.2	14.3
灰黒色	2,586.7	2.3
灰白褐色	15,769.5	14.3
灰　色	14,483.4	13.1
茶　色	1,278.6	1.2
褐　色	47,292.3	42.9
橙　色	11,261.2	10.2
計	110,314.7	100.0

第45表　色調毎の出土瓦の割合

3.まとめ

今年度の第13次調査では、南北に並ぶ2棟の八角形建物が検出されたのを初め、14区から重複する3棟の建物(掘立－礎石－礎石)が発見される等、大きな成果を得た。又、13年振りに、百済系の軒丸瓦の瓦当が出土するなど、収穫は極めて大きかった。

次年度の調査はこれらの成果を基に、主として、測量及び発掘調査による城域の確定作業を行う計画である。

4.総　括

平成3年度の調査(第13次調査)は、前年度に引き続き、長者山から東側に広がる建物址群を、さらに町道一帯まで広げる事ができた。前年度の調査結果から、第5次調査(昭和54年度)の町道拡幅工事に伴う調査や、第4次調査(昭和44年)の不動倉礎石群調査の成果から見て、恐らく町道沿いまで建物群が連続的に広がるものと想定していた。第13次調査は、その確認調査であった訳であるが、その想定は的中し、新たに16棟の建物址を検出する事ができた。特に、町道に接した地点で、南北に並ぶ2カ所から4棟の八角形建物址を検出したが、この遺構は我が国の古代山城では初めての例であり、今次の調査の最大の成果という事ができる。以下、第13次調査の成果について略述したい。

建物の構造については、礎石建物5棟、掘立柱建物6棟、礎石・掘立柱の併用建物1棟、八角形建物(建て替え分を含めて)4棟の12か所16棟分である。この内、21号・22号・35号では、35号(掘立柱建物)→22号(礎石建物)→21号(礎石建物)の順に建て替えが行われており、21号の時期が出土遺物から7世紀後半であると推定できる事から、鞠智城の創建期を想定する資料と言えよう。

次ぎに八角形建物であるが、南北に2カ所、それぞれに一度ずつ建て替えが行われ、計4棟が見つかった。南北の間隔は約50mである。南側の建物(32・33号)は、直径80～85cmの心柱を中心に、8個づつ三重に掘立柱が巡っている。直径は9.2～9.8mである。北側の建物(30・31号)は、創建期が掘立柱建物、再建期が礎石建物で、二重に柱が巡っている。直径は9.6mであ

る。これらの八角形の建物については、道教思想との関連など、諸説が考えられるが、今後の調査にかかっていると言える。いずれにしても、この八角形建物は特異な建物であり、西側の長者山から続く建物群との関連から推測すると、鞠智城の重要な地点に当たる事が想定できるので、さらに東側一帯への調査が今後の鍵であろう。

また、韓国の二聖山城跡の調査者、漢陽大学教授のキム・ビョンモ氏が鞠智城跡を視察された折に「溜池」の所在がどうなっているかの指摘があった。確かに現在の所「溜池」は不明である。関連するであろう地名に「池の尾」があるが、その「池」がどこであるのか、今後の大きな課題として調査を進めて行くべきであろう。

その他、鞠智城の創建の時期は今のところ解明できていない。7世紀後半には存在していたことは出土遺物等からも確認できているが、さらに、どの時期まで遡ることができるのか、その可能性の端緒が伺える成果があがっている事は事実である。

〔 隈　昭 志 〕

〔付論〕韓国の二聖山城について

今年度の第13次調査で鞠智城跡より検出された八角形建物址のルーツは、韓国の「二聖山城」にあると思われる。そこで、県では古閑三博県議会議長を中心に、二聖山城視察メンバーを構成し韓国へ渡った。その結果は下記の通りである。

二聖（イーソン）山城を視察して　（踏査日：1992年3月25日）

二聖山城視察メンバー：古閑三博（県議会議長）　松見広海（議会事務局長）
島津義昭（文化課調査一係長）　大田幸博（文化課参事）

調査団は二聖山城を調査した（5次調査まで行われている）キム・ビョンモ漢陽大学教授と会い、教授から示唆を受けた上で、同大学院生の案内で山城を視察した。結果は下記の通りである。

① 二聖山城は6～9世紀代の包谷式山城とされるが、地形的に鞠智城の米原台地と極めて似通ったものがある。八角形を初めとする多角形建物の検出箇所は、鞠智城で云う内郭の土塁線（灰塚～佐官ドン）上に他ならない。

② 二聖山城の八角形は礎石建物である。構造的には中心部が四角形で、周辺が八角形となっている。鞠智城から検出された北側の八角形礎石建物は、今日、礎石が総て抜き取られて、中心部は円形状の窪地となっているが、建築当時は二聖山城形式であった可能性が濃い。

③ 二聖山城では八角形と九角形の建物がセット関係にあると考えられている。この事から鞠智城において南と北から検出された2棟の八角形建物も同様にセット関係にあるのではという推論が出てきた。

④ 二聖山城では九角形建物が天壇、八角形建物が地壇・社稷壇、十二角形建物が望楼と考えられている。

⑤ 二聖山城から、土馬・鉄馬（長方形礎石建物から出土）と仮面（池から出土）が出土している。この事は城内で祭礼が行われた事を意味する。土馬の埋納は雨乞いの意味があると考えられている。

⑥ 韓国の古代山城で、八角形建物と九角形建物がセット関係として見つかった例は2城に過ぎない。この二聖山城と、他方、雲住山城（周留城）〔忠清南道燕岐郡〕である。但し、雲住城の場合は踏査によって露呈状態にある礎石が確認された段階に留まる。

⑦ 二聖という地名は古代山城と密接な関係があるのではないかと思われる。二聖山城は云うに及ばず、雲住山城の隣接地にも二聖山という地名がある。日本の例では大野城の大野山を俗

名で二聖山という。一方、二聖山と耳成山はハングルの発音では同音であるので、これらの事を含めて、鞠智城周辺の地名に二聖と耳成がないかどうかを洗い直す必要がある。山城の近くに住むとされている神の名(イッセイ・イッソン)に関係あるのかも知れない。(キム・ビョンモ教授の見解と示唆)

二聖(イーソン)山城

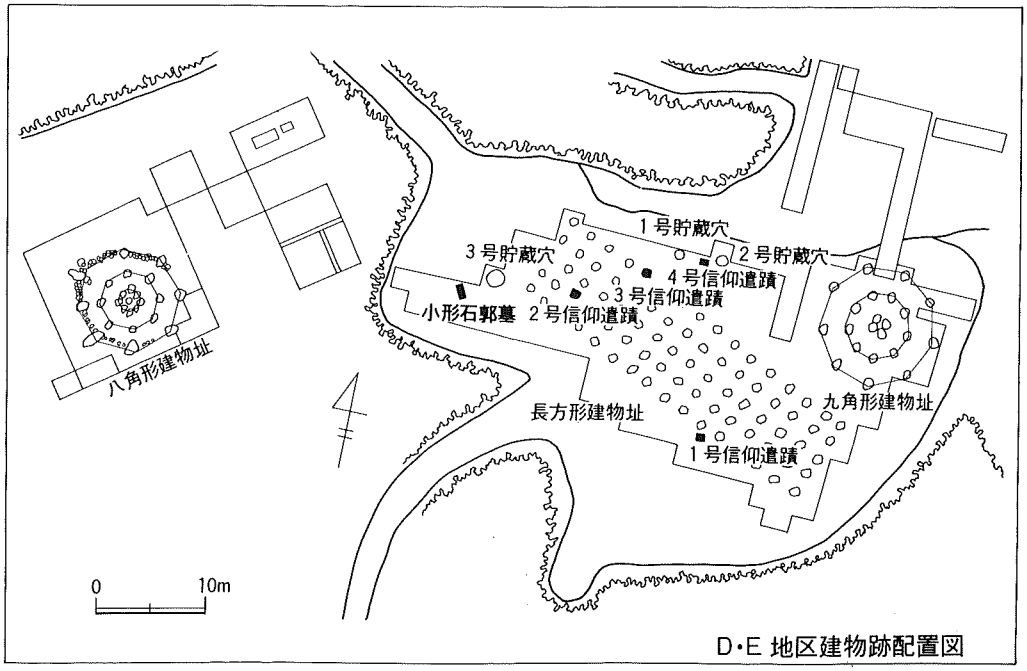
〔所在地〕　大韓民国京畿道河南市春宮洞36番地

海抜209.8mの二聖山に築城された包谷形の石築山城である。

発掘調査は百済都城の究明を目的にし、漢陽大学により、1986年を初めとして今までに5回行われている。

城の周囲は1.925km、城壁の高さ3～4m、城域155.025km²に達する。　城内の構造物は4棟の長方形建物址を初めとし、九角形建物址と、八角形建物址の他、十二角形の建物址が発見されている。いずれも礎石建物址である。

城の年代は、6世紀の中葉に築城され、9世紀末まで使われている事がわかる。



〔漢陽大学校博物館叢書第5輯『二聖山城』1987〕

第49図　韓国 二聖山城 建物址配置図

KUKUCHI NO KI

Place : Yonabaru, Kikuka-machi, Kamoto-Gun, Kumamoto-Ken, Japan

(1) HISTORY

The first history book written about KUKUCHI NO KI is " Shoku-Nihongi " Chronicies of Japan. The first record, of May 25, 698, explains that three castles, in KUKUCHI, OHNO, and KII, underwent renovation. " Shoku-Nihongi " contains a article written about KUKUCHI NO KI in the middle of the ninth century. The last article, from June 20, 879, tells of the castle drum in the weapon-house that mysteriously sounded itself.

All these things make it clear that KUKUCHI NO KI, along with OHNO NO KI in Fukuoka and KII NO KI in Saga, is ancient castle of 1300 years.

In those days, DAZAIFU was established by YAMATO court in order to rule Kyushu. KUKUCHI NO KI, OHNO NO KI, and KII NO KI were built for the purpose of protecting DAZAIFU.

(2) LOCATION

KUKUCHI NO KI one of the ancient mountain castles constructed on Yonabaru Plateau, 140 to 170 meters above sea level.

KUKUCHI NO KI consists of the inner castle (0.87 kilometers from east to west, 0.99 kilometers from nouth to south) surrounded by 40-meter-high cliffs and earthworks bordering the plateau, and the outer castle (1.55 kilometers from east to west, 1.13 kilometers from nouth to south), an enlargement of the inner castle.

In addition to this, lines of earthen borders (2.4 kilometers in the west, 0.9 kilometers in the east) were found in the surrounding mountains and plateaus. Those show that KUKUCHI NO KI was a mountain castle which needed great engineering.

(3) RESEARCH

Excavation and research of KUKUCHI NO KI was made 13 times from 1968 to 1991.

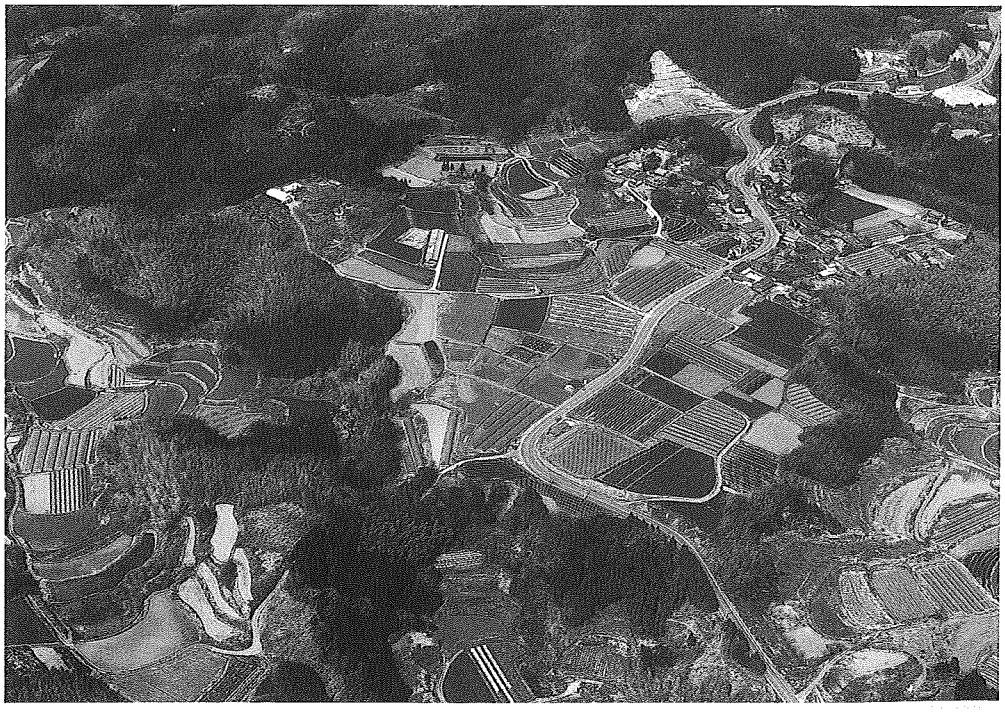
Structures discovered in the castle include rice-granaries and weapon-houses, 41 of them have been identified so far.

In the castle research of 1991, two octagonal structures were found. There were the first discoveries of such structures found in Japanese mountain castles.

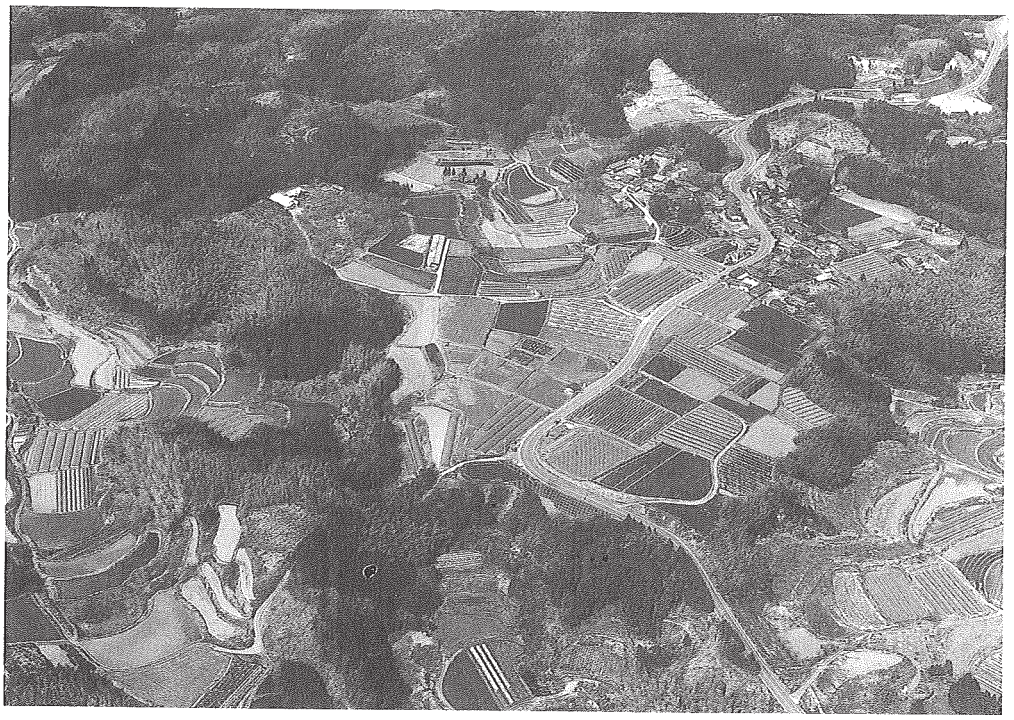
This proves that KUKUCHI NO KI is the ruin of the ancient mountain castle, influenced by the culture of the Korean Peninsula.

写　真　図　版

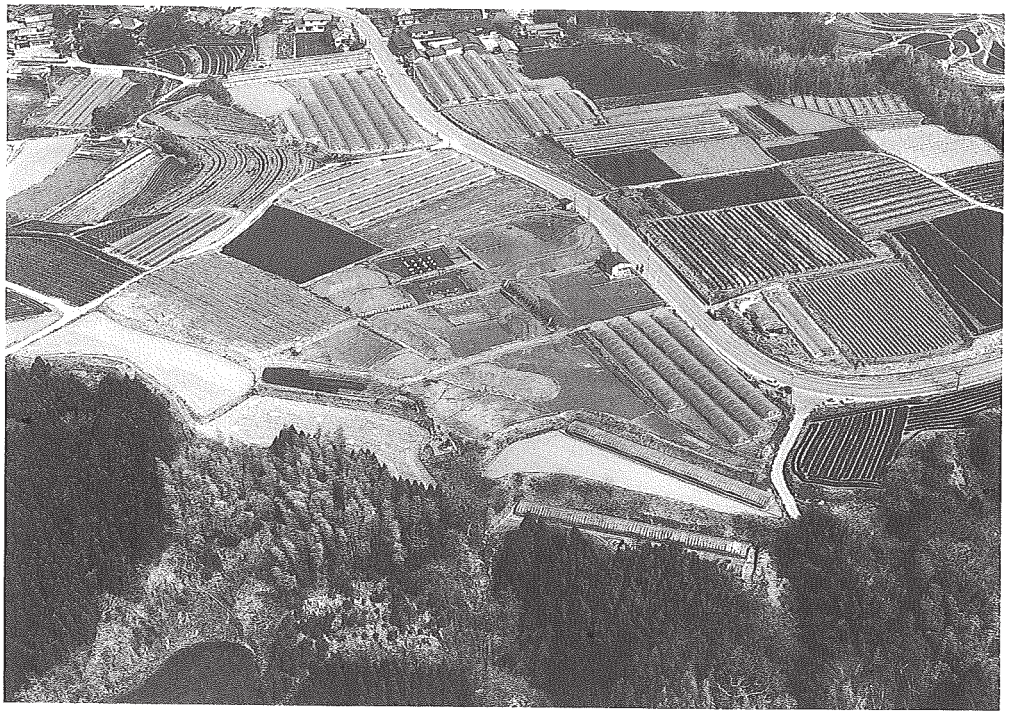
図版１　鞠智城跡航空写真(1)　遠景　南西方向より撮影



図版２　鞠智城跡航空写真(2)　遠景　南東方向より撮影

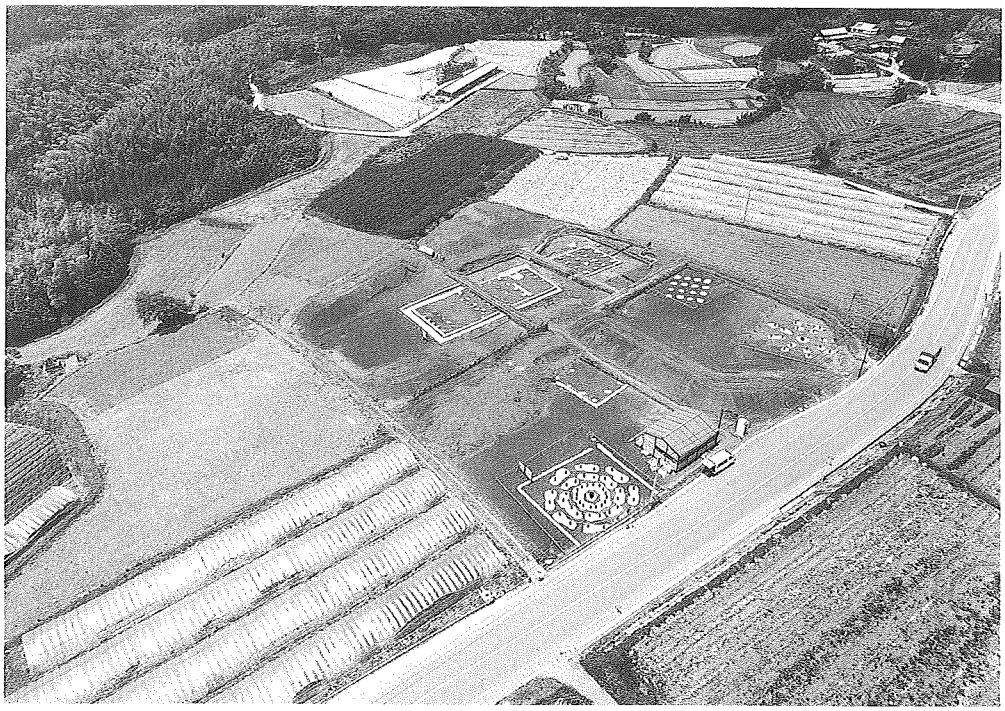


図版 3　鞠智城跡航空写真(3)　遠景　南東方向より撮影

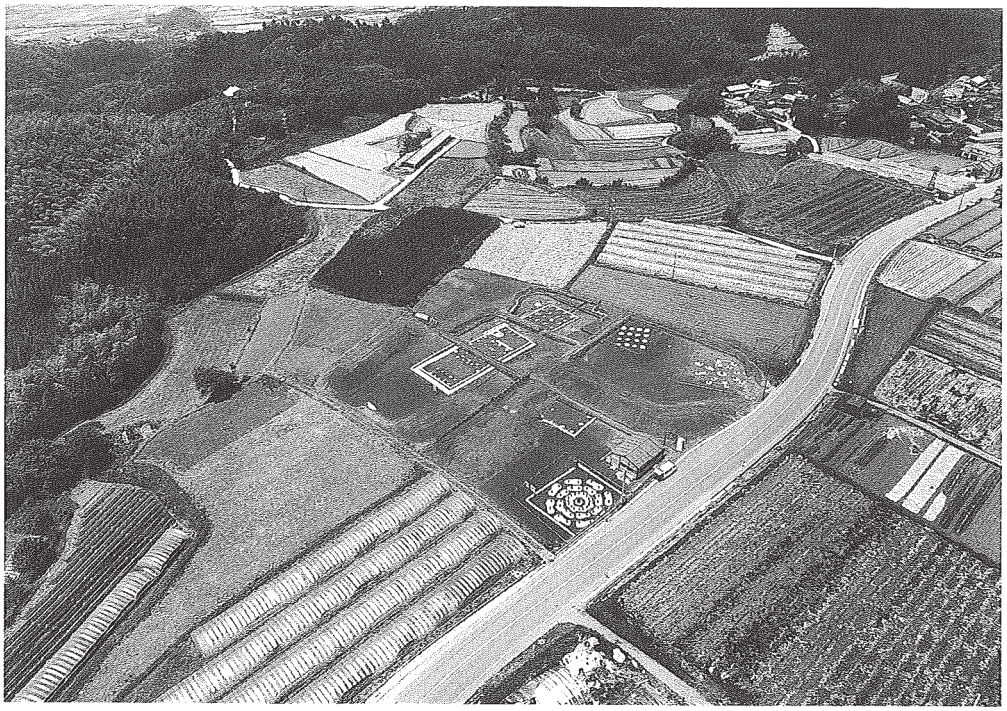


図版 4　鞠智城跡航空写真(4)　遠景　南方向より撮影

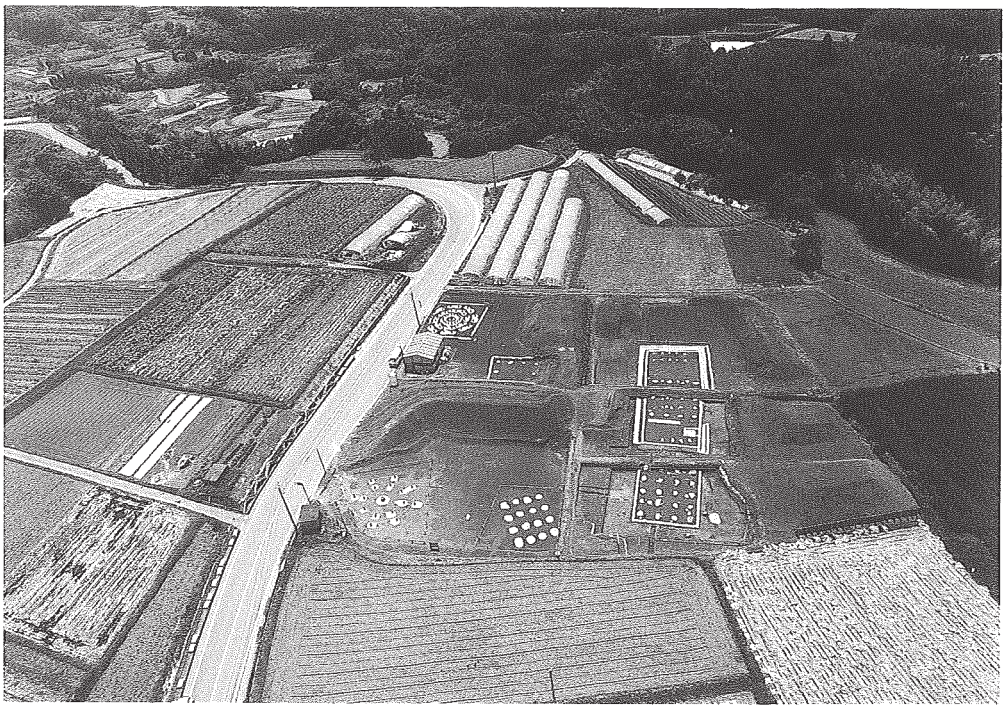
図版５　鞠智城跡航空写真(5)　近景　南東方向より撮影



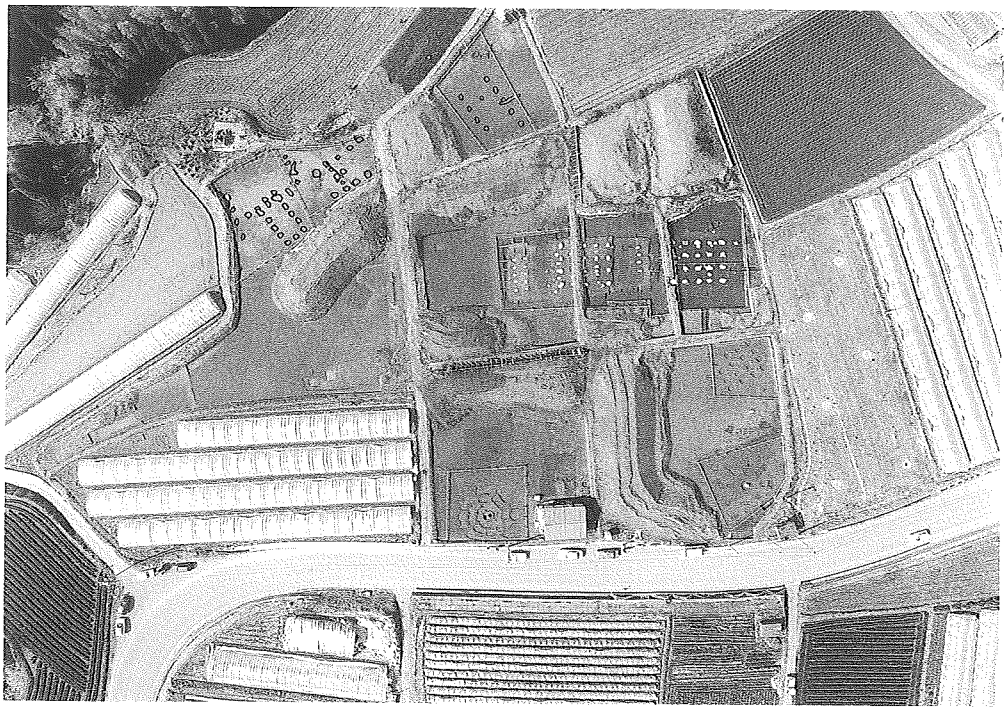
図版６　鞠智城跡航空写真(6)　近景　東側より撮影



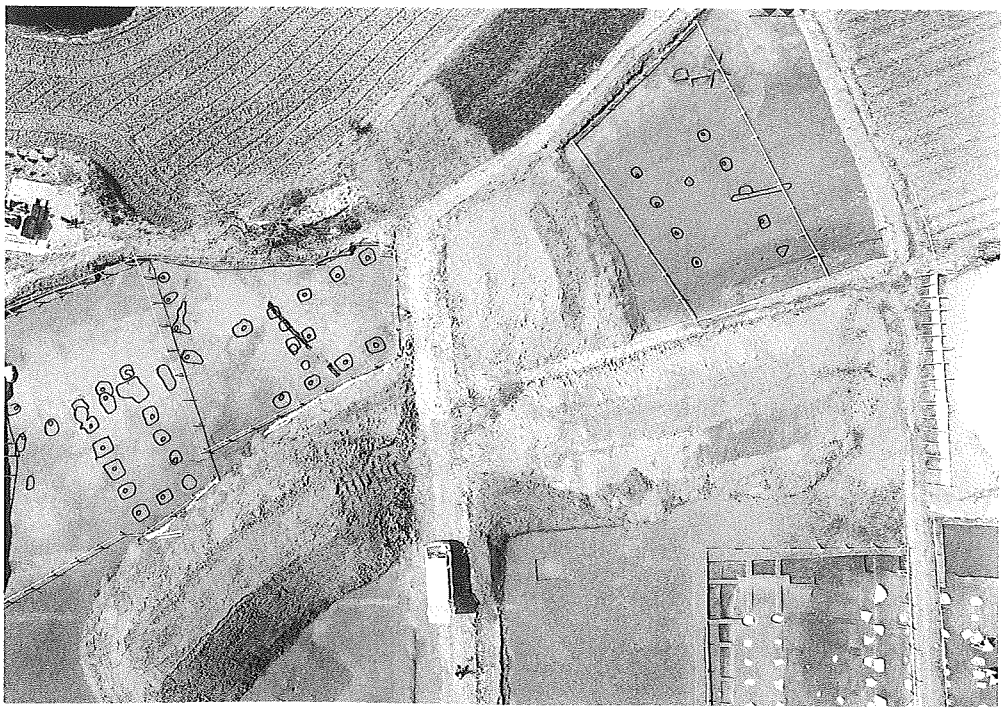
図版７　鞠智城跡航空写真(7)　近景　東側より撮影



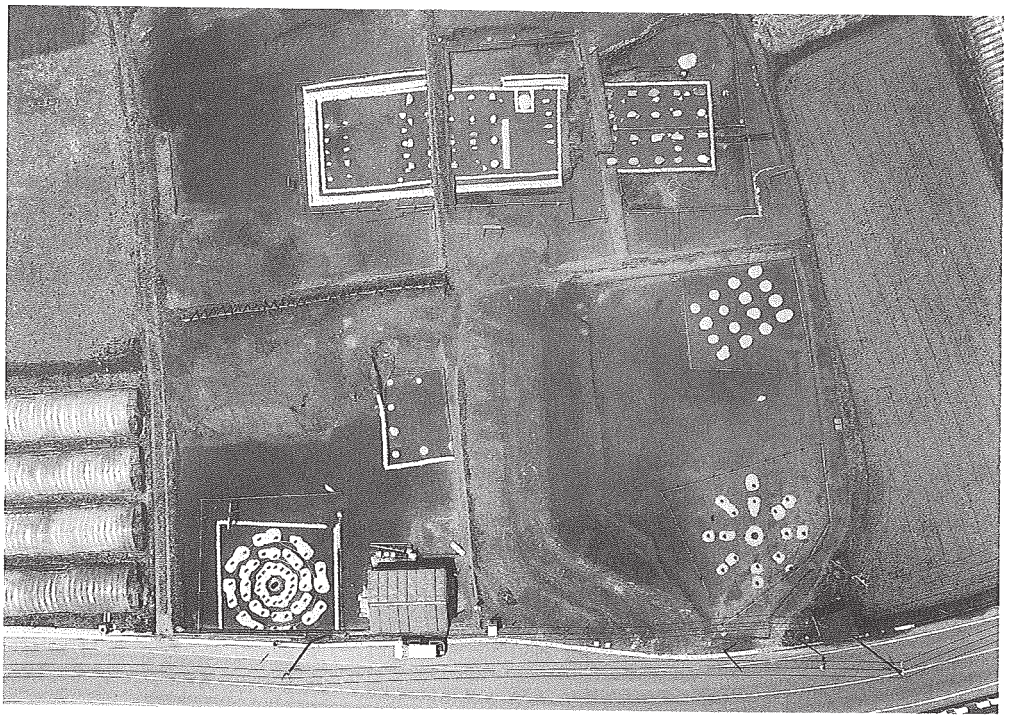
図版８　鞠智城跡航空写真(8)　近景　北側より撮影



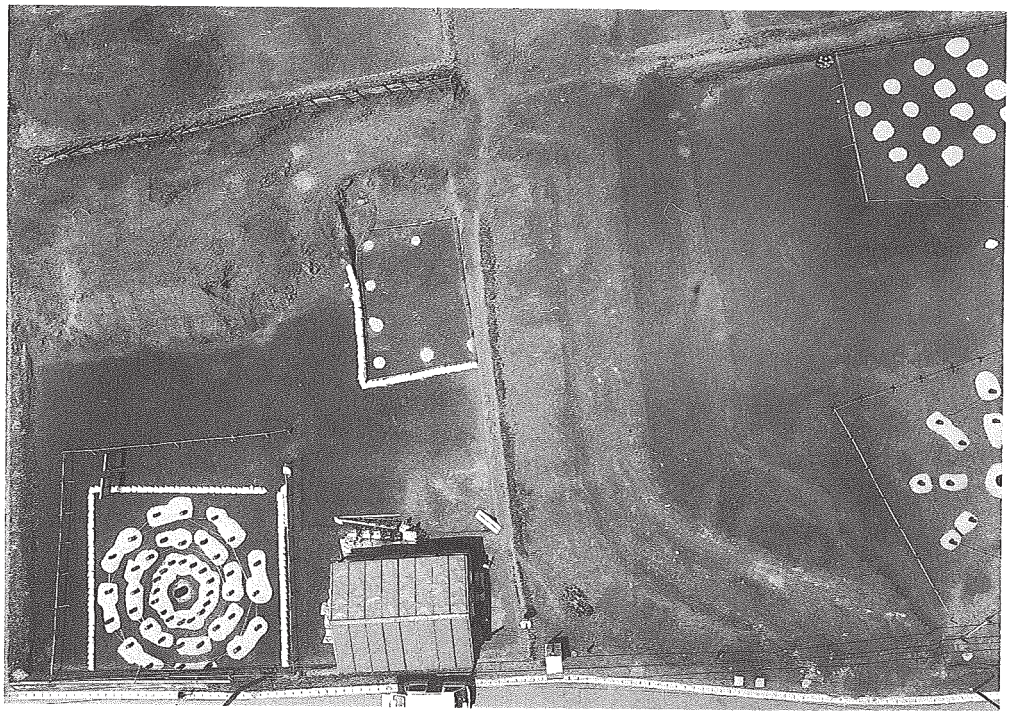
図版９　鞠智城跡航空写真(9)　近景　上空より撮影



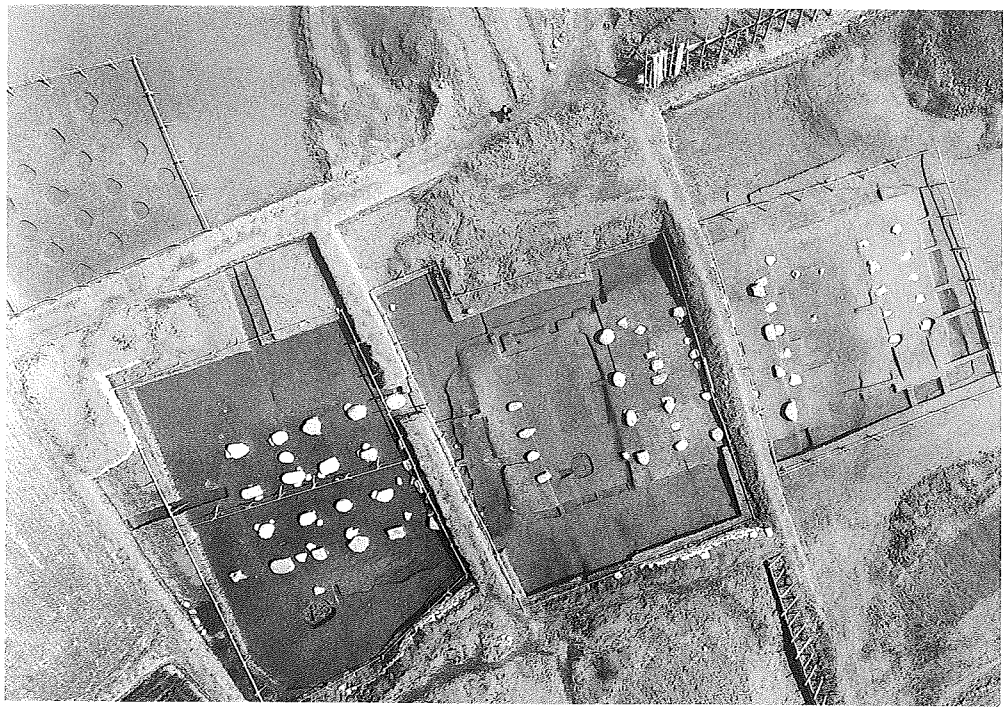
図版10　鞠智城跡航空写真(10)　接写　24・27・28・29号建築址



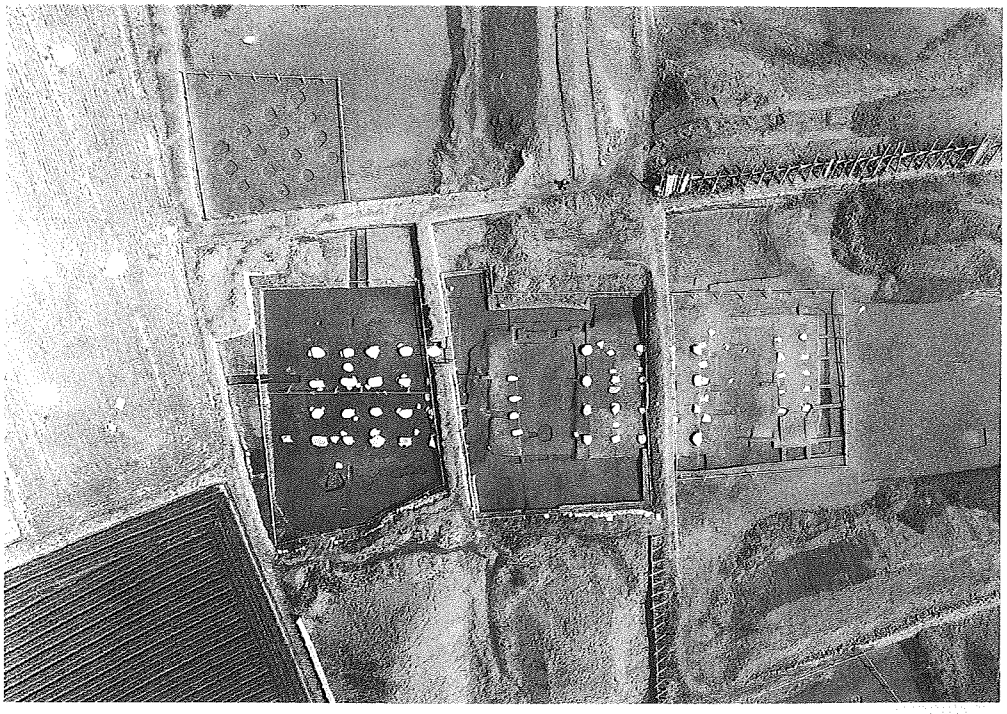
図版11　鞠智城跡航空写真(11)　接写　20～23・25・26・30～33号建築址



図版12　鞠智城跡航空写真(12)　接写　25・26・32・33号建築址

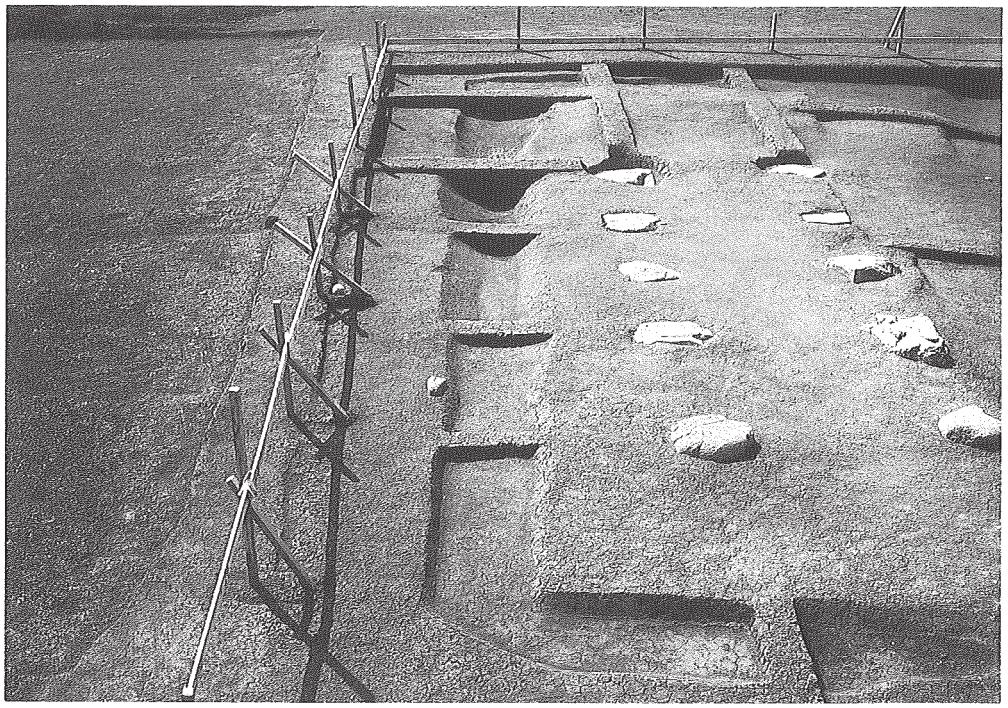


図版13　鞠智城跡航空写真⒀　接写　20～23号建築址（礎石建物址）

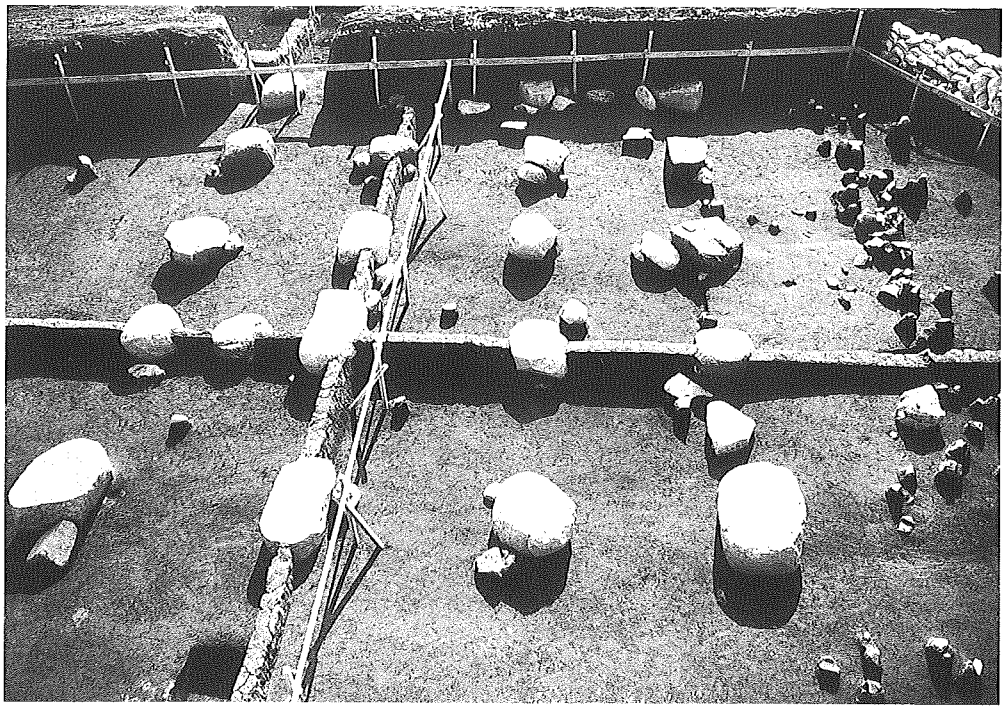


図版14　鞠智城跡航空写真⒁　接写　20～23号建築址（礎石建物址）

図版15　21号と23号の重なり合い状況



図版16　23号建築址南側端部と雨落ち溝



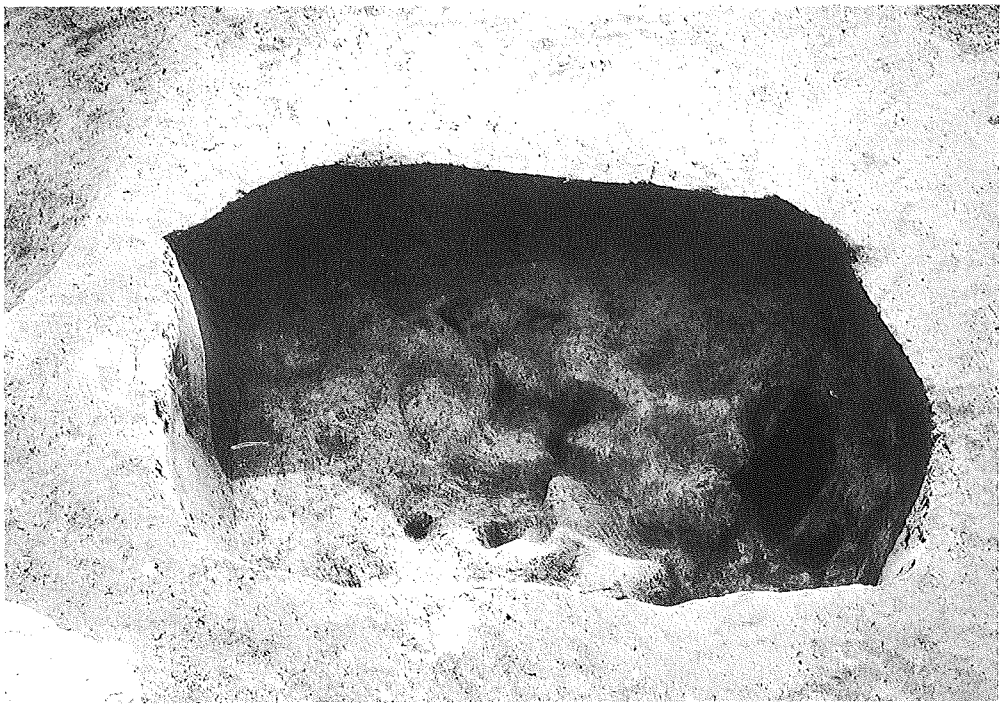
図版17　20号礎石建築址検出状況・布目瓦検出状況

図版18　21号と22号の重なり合い状況

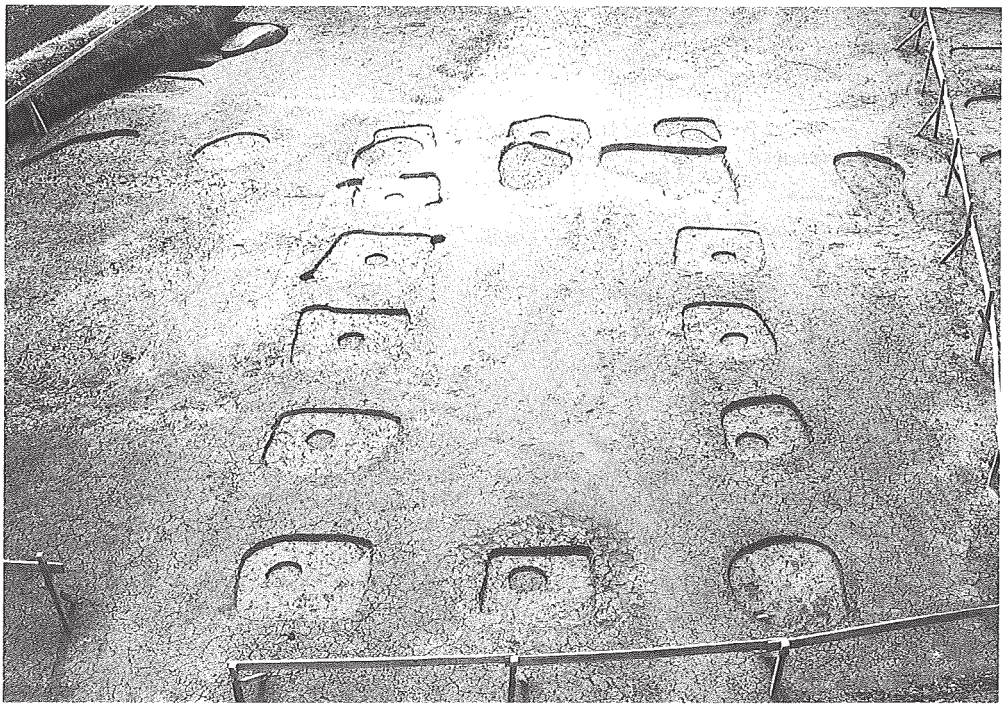
図版19　27号建築址

図版20　27号建築址

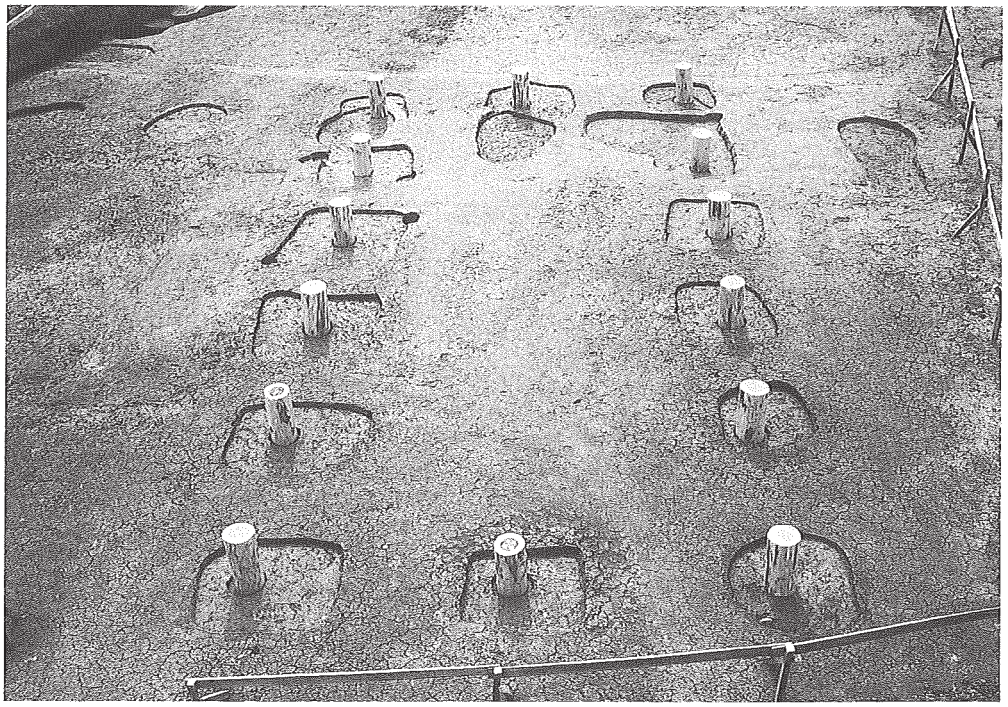
図版21　P117　掘形版築状況



図版22　12区より検出の土坑

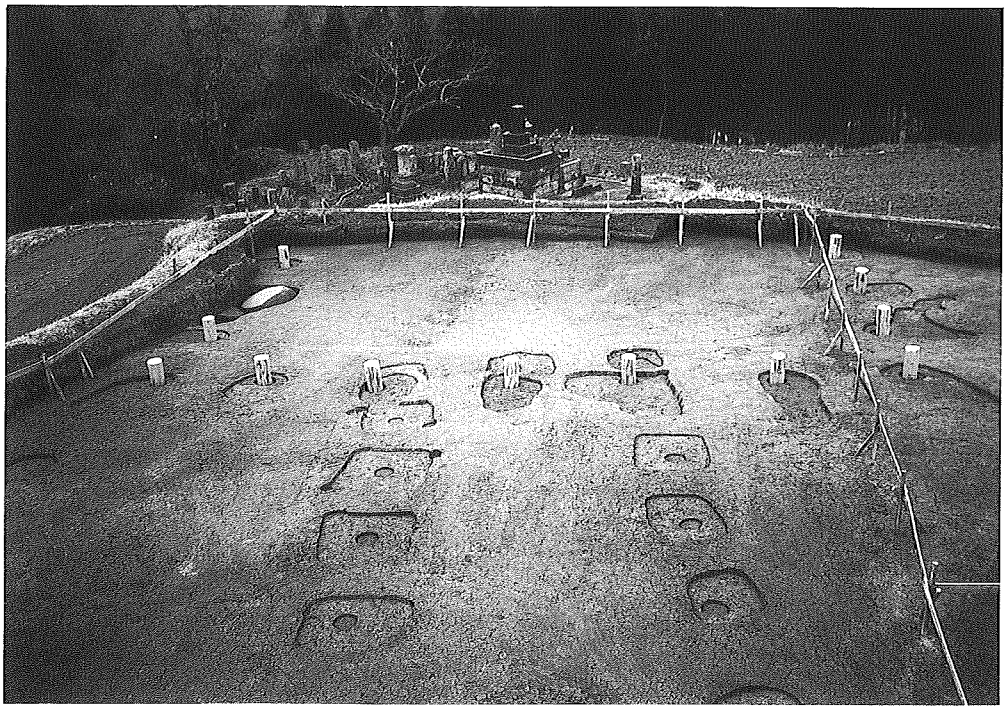


図版23　28号建築址

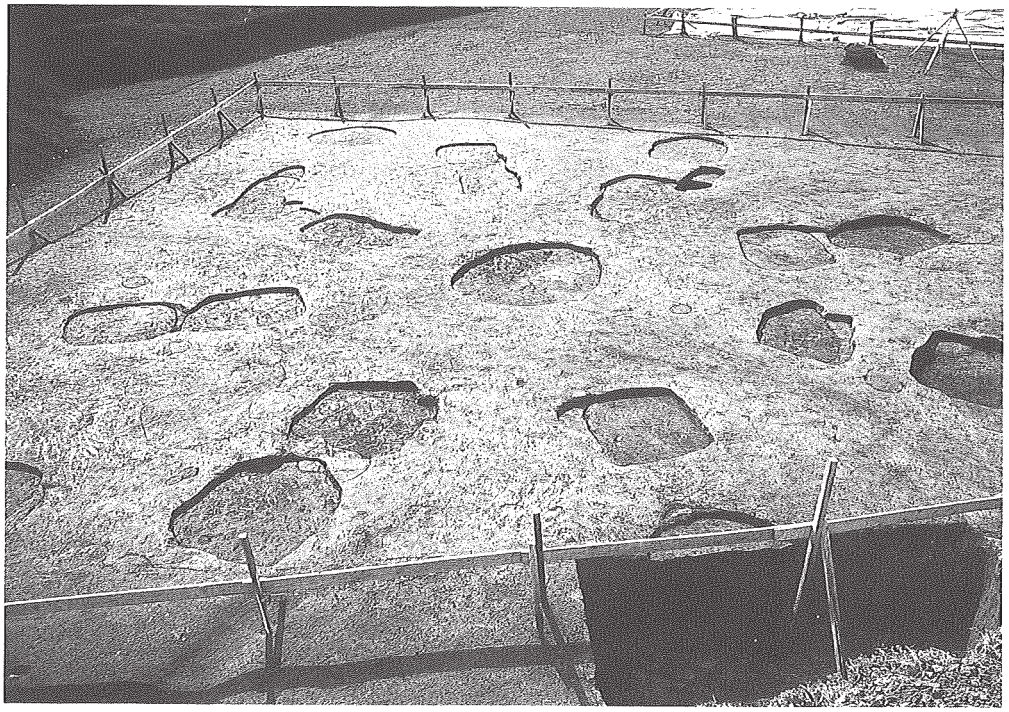


図版24　28号建築址

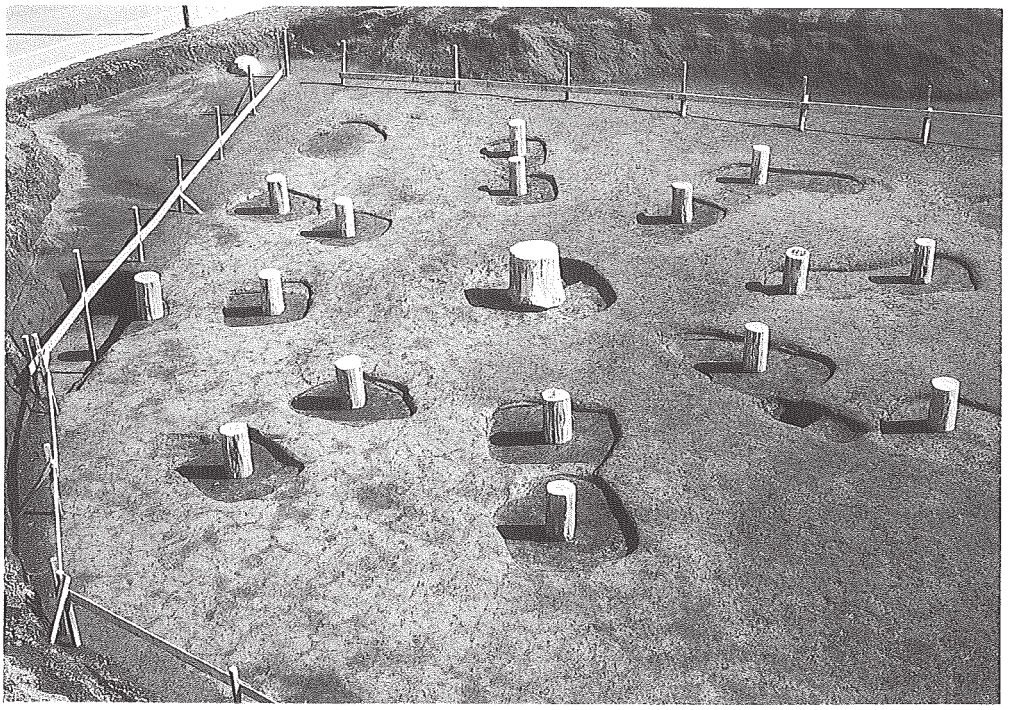
図版25　29号建築址



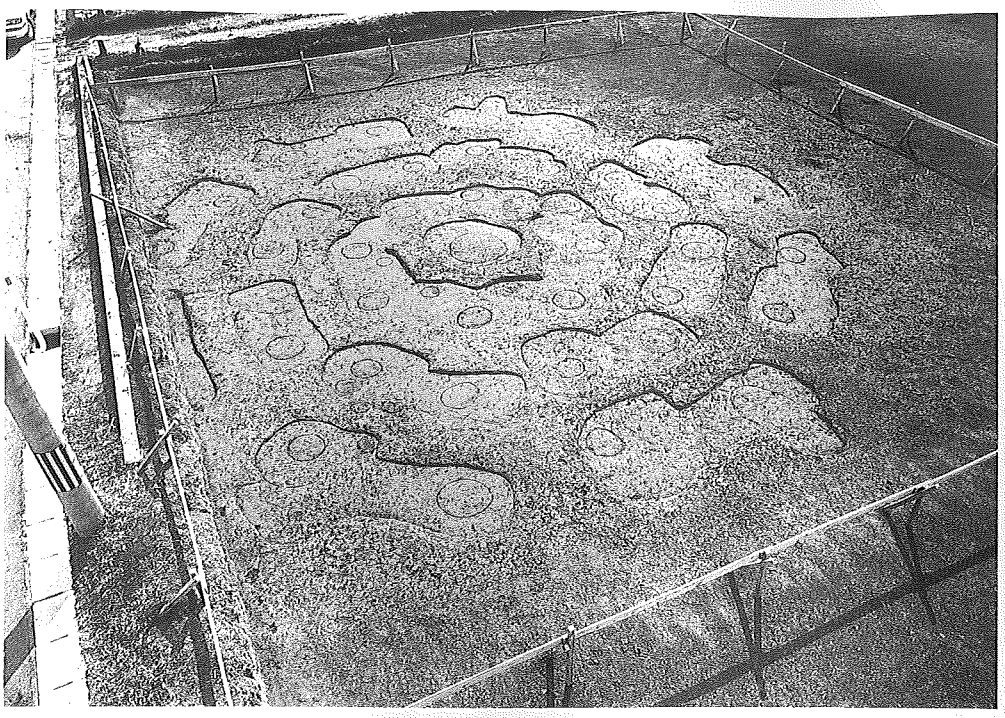
図版26　29号建築址



図版27　30・31号建築址

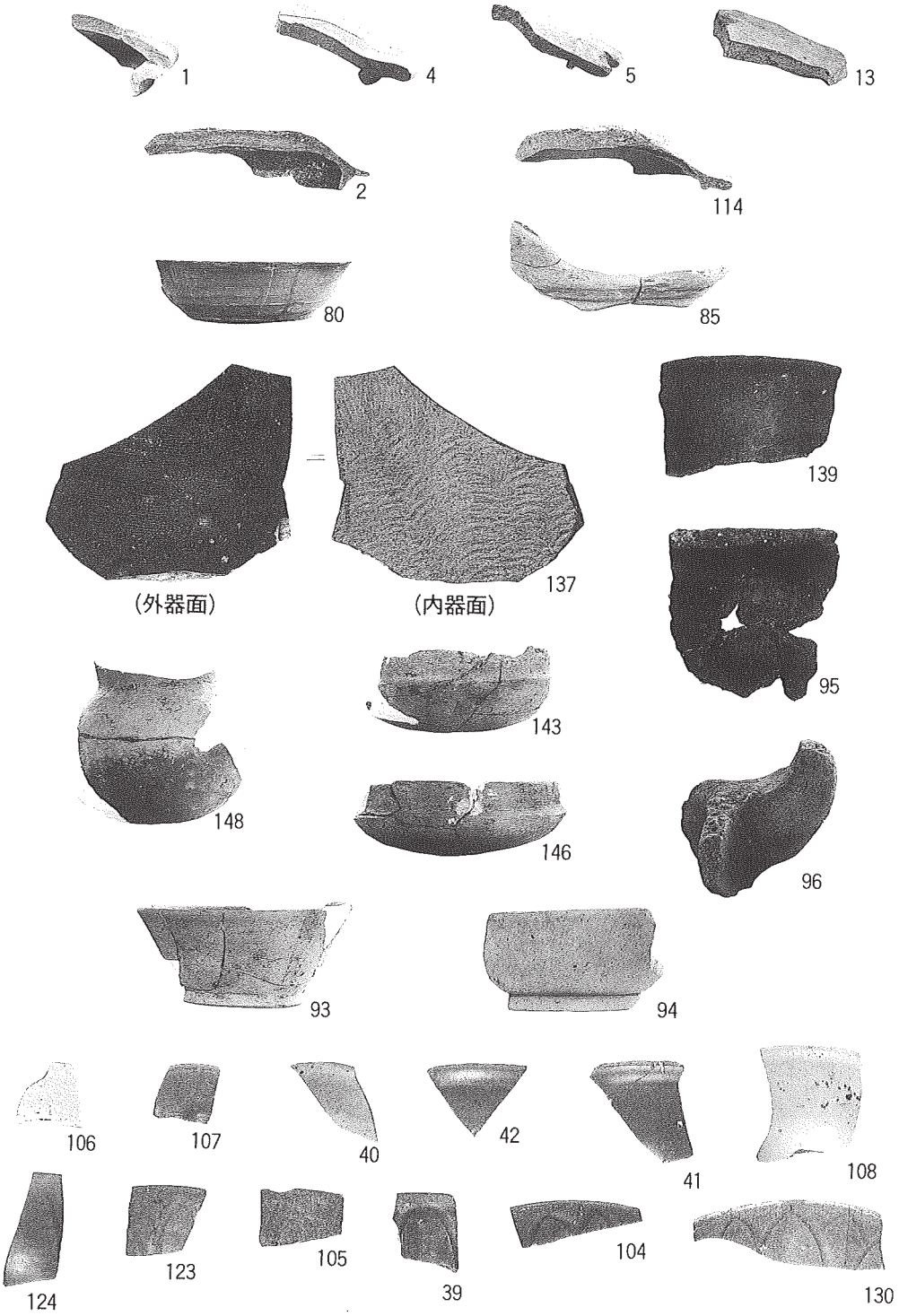


図版28　30・31号建築址

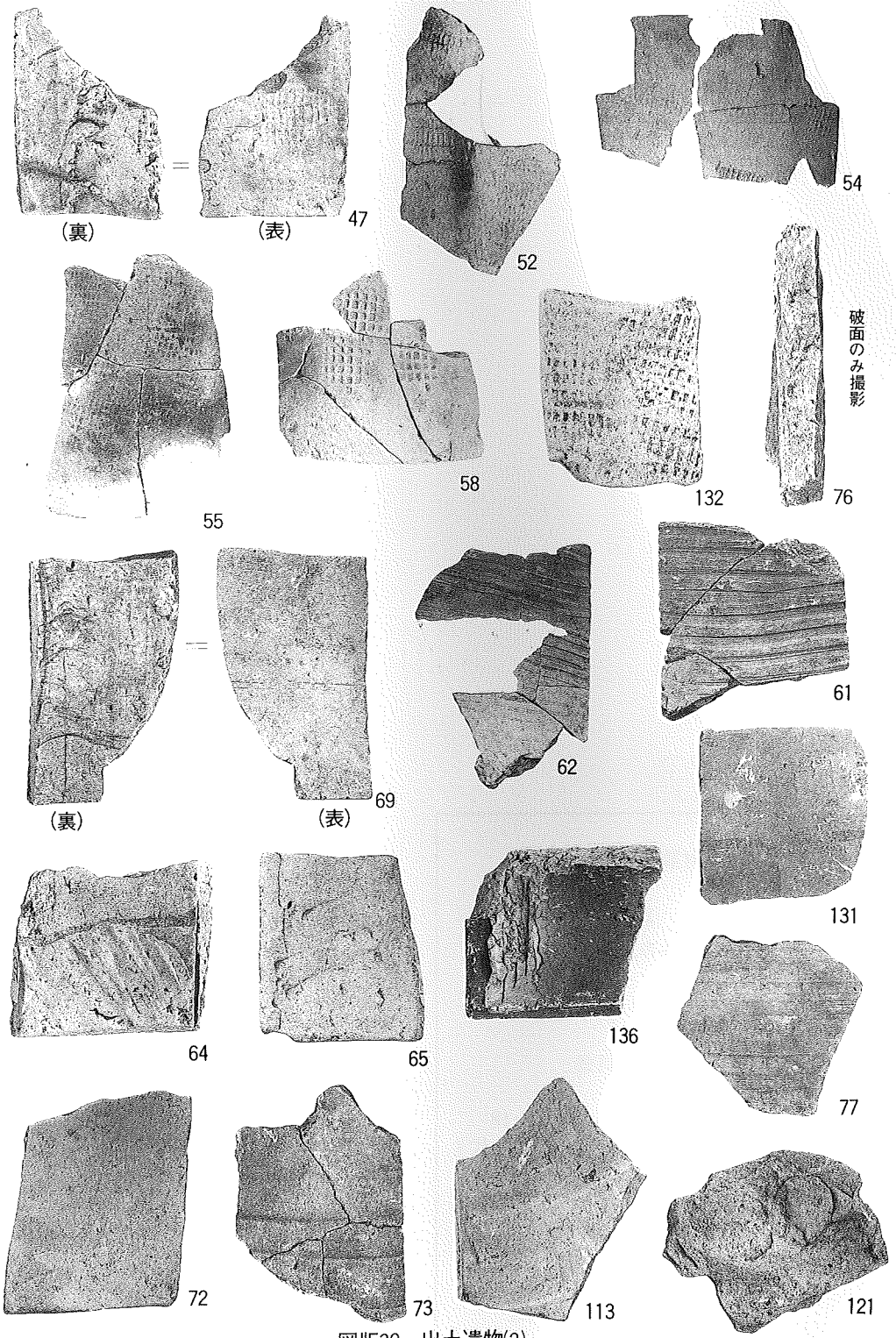


図版29　32･33号建築址

図版30　32･33号建築址


1
4
5
13
2
114
80
85
139
(外器面)
(内器面)
137
95
143
148
146
96
93
94
106
107
40
42
41
108
124
123
105
39
104
130

図版31　出土遺物(1)


(裏)
(表)
47
52
54
55
58
132
76
破面のみ撮影
(裏)
(表)
69
62
61
131
64
65
136
77
72
73
113
121

図版32　出土遺物(2)

熊本県文化財調査報告第124集

鞠　智　城　跡

——第13次調査報告——

平成４年３月３１日

編集発行：熊本県教育委員会
〒860
熊本市水前寺６丁目１－18
TEL　096－383－1111（代）
文化財調査第２係(内6716)

印　　刷：(株) 大和印刷所
〒862
熊本市戸島町 920－11
TEL　096－380－0303

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 124 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：鞠智城跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日